

平成十七年 二月 一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九三三号

川柳塔



百川協加盟

No. 933

二月号

お知らせ

本社2月旬会(2月7日・月)に限り、会場が変更になりますので、ご注意ください。

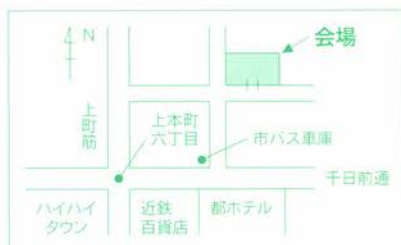
たかつガーデン 8階

(大阪府教育会館)

大阪市天王寺区東高津7-11

電話06・6768・3911

(近鉄上本町駅11番出口から徒歩3分) 地下鉄谷町九から(7分)



予告

6月12日(日)

広島原爆被爆60年追悼

全日本川柳2005広島大会

10月10日(月・祝)

第11回川柳塔まつり

10月29日(土)

第20回国民文化祭・ふくい2005川柳大会

第6回 文学ルート川柳募集

文学ルート(松江市・尾道市・今治市・松山市・高知市)

募集作品 文学ルート(5市)周辺の自然や衣食住・信仰・年中行事等に関する習慣・民俗行事などを題材とする川柳。(未発表のオリジナル作品に限ります)

宿題・応募先 (宿題に応じてご応募下さい。各2句)

松江市「橋」「神話」	松江市産業振興部 観光文化課 〒690-8510 松江市末次町86	TEL (0852)55-5293 FAX (0852)55-5564
尾道市「クレーン」「石畳」	尾道市企画部 観光文化課 〒722-8501 尾道市久保1丁目15-1	TEL (0848)25-7366 FAX (0848)25-7293
今治市「燈台」「楠」	今治市教育委員会 文化振興課 〒794-8511 今治市別宮町1丁目4-1	TEL (0898)36-1608 FAX (0898)25-1700
松山市「雲」「太鼓」	松山市総合政策部 国際文化振興課 〒790-8571 松山市二番町4丁目7-2	TEL (089)948-6634 FAX (089)943-9001
高知市「さんご」「闘犬」	高知市教育委員会 生涯学習課 〒780-0870 高知市本町4丁目3-30	TEL (088)822-6394 FAX (088)823-1095

応募方法

- 専用の応募用紙、または官製はがき、封書に書かれた作品(FAXによる応募可)。
- 応募作品には「宿題」及び、氏名(ふりがな)、郵便番号、住所、年齢、性別、電話番号等、必要事項を明記してください。(柳号の場合は本名も明記)
- 入賞作品の著作権は主催者に帰属します。応募作品は返却しません。1人2句以内。

応募締切 平成17年3月31日(木) (当日消印有効)

出品料 無料

選考表 平成17年5・6月

選考委員 平成17年7月、入賞者に通知します。(表彰式は、17年10月予定)

(第二次選考) 吉岡龍城・塩見草映・橋高薫風

(第一次選考) 武内すみこ(松江市)・角本華峰(尾道市)・田ノ窪岩泉(今治市)

一色美穂子(松山市)・尾崎呂谷(高知市)

賞 大賞 1点 奨励賞 5点 佳作賞 若干

句会を楽しむ

河内天笑

句会のはたのしい。小さな会も大きな会も、それなりの味があつてたのしい。また句会場には川柳の神様が住んで居られて、私達が会費を払つて出席簿に記名をし、句箋を戴いてどっこいしょと好みの席に座ると、どの客人にも神様が「よう来たよう来た」と仰つてくれるような気がしてならない。仲間や友人と挨拶を交わすのもまたたのしい。お互い、心もち笑顔で元氣な顔を確かめ合う事はこの上ないたのしみである。そんな時、何故か神様と挨拶をかわしている様な不思議な気分になれるので川柳は有難い。こんな一連の動作にも川柳の魔力が潜んでいるのだろう。ひと通り挨拶もすむと、句箋へ向かつて推敲を重ねながら力作を認める。

時代は三十年程バックするが、いつも出句締切20分ぐらい前に現れる好作家が居られた。役者顔をした針金職人で菊澤小松園と言う。常にオール席題で挑んでいる私に、彼は何じゃかんじやと話かけてくれる。話を聞いたり聞かんだりして、出来た順から投句箱に放り込む私のスタイルはその頃から変わっていないが、彼は喋りながらもちゃんと抜ける句を書いて居られた。いざ蓋を開けると小松園、

小松園とうるさいくらい独特の間のびした呼名がある。ごちやごちやと喋りかけるのは決して勧められないが、こういう御仁に鍛えられるのも修行の内、決して不愉快に感じたことはない。ご本人はとても好人物で、生前はずっと可愛がつて下さった。

さて、川柳塔本社新年句会のご挨拶で皆様にお伝えした私流の句会の楽しみ方を紹介します。当日出席者は一二三名でお題は席題とも六つ。故寺尾俊平先生と麻雀卓を囲みながらの雑談で得たヒント以来、ずっと実行しているのですが、選者の披露が始まったら、自分が選者になった気持ちで披露される作品の一つ一つを傾聴し、自分の耳で飾にかけてこれと思う作品が披露されるや、即座にそれを正確に書き取つて（勿論作者名も）ゆく作業をお勧めします。耳から入る作品の良さは句会に参加した人のみ知り得る宝物なのです。この作業を始めた約10年前は一つの句会で五、六句書き残すのがやつとしたが、ここで得たものは、選句力、集句力、記憶力、そして注意力、これらはすべて私に力をつけてくれています。どうぞ、お試し下さい。

飲み過ぎんようにと注いでくれている

震災十年 禁煙十年目に入る

お近くの内科で見て貰いなさい（大阪労務病院の手を離れる）

脳梗塞と違てよかった胸を撫で

笑いとばして弱味を塗り潰す

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

(路郎)

私の句

やりとげた男は荷物おろさない

太田 昭

川柳塔 二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 句会を楽しむ

川柳公園

河内 天笑 …… (1)
濱野 奇童 …… (2)

川柳塔(同人吟)

河内 天笑 選 …… (4)

川柳塔の川柳讃歌 (2)

木津川 計 …… (54)

自選集

奥田みつ子 選 …… (59)

水煙抄

同人特集 親子百句

愛染帖

波多野五楽庵 選 …… (83)

誹風柳多留二四篇研究 75

茴香の花

政岡日枝子 選 …… (88)

川柳公園

濱野 奇童

平成十六年は文字通り苦難の年であった。中越地区で震災に遭われた皆さんは、どんなお正月を迎えられたのだろうか。お見舞いを申し上げるしかない身の、もどかしさに耐え切れない気持ちである。地震は予測もなくやってくるから本当に怖い。全国を隈無く荒らした台風も、すごい被害をもたらした。災害の少ないと言われる岡山県でさえ例外ではなかった。高潮被害・倒木被害と大変だった。川柳公園も樹齢七十年を超える杉の太木を初め五本が根こそぎ倒された。句碑も八基が影響を受けた。太木の株の処理は素人にとって大変な事であった。地区同人総出での作業である。持ち寄ったチェーンソー、三きり柱、チェーンブロックと与作気取りで二時間を越える大手術で除去作業を終った。

川柳公園は、昭和五十二年「久米南町過疎地域進行計画事業」として、弓削川柳社が町の助成を受けて荒山を切り拓き、二十六名の句碑を建立したのに始まる。事後毎年数基ずつ建立が続き現在は、二百五十四基二百六十五人の句碑が立ち並ぶようになった。第一公園は、元西山

「逃げる」	福本英子選	(90)
一路集「短 い」	本吉宗光選	(90)
「わくわく」	山川日出子選	(91)
初歩教室「しぶちゃん」	三宅保州	(92)
秀句鑑賞	玉置重人	(94)
同人吟	池内かおり	(100)
水煙抄	木村あきら	(101)
滝井勝君の長逝を悼む		
一月本社句会		(96)
各地柳壇(佳句地十選／菊地政勝)		(102)
■エッセー にわとりに合掌	酒井一壺	(116)
柳界展望		(117)
二月各地句会案内		(118)
■編集後記	楓葉・朱夏	(120)

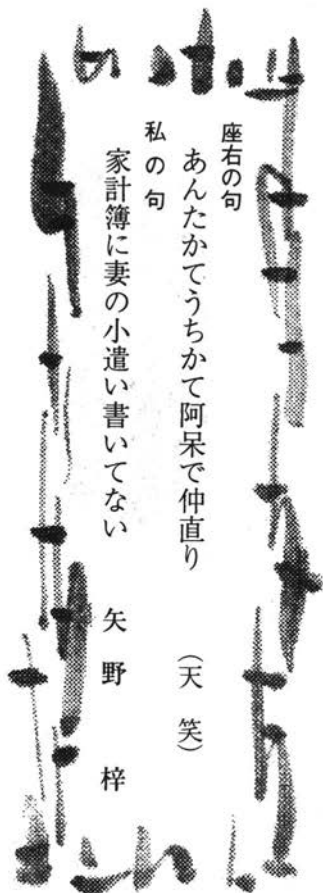
座右の句
私の句

あんたかてうちかて阿呆で仲直り

(天笑)

家計簿に妻の小遣い書いてない

矢野 梓



寺のあった地であるが、その六角堂跡地に、昭和五十七年中島生々庵先生の句碑を、対面して三条東洋樹先生の句碑を戴くことが出来た。これを切っ掛けにして、生々庵先生の句碑を囲んで、西尾葉・橘高薫風名誉主幹の句碑が建ち、前田伍健・小松原爽介・梶川雄次郎・斎藤大雄・大野風柳・寺尾俊平・山本芳伸氏ら著名人の句碑が並ぶ。これらの人々が柳論を戦わす公園に育ってきている。

公園の管理作業は川柳社の会員によって行われている。汗を流した後、パンとジュースをほおばりながらの楽しい雑談。思い思いの川柳談義が弾む。昭和二十五年、弓削駅前麻生路郎先生の句碑が建立されたが、これもすべて会員の奉仕によって建立したので。汗と奉仕が川柳人のモットーなのである。

小径を上り切ると公園の姿が見られる。春は桜、夏は緑陰、秋は紅葉とそれぞれの顔を見せてくれるが、落ち葉した裸木の間に、五十数基の句碑が白く光る。冬の貌もまた捨てたものではない。「句碑は作家個人を記念するだけでなく、川柳を知らない人達も、何かの機会に句碑を見、句碑に彫られた句を読む事によって文化の道しるべとなる場合も多いであろう」路郎先生のお言葉である。今朝も、寒さの中をジョギングの人に出会った。



河内天笑選

吹田市 山本 希久子

迷うのはいつもおんなじ曲り角
副作用らしいふところ寒くなる
わたくしのハートに指紋つけた人
科学万能へ天災おそるべし
いつも笑顔で涙こっそり拭いている
ぶつきら棒な返事にあつた温かみ

西予市 黒田 茂代

口笛を鳴らし木枯し駆け抜ける
貰うにもあげるにもあるタイミン
自画像を描き続けている日記
似合わない だから買わずに済みました
古典好きDNAが棲んでいる
落葉降るばかりあなたの居ない街

東京都 清原 悦子

名水を尋ね歩いて生き返る
苦勞した母に無邪気な顔がある
笑つても泣いても見えてくる答

老いを看るいつか誰もが通る道
平凡のところどころで泣く事も
一年の無事見守って古時計

鳥取県 澤

裕子

ラーメンが冷えた体を春にする
しまい風呂ゆつくり今日を解きほぐす
赤い糸神がこっそり結んでる
年金というパトロンが喘いでる
限りある命ゆつくり生きていく
菓子箱の底に不明な金がある

藤井寺市 中島 志洋

金で済む話が金で揉めている
世話やきが動くと碌な事がない
口下手の言った話に嘘はない
その話飲まずに言つてほしかった
占いはどうであろうと好きな人
苛められた過去を忘れて姑看護

鳥取市 岸 本 孝 子

姑が逝きいくさも語り種となり
空腹の熊にも情け柿残す
頼みごと ことばに少し化粧する
お守りの保険に欲が絡み出す
遺産分け済んで故郷が遠くなる
貯えは未練残さぬほどにする

鳥取市 岸 本 宏 章

挙手というひとつも重い意志表示
子や孫へ残す道路も借金も
ケイタイの見えぬ鎖で繋がれる
政治面よりも見ているテレビ欄
生返事で逃げねばならぬときもある
ラストシーンの涙はいつも美しい

藤井寺市 鴨 谷 瑠 美 子

よく笑うひとが静かで気にかかる
乗り越した電車に影を置き忘れ
動揺を隠して手紙封を切る
ファックスもハガキも用事しか書かず
恋一途意志の強さを見せつける
群を出る少し勇気のあるうちに

堺 市 志 田 千 代

用のない時も電話をしてくれる
そっくりの姉妹の婿が似ていない
里帰りノートパソコンひっさげて

酒好きの医者にかえたら調子いい
故郷は待っているとは思えない
小遣いをもらいコタツを出ていった

河内長野市 加 島 由 一

目標をそつと手直しする二月
アメリカで美男になっていく松井
妻にまだ無職渡世の許可がでず
外見で力仕事にまわされる
通勤の電車にもいる好きな人
真剣に遊び楽しく仕事する

鳥取県 新 家 完 司

どっこいしょ 敵は膝から攻めて来る
木枯らしに攫われるなよ仲間たち
原因は不明だけれど金がない
妻がまた貧乏臭い咳をする
衝撃の映像なんて見たくない
休日には安楽椅子で雲を見る

藤井寺市 太 田 扶 美 代

人形にマフラーを編む神無月
痛み止めみたいな役もしています
回復期ボクだけが見た空がある
山ほどのルールつくっている同居
草引きを終えた畑は絶景だ
逢えばまたあの優しさに負けそうだ

さいたま市 八田 敏

車椅子押して漸く傘寿喜寿
かさと踏む落葉武蔵野秋深し
年共に鉢小さくなる菊作り
シクラメン届けシンピを待つ娘
老々は車椅子から指図され

佐倉市 岡 井 やすお

ODA貢物となる時代
蓋あけてあつと驚く所得税
卒業日早め就職頑張れよ
西行も震えて詠んだ花と月
雪氷 外科忙しくなる二月

東京都 岸 野 あやめ

それなりの花を買い来て仏の日
サプリメント薬にも縋りたい老女
この薬ほんとに効くか日記つけ
ドクターに訴えるのも年の功
若いのに親切でした担当医

八王子市 播 本 充 子

平凡な主婦にも道楽が二つ
被災地に暖冬という神の慈悲
まだ若い他人の事で熱くなる
年下のハンサムがよいペアルック
神サンはきつと見てはるから耐える

横浜市 小 野 句多留

韓国の女優の胸にある媚薬
常備薬増えて不安な師走の胃
嘘少し残し夫婦の仲直り
年の暮れ訃報ハガキのサブライズ
父母がまだいてこそ里に彩がある

横浜市 菊 地 政 勝

電飾の街へ繰り出す好奇心
デュエットの相手がとどめ刺す音痴
その人が居るだけで良い温い風
風見鶏風を上手により分ける
一億が防犯ベルを持つ平和

富山市 島 ひかる

雪うさぎやさしい風に逢いにゆく
山茶花の散り際に聞きたいはなし
暖冬に佐助の縄そつと解く
張り替えて母の忌を待つ戸の白さ
前向きの中に横向くのがひとり

可児市 板 山 まみ子

ゴスペルを歌う戦争知る母と
大仕事終えてやつぱり大ジョッキ
もういくつ寝ても待ってるオサンドン
大掃除今年もやめてパスポート
新潟の復興願う西の年

静岡市 安本 晃 授

マスコミの是か非か迷う政治論

迷惑なお節介などお断り

八十路にはまだまだ迷う右ひだり

雲行きに迷わず進む男道

迷わずに逢えば喜ぶ父母の星

静岡県 蘭田 獏 吝

ハンドルの真つ正面へ冬至の陽

医者だけが元気な僕に注意する

爺さまの股引きを縫うおばあちゃん

明日の身は約束できぬ今日を生き

歳末に余分な物の福袋

愛知県 早川 盛 夫

今年こそ一句残さん志

人間に生まれ幸せだったかい

ひとりで悩む恥ずかしい事だから

按摩機へ今日の疲れを横たえる

貧乏を知っているから怖くない

大津市 中 宗 明

新築に方向占い福求め

ゴシップも多くあるほど有名に

披露宴あの人らしい名司会

あの人は融通きかず友逃げる

解説を受けて納得ギャル用語

京都市 都倉 求 芽

美しい日本語 肩肘張るニッポン語

記念日にいつも遅れるうちのバラ

同窓会 毎年黙祷からはじめ

宅配便に判 今日句読点

特別に祈りはしないジャンボくじ

京都市 高島 啓 子

電話ぐらい掛けてきなさいちぎれ雲

越冬に失敗をした冬の蝶

蓋開けて呼吸をさせるマンホール

しっかりと打つ組板を掛ける釘

改札の遠いところにあるトイレ

亀岡市 井上 森 生

健康に生き抜くコツは意気と息

世直しに女帝の国を創ろうか

百までも熟柿のように艶やかな (母百寿3句)

百年を強く優しく母の道

花好きな母は質素で朗らかで

京都府 丹後屋

おいほれが好きという字を書きなぐる

京なまり淀大根のリレー積み

煮ごりを平らげている夫婦箸

たそがれて各駅停車性に合う

寒鮎と真剣勝負みぞれ雪

大阪市 西 出 楓 楽

七転び程度で済めば楽なもの
湯に浸り雑念しばし楽しもう
人の世や無知ほど強いものはない
死ぬことより死ぬプロセスが怖ろしい
私対わたしあつさり許し合う

大阪市 古今堂 蕉 子

感謝のない支援今年も続けはる
一人では行けず練炭と道行き
雨宿り隣に一寸いい男
渡る世間仏にたんと会いました
夫より友がよくなりごめんなさい

大阪市 大川 桃 花

若いなあと呆れた顔で眺められ
被災地に風温かしポランティア
窓磨きお部屋に通す青い空
サポテンを育て我慢を教えられ
風向きを変えるひと言ありがとう

大阪市 前 たもつ

父の歳あと十年へ螺子を巻く
川柳塔碑世界遺産と肩並べ
目を閉じてわが古里の吊し柿
大声を出して自分に喝入れる
メモ持たぬ挨拶とてもあたたかい

大阪市 川 原 章 久

御馳走様口では言えぬ犬の顔
爺婆の口には合わぬバイキング
内緒内緒抜き差しならぬ仲になる
やつとこさ貯めたへそくり妻にバレ
保険料払わず貰う気で居るの

大阪市 岩 崎 公 誠

新札を揃えて払うご入園
年金に飼ひ馴らされて背が曲る
荷を捌く空の見えない賃仕事
最後まで仕事仕事と過労の死
三年の算数だってむつかしい

大阪市 鶴 田 遠 野

弱点をつかれ本音をついポロリ
熟す恋視力をゼロにしてしまひ
シークレットラブ妻に聞かせぬ息づかい
計算違い妻がメカにも強くなり
深夜の散歩パトカーに見つめられ

大阪市 川 端 一 歩

初春に逢いたい人がたんといふ
変体仮名 年賀囲むが函が立たぬ
湯豆腐が出れば金太の話なり
埋め草の記事がいちばんよく読まれ
青年の乾杯セリフが新鮮だ

大阪市 小泉 ひさ乃

一杯のコーヒと見てる雨の街
納得をするまで何度でも話す
父の背を越して苦勞の足りぬ指
ちよつとした油断貧富の差をつける
着ぶくれて月と一緒に娘を迎え

大阪市 松尾 柳右子

カラオケにからだ壮快ウーロン茶
雪ふぶき猿の温泉平和だな
湯治場の人それぞれに事情持ち
新札に景氣願いの呪文かけ
風向きを変えてる孫の成長度

大阪市 津守 柳伸

まつ白に乾くお日さまありがとう
三歳になると木登り教えよう
暖かい話題を紡ぐ松の内
あきらめた頃に顔出す捜し物
一見の客断るも自衛策

大阪市 津守 なぎさ

見とれます十日戎の日本髪
ディナーショー舞い上つてる田舎もん
お散歩のコースは犬が知っている
入るより出ていく札に羽根がはえ
逞しい婦警の空手ただみとれ

大阪市 西川 更紗

信じてた人のB面見てしまひ
ショッピング溜まるストレス捨てて来る
あてもなく終着駅で折り返す
我慢する度に背骨が疼き出す
駅前に群れて陣どる茶髪の子

大阪市 伊藤 博仁

階段を転げた頭輪切りする
小骨まで口に取りらせる喉仏
のぞきこむおでこぶつけた美術館
陸橋が弱った脚をはねつける
父遺品里で資料となる至福

大阪市 熊代 菜月

ずるずると決断出来ぬ迷いぐせ
ダイエットあつさり忘れグルメ旅
古希過ぎてまだはまつてるフラダンス
体調で時間の長さ変わります
おばあちゃん時間割決め昼寝中

大阪市 星野 きらり

娘の悩み受話器が重い一時間
休耕田コスモスへ身をかくれんぼ
一葉さんお札になつてお目通り
ときめきを忘れた老いが探す夢
嬉し日の涙は甘く惜しまない

大阪市 榎本 舞夢

女子マラソン小旗声援続く道
ばあちゃんに続けと孫も大掃除
ブレゼント バーゲン物で間に合わす
メル友で顔知りたくてデートする
ふたり共西でたばた暮らししよう

大阪市 榎本 日の出

遠距離の恋もしている年賀状
その言葉しつかり貯金して置こう
高過ぎて不満安過ぎて買わず
部屋ごとに老眼鏡を備え付け
気がつけば母そっくりの顔となり

大阪市 奥村 五月

酒好きの医者に言われて止めた酒
大雨にのれん降ろして酒にする
しみじみと老けたと話す古鏡
定年に妻に舵取り奪われる
オーイお茶麻雀台の妻が呼ぶ

大阪市 神夏磯 典子

寒いけど台風来ない二月好き
炎えたくて尼寺に咲く寒牡丹
一万円の蟹一匹と問答す
朝夕は介護タクシーよく出会う
主義主張武器より恐い時もある

大阪市 玉置 英子

友というより姉のようだった人
泥棒のきらう灯をつけて出る
抜きとない歯になんべんも化膿止め
弱かったわたし無理せず母の歳
大変な年だったのにわたし無事

大阪市 安達 はじめ

ひとことの重み知っている無口
説教も頭の中は他人事
時は春ひそかに狙う椅子動く
春めぐり凡守凡投くりかえす
最近ほうわさ話もEメール

大阪市 小糸 昭子

鼻たれも舌足らずの子も減ってきた
母と子の言い争いの強い事
楽しみはあとになるほど大きなり
すねて寝て嬉しい初夢見ています
やりすぎた水でおぼれたシクラメン

大阪市 川久保 睦子

老けはったな自分のこと棚に上げ
おお寒むこさむ炬燵のみかんよううれる
にわとりもわたしも空に憧れる
地震国ピンクのパジャマ着て寝よう
露の臺春の匂いのほろにがい

大阪市 津村 志華子

風雪の歴史に耐える吉野山(吉野紀行 3句)

吉野路の素朴なみやげ杉の箸

紅葉にわたしも映えてハイチーズ

傘寿には派手な彩着て翔ぶつもり

母おわす里の辺りの茜雲

大阪市 町田 達子

八十路坂もう外国は行けません

一年なんてボロクソもう師走

博物館へ行く位が丁度よい

何と言っても若さに勝るものはない

改めて元氣元氣と言ひ聞かせ

大阪市 中田 あい子

四日ぶり助かった子に幸あれと

納税のリストに乗った年もあり

恋順調仕事充実消化良

ミス通すおばの湯上り色気あり

新球団楽天選手に期待して

大阪市 本間 満津子

チャンバラの棒 杖になる歳月よ

久しぶりいい顔色ねとは嬉し

昨日今日十度の違い風邪怖い

除夜の鐘いいな さよならこんにちわ

早春の陽ざしやわらか土動く

大阪市 渡部 さと美

歳だからおしゃれしようね娘が父に

ふるさと便届いた土間がたたたい

老い坂へ病魔オレオレ長丁場

少子化のヒト科へ野性子をふやし

物識りについてくいつもどこへでも

大阪市 清水 絹子

用意周到五感にしみる除夜の鐘

散りじりの暮しも絆四姉妹

背筋凜と京のおんなの裾さばき

手八丁の姑の茶碗の二度洗い

木漏れ日の束の間だけど夢心地

大阪市 板東 倫子

強いから正しい国と限らない

爽秋の朗報皇女のお嫁入り

イエスともノーとも言わぬ仏さま

淋しい冬ベチカのような火がほしい

我が家の韓流ビビンバ キムチ鍋

大阪市 小谷 集一

とどめさすように胃カメラ入れられる

表情を殺した医師の鼻眼鏡

京の秋着て銀閣寺が綺麗

紅葉枯れ落ちて疎水の流れ旅

湯豆腐を食べて京都の秋を出す

大阪市 中村 叡子

ヨン様に絶叫これも親善か
案ずまい いい若者がたんといふ
愛ちゃんの気合必死の健気さよ
年寄りを置去りにして機器進む
生きすぎた思ひして来るしんどい日

大阪市 井丸 昌紀

似たような駅が続いて乗り過ぐす
憧れのベンツ乗れたが霊柩車
紙切りは客の視線が切つてゆく
トンネルに入ると少し身構える
冷酷な写真技術よ毛の薄さ

大阪市 清水 利武

酉の年めでた目出度の八十四
フランスから無事に帰つた新夫婦
酉の年演歌艶歌で夜が明ける
子を殺す鬼に節分豆投げる
おれおれの詐欺師一番儲けてる

大阪市 杉澤 汀

約束を果たして今日の青い空
受けた恩少しずつでも返さねば
お隣にいつもお世話になつてます
ジャコ豆の一パイですむ腹の虫
藍愛に沸いたゴルフと卓球と

大阪市 近藤 正

サマワの町視察しました一時間
ツボだけはぐつと押さえている女房
変人の総理大臣長続き
減税は廃止するとの年賀状
貧しいが心貧しくなつてない

池田市 栗田 久子

角のない鬼には豆を投げられぬ
告白を期待してますチヨコレート
省略で済ませる日々もまた楽しく
ガク落ちはしても威厳の寒椿
枷のない身で毎日のよい眠り

泉佐野市 山本 蛙城

ヨン様とはしゃぐ女が癪の種
日々好日袴を着ることがない
笑いネタ無い日は鏡見ることに
老いらくの何とやらかも不整脈
失言の次は徴兵制ですか

茨木市 藤井 正雄

退屈と暇は耐えるが腹が減る
分の悪い話に煙草吸い過ぎる
人生を川に譬えたい祝辞
ラッセル車男ぶり良く頼もしく
湯冷め気になるが切れない長電話

和泉市 西岡洛醉

天空を真つ直ぐ落ちた流れ星
百葉の長を自賛のちびり酒
一病息災僕の季節が遅々進む
極楽の浄土夢見た今朝は晴れ
如月の寒さへ脳も空回り

大阪狭山市 矢野 梓

皇室の華はころびて春が来る
赤札に財布がゆるむ年の暮れ
お付き合い飲めないお酒つぎに来る
逃げるから追っかけてくる酔っ払い
真つ直ぐな道を歩いてよく転び

柏原市 永浜 加津子

暖冬は嬉しいけれど不気味なり
年の瀬をのらりくらりとする勇氣
笑いじわ気にもしないで輪が弾む
大根の葉っぱ煮る日の小さな幸
晴れた日のやる気満々跳ねている

交野市 田岡 九好

譲られた席におれかとうろたえる
ふと抱いた好意に淡い虹の色
東山魁夷のような杉木立
有り金の小銭はたいいて買う切手
安らぎはコーヒーと読む犯科帳

交野市 山川 日出子

冬ソナで韓国料理大流行り
床の間が超ニホンテキ外人さん
五線譜がニガワライする祖父の唄
血圧をモーツァルトが治すとか
カナダから大道芸人御堂筋

交野市 森本 弘風

早いなあもう十年かルミナリエ
忘年会今年も同じ顔揃う
ジャンボくじ今年も神を信じ買う
残さない量が買えます野菜高
近頃は妻の言うまま生きてます

河内長野市 山岡 富美子

飽食に倦んでマナーが地に堕ちる
娘に贈るレシピに母の処世訓
団栗も選ばれるのを待っている
外見で選んでからの転び癖
泡風呂の中で私のルノワール

河内長野市 村上 直樹

目に余る目には目という殺し合い
被災地に気を揉みながら肥り気味
カルチャーをはしごの妻に気合負け
取りあえずそやなあとという返事だけ
ちらほらと降る侘しさと雪見酒

河内長野市 井上喜醉

新札が優しく光るお年玉

つねられた合図で口が急停車

カレンダー気になる妻のまる印

年末の夜警で月に尾行され

球団が食い潰されて身売りする

河内長野市 植村喜代

怖いことはばかり聞いて生きている

カボチャ四ツ割男の力借りて切る

また一つ山が潰れるトラックが走る

昔むかし松茸ごはんは二升釜

少しでも愛があつたら殺せない

河内長野市 水谷正子

佐渡の地に愛の絆が結ばれる

暖かい窓辺で賀状書く不安

沈んでるベッドへ友の見舞状

どこからも電話がなくて鬱になる

張り替えた障子ほのぼの初春を待つ

岸和田市 井伊東吉

新鮮な葉付き大根頂戴す

忘れてた水仙庭に顔を出す

大戦の痛み忘れた防衛論

球界に嵐を呼ぶか新球団

国産の活躍力士待っている

岸和田市 原 さよ子

どっこいしょ言わねば立てぬ老いの癖

口癖になって効き目のない小言

普通では満足出来ぬ親のエゴ

恋を知り孫も上手に嘘をつく

のんびりと歩こう先の知れた道

岸和田市 雪本珠子

影までが幸せそうな老い二人

思いやる心があれば皆平和

ストレスも適度になりと呆けて来る

再会にときめきながら紅をさす

街角で肩が触れ合い今夫婦

岸和田市 岩佐ダン吉

輪の中のやっぱりひとりだったんだ

誉められてやっぱり僕が溶けていく

風を読む男淋しい顔をして

粘るだけ粘ったとだけ書いている

鏡だけ正直笑ってはいない

岸和田市 土橋房枝

パソコンの残像見てる夢の中

母さんの笑顔に深い皺がある

何ごとも丸く治める母のわざ

花盗人やっぱりそれは罪ですよ

落葉舞う踏むには惜しい色もあり

岸和田市 亀井 皎月

故里は山羊も牛にももう会えぬ
老農ははびこる草に急かされる
故里は時雨れて秋の艶を増す
愛すれば風の心が聞えそう
中流の味が消えてる年金者

岸和田市 中島 寿海

不名譽な除隊喜ぶ拉致家族
動かないものたえの大地揺れ
災害地風呂と豚汁喜ばれ
量販店 店員専門知識なし
外食の悩み偏る栄養価

堺市 石堂 潤子

主婦の座を時どき夫にタッチする
モーニングコーヒー夫がはいどうぞ
あつさりの味好き人の味はなお
鉢花を買って少女の如き妻
おもしろい家だ歩けば床弾む

堺市 河内 月子

庭の柚子入れて今夜はいい湯だな
風邪やとと治りあちこち大掃除
歯の抜けた宅地に家が建ち出した
溝掃除すんでゆつくりお茶にする
暖冬でキウイが早く熟れ出した

堺市 村上 玄也

ガン細胞確ととらえた内視鏡
癌という字体何ともおぞましい
いざメスを入れるとなると湧く恐怖
年金を独り立ちせぬ子がかじる
ワインより芋焼酎が性に合う

堺市 神原 文

マネの絵にはつと驚く恋に似て
マネの絵にけしかけられて生きる欲
燃える眼にユトリロのサンノア通り
ルーブルにマネがいるから会いに行く
お福さん福助さんで夫婦箸

堺市 和田 つづや

昨日より歩いてしまう万歩計
本音にも少し飾りをつけておく
反論があるのに扉閉められる
古稀よさあ来いと軽目の鉄アレイ
感性の刺が邪魔して眠られぬ

堺市 西村 りつえ

無信心も初春迎え神に謝す
ユーモアの通じぬ鬼と福笑い
無理せずに楽しく春のロマン追う
萎えたのか酸素がほしい古希の坂
列島に災い転じ福よこい

堺市 矢倉五月

快拳した友に拍手が小さすぎ

おやここにまた贅肉がつきました

ラーメンを待たす三分長いこと

穏やかな日々です仏様拝む

若がえりはったひとりになりはった

堺市 齋藤 さくら

バイキング元は取れたが悔いている

耳底に水琴窟が残る寺

異変起きそうで暖冬喜べず

サルビアが冬はまだかと咲いてます

友の愚痴聞いてストレス溜まり出し

堺市 國見 蘭香

お久しぶり言ったまんまでバスが出る

歯を一本抜いて五つも年とった

一人来てほっとしている喫茶店

へそくりも財布に入れて十二月

鏡の中どの角度でもしわは皺

堺市 山本 半銭

五十歳を息子呼ばわり憚られ

うんざりが続いた時は空を見る

逝った人昨日は恨み今日は恋い

たまさかの炒飯つくり誉められる

万歩計三日続いたことがない

堺市 近藤 豊子

アンパンマン空とぶマントあずきいろ

バイキンマンついに降参拍手あり

手をつなぎ見上げたころの菊人形

金魚草の苗へお声をかけてはる

お見舞いのカステラとるのローカル線

堺市 柿花 和夫

風揚げる子供も空に舞っている

解けてきた大人の恋という呪文

来し方のプラスマイナス結果ゼロ

ええ歳してラブラブなんて口にすな

食卓に出番の増えた国語辞書

四條畷市 吉岡 修

この道が好きこの道を辿りゆく

そこまでの才女と知らず口説いてた

親の顔たてて大安日と決める

中の下で平均寿命辺でいい

不意に来てお父さんなど男言う

吹田市 太田 昭

砂風呂に自分の鬱を埋めて来る

歯ブラシの二本に減って過疎となる

終い弘法骨董の私語聞きに行く

喝采が後ろにずれて行く悲哀

悪友と美味しい酒飲む年の暮れ

吹田市 瀬戸 まさよ

身内より涙止まらぬ友の逝く
充実の男の後ろ女いて
若者を許す広さを自賛する
約束もストレスとなる老年期
一泊に大きな荷物どこへ行く

吹田市 岩屋美明

リーダーが消えて尻尾がうろたえる
公園に猫も用事があるらしい
五分粥の愛が沸沸煮こぼれる
古里の絆を結ぶ熨斗袋
ママシドリリンク飲んで体調崩してる

吹田市 早川棲世

歳なりの年重ねるを頷とする
都会から寝にだけ帰る市に市長
国中の道に警察線を引き
屋上に稲荷生涯賭け続け
陸軍と総評そして今プレス

吹田市 須磨活恵

ひと言の優しさ心のみ出す
手を合わせ無理を承知の願いごと
縋りたい時にワラさえ見つからず
神さまは心の中にいるのかも
自打球になって返って来たことは

吹田市 木下敏子

早起きに貰う気持のいい笑顔
海からの日の出を拝む露天風呂
バスに揺れ満ち足りている大阪弁
つつがなく年賀状書く墨をする
洋式のトイレを探す膝の音

吹田市 穴吹尚士

バーゲンにいざ出陣と紅を塗る
粹筋と見紛うような厚化粧
血統の仔猫にあごで使われる
ふんわりと見えるが実は空財布
建前が行ったり来たり会議室

吹田市 大谷篤子

追風にまた判断が狂いだす
近道の地図で迷路に迷いこむ
愚痴だけを聞いているだけの仲でいい
青空に翔んでみたくて窓開ける
我身とも思う枯葉が風に舞う

吹田市 野下之男

爆発にアラアの神も困り顔
決めてから現地調査の茶番劇
申年は神も仏も疲れてた
女帝など知らぬ笑顔の愛子様
熊達を誘うてみたい柿の山

高槻市 井上照子

鼻唄のジングルベルでガラス拭く

老醜も詰めて捨てたい年の暮れ

へだたりのある年月を鍋で埋め

人恋し無駄話する長電話

言い訳を考えあぐね歩いてる

高槻市 乙倉武史

学力の低下むべなる世の乱れ

罪意識なき公金の遣い込み

老いを餌に詐欺跳梁が目余る

足袋履かぬ自信過剰が風邪をひき

茶をよばれ結局のろけ聞かされる

高槻市 生田義一

忘れないためのメモ帳置き忘れ

散歩道老い嗜みしめる坂の下

能勢の里自然と遊ぶ子等可愛い

我が町の元氣そのまま文化祭

綱の夢寄せては返す波のごと

高槻市 左右田泰雄

誕生日祝いが酒屋から届く

味噌汁と目玉焼きなら作れます

階段をよいしょと上る歳になり

お供えのお下りを待つ生き仏

爪あとを残してしがみつくと命

高槻市 執行稲子

ネックレス愛のロケット揺れてます

ざわわざわわ玉蜀黍で手拍子を

痒み止め効きめ抜群友になる

サウスボーあの子に望みかけ

ストレスの妻はつれない生返事

高槻市 江原秀夫

木犀の香にさそわれて万歩計

心から笑える年へ除夜の鐘

墨の香が重く流れて寒に入る

居るだけで心休まる差し向かい

俺だけの辞書懷に一人旅

高槻市 西谷治三郎

社長さん去年と同じ謝罪文

何年も騙され続けた入浴剤

傘寿でもわくわくさせる北新地

旅の宿食後揃って葉飲む

長電話横で忍耐粗大ゴミ

高槻市 田中千莞子

いつからを余生と区切る豆の数

熱爛で心の鬼を追ひ払う

言い寄ってくるバツカスを振り切れず

今日だけと医者がお酌をしてくれる

気にかかる寡黙な医者のかい

高槻市 瀧本 きよし

ヨン様と水川きよしは嫌いドス
また悪夢見て眠られず猿を呼ぶ
孫よりもじいじ張り切る七五三
物故者が増えて消えそなクラス会
また探す定期めがねに免許証

高槻市 傍島 克治

鶯の声なめらかとなり春進む
廃校も知らず記念樹すくすくと
医者めぐり行く先々で同じ人
気まぐれのメールだなんてひどいひと
梅林の野点横目に酒を酌む

大東市 南原 正和

気短かな彼に馴染めぬ太極拳
あれこれと指差し教え妻出掛け
白無垢の衣裳泣きます出来ちゃった
心打つ文に頁をめくりかね
ともに出る妻の仕度を耐えて待つ

大東市 児玉 蛙

平凡でいいとうなずく歳となり
人間に好かれて楽しく喋る
誘われてすぐ何処へでもついて行く
太陽を見送り二人のピヤガーデン
夕立が二人を誘う喫茶店

高石市 浅野 房子

新春に抱負も夢もありません
化粧ではもう誤魔化せぬ化粧られぬ
怠け者働き者のあとを行く
側にいてつい飛ばつちり食わされる
流されるそれがさだめと言うもののか

豊中市 山門 タミ

書いたメモあつちこつちへカクレンボ
遠く来て息子高所の大掃除
ピンポンにハイハイハイと間に合わず
野菜高皮も工夫の一品に
寝ころんで空の青さよ草いきれ

豊中市 江見 清

主語のない話通用する家庭
ちゃんとやる指差し呼称新人だ
人が消え蜻蛉の世界ゴルフ場
乗り継いだ孫がひとりで来る頃だ
教え子が髭を蓄えやってきた

豊中市 吉田 あずき

永らえてゆるむ心のつかいか棒
草に寝て天動説に同意する
一人言もうちのくらい埋めただろう
職安で説得される志
異文化の森か戸惑う電器店

豊中市 水野黒兎

健康にいい食物が世に溢れ

父の背が教えてくれた忍の意味

文字通り明日を育む妊婦さん

変身にウルトラマンは飽きている

地下街の迷路で使う羅針盤

豊中市 岸田知香子

手術前組の鯉観念す

ぼっかりと穴あいたよな夫の椅子

娘より息子やさしさ身に沁みる

師走入り電飾競うXマス

年毎に早くなります世の流れ

豊中市 藤井則彦

元旦に指切り一つする夫婦

一葉のはじめましてというお顔

ワンマンを欠伸しながら待つ会議

ケータイの仰る場所で待たされる

ぼつねんと私用をこなす元社長

豊中市 安藤寿美子

京都御所左近の桜も紅葉して

悪妻愚妻死ぬまで止めてやるもんか

後悔は若い昔の不勉強

ふわふわしても計算出来てる娘

一度だけ二人でコーヒー飲んだだけ

富田林市 池森子

一本の薬にすがったのは誤算

白い夢白いまんまに小抽斗

愛憎の憎をシュレツダーにかける

棒線で抹消されたのが本音

去年今年つづけて花嫁の父に

富田林市 片岡智恵子

断りの口実にする風邪を引き

一幕の喜劇演じる老いふたり

客足のさすがが女将の愛想ぶり

自分史の空白戦時下の日々よ

運ですの決して努力とは言わず

富田林市 藤田泰子

シャネルにもヨンさまからも遠く居る

フルムーン指を銜えて見えています

叶わない夢を貯めてる貯金箱

負けて勝つライブドアも清原も

台風之余波食卓に波及する

富田林市 稲川恵勇

相槌を打ち本心へ探り入れ

偶然にみせる死球も技のうち

叱られて江戸の仇を猫へむけ

アメリカのポチが九条さわがしい

腰上げるたびにヨイシヨがふつと出る

富田林市 中崎深雪

日足伸びてきただけで嬉しい二月
何かを求め駅前の少年の群れ
犬連れて冬もいねと日向ぼこ
旅の道連れ実は泥棒だった
いそいそと新生児室めざす足

富田林市 大橋鐘造

時どきは妻から逃げる夢を見る
愛だけで生きて行けない金が要る
バラバラの意見まとめる札の束
縄のれん明日のパワー貰てくる
やさしさに触れて外した鬼の面

寝屋川市 森茜

小姑はきつと私を許さない
あつさりと引き下がれない座りだこ
大喧嘩して穏やかになった妻
二度の職ぱりつと乾く作業服
好意には縋ってみたい迷い犬

寝屋川市 籠島恵子

晩秋の中でブランコ揺れやまず
安定剤がほしい電話を置きながら
つくらない野菜わたしも選っている
冬の刑暮らし方など悔いている
コンサート暮れは何かと忙しい

寝屋川市 坂上高栄

あつさりと胃を脱いだ何でやろ
裸木に引つかかっている十三夜
補聴器は私の鼓動まで拾う
公園の落葉私を慰める
その笑顔心の闇に灯を点す

寝屋川市 江口度

キー不要指紋で開ける錠を買う
教会できつと落着く胸だろう
日本の冬を楽しむ渡り鳥
すぐ返事くれるいつものあたたかさ
名刀の部屋では煙草吸わせない

寝屋川市 平松かすみ

日本の豆と信じて福は内
戦争もマグマも怖い古希の坂
日本をどう覗いています地球人
カーナビに出ない山から落下物
欲張りのリユック年々軽くなり

寝屋川市 太田とし子

新年に古い悩みは似合わない
目出度くもない顔で言うお目出度う
自治会で自己紹介の両隣
子育てが終って猫といいコンビ
こつそり来てどつさり持つて行く空巢

羽曳野市 徳山 みつこ

最強の絆然らねば子連れ婚

実南天 女の孫がひとり増え

高齢者といわれています政府から

パソコンにもはらはらせている私

一つずつ窓を開いていくつもり

羽曳野市 安芸田 泰子

被災地に神も救えぬ爪のあと

独酌で女一人が屠蘇祝う

マスクして他人のようにすれ違う

介護されるまでに体重減らさねば

用のない人が一番早く起き

羽曳野市 吉川 寿美

酔うて候訪う人もなく初春を酌む

野菜高騰キャベツの芯も使い切る

上手に歳をとってゆくにも金が要り

おんなが吊った棚から落ちてきた寓話

喋り続けて肝心なこと切り出せず

羽曳野市 三好 専平

逆指名ドラフト制を突き崩し

法相が言葉を知らぬ国に住み

人形と思えば他愛ない仁王

傲慢と卑屈は紙のうらおもて

伎楽面ペルシャの人は楽天家

羽曳野市 酒井 一壺

人間の驕り地球に裁かれる

嘘よりも化けるのうまい不審船

みなさんの思い通りでない私

空間を音で満たしたピアノスト

その内に介護ロボット生まれそう

東大阪市 笠井 欣子

一日の紐緩めたり縮めたり

嘘も入れ読まれてもいい日記帳

愛の捻子緩めて余生おおらかに

ごめんネを軽い心で言える年

つむじ風心の迷い吹き飛ばす

東大阪市 指宿 千枝子

秘密基地本屋にしている十八時

指切りをやっと果たしたクラス会

番人のようにじいさん日向ほこ

町は早 狂想曲の師走なり

世渡りは下手でも古稀を迎えてる

東大阪市 安永 春

こっそりと願かけに行く百度石

リハビリに焦らず努力する歩幅

割り勘が好きな男の呑みっぷり

大黒柱ふわふわ出来ぬ児の寝顔

迷惑もお互い様と庇い合い

東大阪市 北村 賢子

枚方市 宮川 珠笑

昇るより激しく燃えて沈む陽よ
太陽を吸って色づく茜雲

スッピンのパジャマ姿へピンポーン

妻という相棒居てる一つ屋根
不祥事へ受信料など払わない

東大阪市 谷口 義

丸ばつで答えの出ない人生だ

丸い物を見ると蹴りたくなってくる

丸顔の天才もいることはいる

おばあさんになって人生観変わる

悪いことしていないのに嘘をつき

枚方市 安達 忠央

遅れない待つのも嫌い学者肌

待たされて不思議につのる恋心

裸婦モデル色っぽすぎて困ります

玉三郎指の先まで女なり

物腰の良さに中身を買いかぶり

枚方市 荘司 弘之

ご破算で流し迎えた初日の出

本年もいろんな初に出会いたい

手帳出し嬉しい予定直ぐに書く

身包みを脱いで毅然と冬木立

お互いに杖になろうとウォーキング

災難は私を磨く砥石かも

万衆の生命奪って生きている

三度食べたばこを喫うて酔うて寝る

温泉に来て湯船でストレッツ

脱走をしたのか徘徊してる蟻

枚方市 鈴木 政子

幼児期の着替えあべこべ気にしない

水撒きに首腕脚に群がる蚊

守宮が網戸をヨタヨタ這う晩秋

外反拇趾心だんだんゆがみ勝ち

ブラットホーム大阪人は並べない

枚方市 森本 節子

晩秋の人人人の渡月橋(嵐山2句)

法輪寺此処はひっそり人形塚

誘われればいつもノコノコついてゆく

由布岳を見上げ極楽湯につかる

天変地変師走の台風冬の花粉

枚方市 海老池 洋

ケイタイに追われ油の売れぬ蟻

目が合うて嬉しい時と嫌な時

葱坊主育てる土の子守唄

生きていく灯りいたかく歎異抄

勝つことに拘り過ぎてミスをする

枚方市 二宮山久

幸せな夫婦そいねの妻がいる
孫帰る日々をまつてるサンタかな
今日までを生きて人生かみしめる
柿うれて息子夫婦と庭つづき
六十歳まだまだ行ける元氣者

藤井寺市 楠 昭子

お互いに年だな少しまるくなり
円満の隣に座り弾み出る
先輩に助言しました嬉しい日
ばれるかな冷汗どっと出た流れ
おだてられ先頭走る癖がある

藤井寺市 高田 美代子

かあちゃんの幸せそうなしまい風呂
信号の赤がどうした酔うている
じゅうぶんに生きたおまけを楽しもう
宿借りのようには行かぬお引越し
名人と呼ばれてからの変わり者

松原市 小池 しげお

見てる時だけしか散らぬ銀杏の葉
直ぐ出せば札状は短くて済む
流れ星もとの所へ戻れない
何処で落としたと問われてる落とし物
耳が遠いのに後ろの方が好き

箕面市 出口セツ子

紅葉愛で風を感じる万歩計
顔なじみできて会釈をする温み
瞬きのうちに今年も過ぎた悔い
クリスマスだから哀しくなるイラク
携帯が麻薬のように入り込む

守口市 石森利昭

耳澄ます春の訪れ知らず音
ルーキーが一軍目指し始動する
鬼に気を遣いながらの豆を撒く
テレビから今夜の鍋の指示が出る
探しても出てきませんよ捨てました

守口市 井上桂作

ニセ札は重罪なりと子に教え
領海を姿かくして通る船
聖戦はイスラム教徒のかくれみの
まだ夢を若さをたもつ秘訣とや
つまずいて周り氣にして立つおろか

八尾市 宮西弥生

祇王寺の仏三体嵯峨詩情
父母のいのちつないでいく墓参
行く先に友達が居て旅をする
コンサート春一直線ドア開く
お日さまがきつちり沈むからやる氣

八尾市 生 嶋 ますみ

喜寿の坂子供ニユースを見て学ぶ

十二月先の尖った風が吹く

電飾の街にあふれているニート

聞き役という仕事ですりんご剥く

口出しはすまい孫には親がいる

八尾市 村 上 ミツ子

傷ついた幹から新芽伸びている

誤解から生まれた溝が埋まらない

子の自立紐バツサリと切り放す

感嘆符疑問符たんとある暮らし

泣き笑いバランスとって生きている

八尾市 宮 崎 シマ子

どうにでもなれと居直る十二月

山茶花散らしの雨に静かな老夫婦

ポケットに好きなグリコを三粒ほど

いい身分猫は境界線知らず

悪人でないわたくしに犬が吠え

八尾市 高 杉 千 歩

口ばかり達者な鬼が鍋囲む

鬼さんの戒名咄嗟に出てこない

目も耳も齒も繕うて老いの春

北風を斜めに今日も七千歩

三食をチンして老いも愉しかり

八尾市 山 本 宏 至

ため息とともに期待がうすれゆく

木枯らしの始末をつける落ち葉たき

万歩計歩けあるけと尻たたき

妻の手の紐一本でまわる独楽

ひと言で君との距離が近くなる

八尾市 吉 村 一 風

いい歳でまた言い勝った秋のウツ

過ぎ去った日と時どきは話する

寝たきりに意見されてる見舞客

風邪ぐすり隙間に母の宅急便

知恵のある積りが今日はこてんぱん

八尾市 内 海 幸 生

嘘つきもうそをつかない花が好き

頑張れと言えば裸木あんたもな

くすりみな棄てたら元に戻るかな

死ぬ覚悟できかけた日に株上る

お手本にする同病の頑張り屋

八尾市 長谷川 春 蘭

電話では話つくせずそぞろ寒

起きぬけの萩を見ている齢かな

秋の暮れ一人居の家の沈むごと

群がりていよいよ寂し曼珠沙華

栗剥くやばつばつ人の恋しかり

大阪府 前田 ゆい

還暦の転機へ朝の武者ぶるい

嬉しくてやがて寂しい孫の羽化

羽子突きも知らぬ子供ノメール狂

ヨン様に染まりマフラーなびく街

領海はなくて悠々回遊魚

大阪府 野田 栄呼

宝くじ買ったつもりで食べて身に

晩年の舊温め酒の宴

勉強もおろそかネット夢中の子

同年会急に時計が進みだす

夢多く喜寿は臆せず燃える赤

大阪府 桑田 ゆきの

歳時記に挿む銀杏落葉の章

逃げ隠れ出来ぬ場所から光り出す

出遅れたかぼちゃ三つ四つ寒に耐え

薄命の一片お札に返り咲き

無沙汰詫び寒中見舞横文字で

大阪府 初山 隆盛

春の窓開いて招く青い鳥

割り勘が一枚岩の酒にする

角とれた石は流れのまま生きる

韓流の風に靡いているハート

散歩から戻るとピザが焼けている

大阪府 米澤 淑子

雑音も選り分け聞ける年の功

方法はこれしか無いと諭吉出る

呆けてないまだこんなにも好奇心

溜めている闇魔に渡す袖の下

うっかりと口出し火の粉浴びる羽目

大阪府 澤田 和重

ガイドつきで地獄極楽見てみたい

輪の外に立つとイロハが読めてくる

豊かさの中ですいとん忘れない

人飲んだ海は沈黙押し通す

握手してそれから先は考える

神戸市 池田 善守

一億円橋本急性痴呆症

ゴム紐でつながったよない夫婦

車窓の田んぼ裏作なにもなし

若夫婦男が先で女あと

老夫婦女が先で男あと

神戸市 木村 貴代子

責任感死語となる日も遠くない

子供らに渡す国には大負債

無事平穩いつも通りのありがたさ

リーダーの選びそこない大禍よぶ

まちがいを認める勇氣なく無残

神戸市 山口 美穂

千両万両色づく師走クリスマス
病床の老母へたくさんありがとう
ゆずられた席ありがたく面映ゆい
震災十年生きてることにただ感謝
俯き加減で水仙は香を漂わせ

神戸市 伊勢田 毅

解体の実家に三日涙雨
無料バス最後に会釈して降りる
のし袋夫婦の火種包んでる
遺産分けこじれ仏壇戸を開める
縄のれん僕にもちゃんと指定席

神戸市 山口 光久

躓いて男の意地が点火する
慌てずに風向き変わる時を待つ
車イス母は笑顔絶やさない
逆風を味方につけている風よ
肩書に中身がついてゆかぬ人

相生市 中塚 礎石

つまずいた石は日記に覚えられ
片減りの靴は男の戦道
幸せになるらし耳が遠くなり
均等法女性の苦労増えてくる
決断を迫られている朝の靴

芦屋市 黒田 能子

割り勘の仲で気楽なティータイム
早朝のカラス気楽に鳴いている
なじんでる匂いあなたの側にいる
ホップステップこの辺までにしておこう
一病も二病もかかえなお元氣

尼崎市 松下 比ろ志

片言で通じ合ってる乳母車
ハイハイと妻の返事は横向きだ
虫食いの花もけなげに咲いている
福ぶくしい顔で梅干し食っている
鬼も蛇も抱えていますテロリスト

尼崎市 田辺 鹿太

悲しいね作り笑いをする自分
誰だって歌のひとつも唄いたい
体より脳が冷えます年の暮れ
負けて勝つ今の私の座右銘
ひとときは効きそう酒の痛み止め

尼崎市 春城 武庫坊

落葉舞う舗道歩けば詩情涌く
我が老いを助ける冬の青い空
老いてはならぬこの橋渡り切るまでは
風速ゼロだから二人はまだ歩む
会うたびに冬の言葉を聞く雑踏

尼崎市 春城年代

十二月太陽少し気まぐれだ
眠れないときは昔の風の中
この列を決して外れたりしない
気まぐれに只今ココア党の日々
こんなにも涙いっぱい古い文

尼崎市 長浜美籠

もしもしの声くぐもって秋深む
カモフラージュだろう握手の手が温い
茶化されてから歯車が噛み合わぬ
声出して母さんと呼ぶ枯葉散る
ニンマリとイエローカードちらつかす

尼崎市 林昭三

母にだけ話せることと言えぬこと
孫二人預かり娘クラス会
釣り上げた蛸が寝技で逃げ惑う
普通の子普通の人が罪犯す
二階からあいにく留守が降りて来る

尼崎市 軸丸勝巳

球根を植えて毎朝鉢を見る
辻つじにはしい警官立寄所
寂聴の法話毎朝聞く暦
牛肉が履歴書抱いて棚で待つ
ふる里は恋し悲しい三宅島

尼崎市 山田耕治

服装も楽器の色も虫に似る
お話をするきつかけを犬がくれ
包装紙いっぱいためて紐たため
早昼を食べて出ることも多くなり
あんなこと でけんと言つてほめている

伊丹市 山崎君子

ジェンキンスさん長い悪夢の晴れる朝
曾我さんの笑顔迎える島の人
妻の座の無い気楽さよ旅に出る
間違いを重ねた人生愛おしい
お互いに油されたか勘違い

川西市 西内朋月

秋風に背なを押されて社を辞める
家事一切何も出来ないのが自慢
押入れの整理あれこれきりが無い
切ったあと隠れるほどの腹の皺
間違つて射ることもあるキューピッド

川西市 米原雪子

嫁ぐ娘に涙見られて照れる父
反抗期遠き自分を見る思い
暖かいと言いつつ風邪を引いている
乗り過ごし見知らぬ駅で目が覚める
病んで知る家族の力優しさを

三田市 北野 哲男

少しずつ公私混同して勤め

適当に二十面相使いわけ

雑魚なりの楽しみ方をしています

裏表内緒も披露する祝辞

勘定の合わせぬ生甲斐持つ達者

三田市 久保田 千代

種蒔いて実る答えを待っている

騒音にゆとりなくした村の道

騒がれてみたいジャンボの宝くじ

一句書く色紙余白へ気を遣い

戒めに廃車を晒す事故現場

西宮市 西口 いわゑ

散る美学うつとり銀杏見上げてる

澄んだ目に見つめられてる負けている

強くなる魔法時々かけてみる

振り向けば間違いだらけでも楽し

掴んでもつかんでも逃げたがる夢よ

西宮市 亀岡 哲子

息子らに暗証番号いる電話

公園のいつも三時を指す時計

間違えたバスが錦の山登る

武道館へ出場の孫エイエイオー

治療費と余命計算歯科の椅子

西宮市 坪井 孝一

小さくとも老い否定する父の背な

ライバルの欠点見つけ気が楽に

二日酔い空にごめんと詫びている

京豆腐湯気の向うにおたべはん

シャツの色妻の許しが要る事に

西宮市 牧 渕 富喜子

守るかに柵隅で花をつけ

災の今年の一字滴りぬ

充実の喜びを知る年の暮れ

黒豆高騰災い多い値をつける

被災地に疲れがどつと出る頃だ

西宮市 井上 松煙

四季の花きれいに咲かす荒れた指

脈をとるナースの白い指見つめ

夢ふくらみ余命は減ってゆく辛さ

裸木は春一番を待つ構え

今日こそと出で明日こそと悔しがる

西宮市 門谷 たず子

錦秋の南紀を愛でる娘等と旅

ご詠歌の声あたたかき山の寺

ひとりの視野に水仙ばかり冬の庭

前向きに歩いて老いは置去りに

新しいページに淡い虹を描く

西宮市 山本義子

始発駅新しい嘘つんでいる
シナリオのとおりやさしく看とります
手品には騙された顔してあげる
ブランドタオル雑巾になりやさしうて
散歩するわたしにもあるテリトリ

西宮市 緒方美津子

このご時世気合いを入れて初詣で
初老には青春切符丁度いい
被災地に祈る形の木守柿
からだに悪いもの食べて満たされた
散ることは考えないで花は咲き

西宮市 菊池トミエ

鞍馬山秋の紅葉澄み切って
吉野山もみじに映える蔵王堂
寄せ鍋や孫にやさしい祖母の箸
改めて読む一葉のたけくらべ
愚かにも歩く幸せやつと知り

西宮市 秋元てる

父親の記憶なく生き海が好き
声に出して読めば幼い日に還る
定年で昔の母と子の刻も
出直しを見送る妻に背で応え
一応は抵抗せぬと気が済まぬ

姫路市 古川奮水

大の字に寝ころぶ窓は澄んだ月
億万の長者へ夢のくじ握る
隠し芸一つハンカチ持つてみる
喧嘩ではなく声高の老夫婦
補聴器の効果宣伝ハガキくる

兵庫県 大谷幸次郎

小春日の雀ちよんちよん寄って来る
たつぷりの愛情乳房には勝てぬ
年金の糸につかまり二人旅
点々と屋根を浮かべる水没車
正論を笑って潰す多数決

奈良市 米田恭昌

杉さま命ですヨン様よりわたしや
末広にこだわる祖父の八字髭
神父かて毎日懺悔しています
あつさりとかつてり味の住む同居
気付かれぬよう煙草をやめた天邪鬼

奈良市 天正千梢

おだやかな心いたたく遍路道
肩幅の張った男について行き
小商い朝のシャッターに懸けている
八方にアンテナ張つてする仮眠
四方拝天下泰平先ず祈り

生駒市 飛 永 ぶりこ

大和郡山市 坊 農 柳 弘

古の和歌が溢れる御池庭（京都御所にて 3句）
象徴の格式満ちる紫宸殿

御所の土恋の形見がきゅんと鳴り
ボランティア同期の通夜に愕然と
しがらみを抜けて海辺のカブチーノ

香芝市 大 内 朝 子

太陽にバンザイ命活気づく
無欲にはなりきれなくて嘔む奥歯
私の今男かな女かな

結婚をしない息子と居る母性
わたくしの生きざまを見るゴミ袋

橿原市 安 土 理 恵

老いていく鏡に問うている明日
因果関係探れば不利になるわたし
いいことがありそう二次会三次会
むさぼった花粉に窒息してしまう
セレナーデばかり聴きたいイヤホン

橿原市 居 谷 真理子

手袋を脱いで払った墓の雪
友達も各種インドア アウトドア
そのあけく湯あたりをした美人の湯
土くさい男は味噌で煮て食べる
抱きあげる力はないが君を恋う

自分史に自己陶醉の勇み足
山茶花の紅ひとひらに我を悟る
出まかせの一言心が瘦せてくる
早や咲きの白梅鬼を誘い出す
自惚れの歳月私のブーメラン

奈良県 渡 辺 富 子

災いを福に転じる年が明け
祈願成就五臓六腑に沁みる酒
嘔み合わぬ会話の弾む掘炬燵
ずたずたの心を癒すみずゝの詩
土壇場になると誤作動する男

和歌山市 福 本 英 子

来る来ない一枚足らぬバラの花
ずるをした一日あつと消え去った
切り身しか知らないブリが泳いでる
てっさまだ食べてないから逝かれない
年末に集金に来るお年玉

和歌山市 木 本 朱 夏

かつぐだけゲンをかついでジャンボくじ
乗り換えの駅からふらり風になる
幸せの叶う言葉を積み上げる
たつぷりとお金があつて不眠症
妻が留守なんて平和な夜だらう

和歌山市 古久保 和子

解りやすい人で小鼻がまた動く
ガードレールよ君も擦り傷だらけだね
カイロ貼る亀の甲羅もこのように
切り取り線ここから先は金が必要
レンジでチン一行だけの置き手紙

和歌山市 桜井 千秀

幸せか不幸か他人嗅ぎ回る
五臓六腑にまだ潜んでいる若氣
他所の犬あやして憩う昼下がり
ええ格好する度びびる向こう臍
ぐうたらで持てる世相が面白い

和歌山市 牛尾 緑良

自家用のミカン蜜柑の味がする
返盃をいただき友に名を連らね
原寸大の私の影は泣いている
別々の時計で暮らす親と子と
旅に出る決意を風の中でする

和歌山市 楠見 章子

大胆にかすれた筆の息遣い
ジグザグに春の足音やってくる
靴の音みんな追われているらしい
サルにひき炬燵でみかん食べてます
安売りへ何時でも飛んでいく仲間

和歌山市 松原 寿子

狩人が向けてる愛の矢に揺らぐ
星が降る見事包んでくれた夢
人許し打ち込む道が見えて来る
見晴らしはオーシャンビューという予約
感情をおさえ鎮く事にする

和歌山市 山口 三千子

老犬に往診寝ずに介護する (十八年)
苦勞した頃の話は通じ合う
目標をなくしてからの虚脱感
添うてから苦勞の種はまだ尽きぬ
先見えた人生主婦を拒否したい

和歌山市 細川 稚代

ふつくと出来た新米御先祖に
マイホーム化粧直しの真つ最中
音沙汰のないのを吉と信じてる
休日も子供の声のない町に
たまに会う友も年輪重ねてる

和歌山市 松尾 和香

丁寧遣ってほしい税の金
身をけずりこっそり送る父の愛
神仏をつつかい棒にして生きる
払い終え軽い心に十二月
シンブルにひとりの暮し守ってる

和歌山市 田中みね

嫌な事すべては過去にお元日

ヨン様のどこがいいのか妬く夫

若い時の夫ヨン様より上よ

名誉職何はさて置きお受けする

ワープロで愛想もくでもない賀状

和歌山市 木村初子

幾春秋続く轍の跡がある

半分の歩幅で歩く杖二本

二の腕に抱いた我が子に背負われる

翔んで転んで尽きぬ思い出湧いてくる

人恋し窓にトンビが円を描く

和歌山市 堀畑靖子

師走です走る用事もない余生

下ばかり見てた破産もせずにした

大根のうすぎりそんな昼の月

暖冬を喜ぶべきか考える

孫帰りマリオネットは横になる

和歌山市 武本 碧

二人三脚ゴール近くで本調子

傷ついた胸には深く踏み込まぬ

ハンカチの黄色信じて満ち足りる

名ばかりの心を送る義援金

双六の上がりに姫のご婚約

和歌山市 宮本三喜夫

知事選も投票率も下がり気味

お人好し若い詐欺師にしてやられ

老舗でも時勢眺めて移転する

密輸品国際的で足がつき

未成年殺人めることが多くなり

海南市 三宅保州

大吉も仏滅もない闘病記

墓までは持つて行けぬと言いながら

天まではとどかぬ梯子競い合い

慰めていらぬ泣き出しそうだから

カードお持ちですかと聞かぬ店へ行く

海南市 谷口義男

見慣れたら茶髪もみんな普通の子

死にとなない医者の子をしてる老い

呆けたのか変った会話混り出す

西側へ傾いている世界地図

七三で妻が占めてる主導権

海南市 堂上泰女

私にもドン・キホーテの血が滾る

黄昏れてしばらく月と会話する

クリスマスツリーに財布盗まれる

ネオン街月の雫に風んでいる

銀杏並木のオアシスがある大都会

和歌山県 中後清史

勝つよりも負ける勇氣が難しい
保護者殿宛の呼び出し状が来る
身に覚えある弁解を聞いてやり
方便の嘘と土下座に長けてくる
歳月に手抜き工事が暴かれる

鳥取市 倉益一瑤

逃げ道はポストで躁も鬱も抱く
菊花展愛が見事に咲いている
思慕ひとつポストは知らん顔をする
かわくのは心ホッペが濡れてくる
常識を破ってみるもおもしろい

鳥取市 田村邦昭

道徳に触れる覚悟の恋もある
自惚れが少しあるから生きられる
形だけの親孝行ならいらぬ
母さんの愛に叛いて親不孝
新築が増えて甲斐性なさ笑い

鳥取市 山本益子

おばあちゃんの知恵袋こそ破棄できぬ
七転び恥を知りつつ八起き立つ
絆との心のカギは捨てられぬ
仲裁役円満の風なびかせる
リストラの破れかぶれの男道

鳥取市 加藤茶人

法話聞く合間よからぬ事思う
どうしてか右の鼻毛がよく伸びる
人並みという平凡で自己嫌悪
宝のように育てゴミのように言われ
九条のつかえ吐き出すエヘン虫

鳥取市 富山 檳榔樹

高砂や誓いの言葉今は反古
笑わせて泣かせて内助山の神
返り咲く夢の広がり誓う古い
口喧嘩しながら内助老夫婦
新年を気合で泳ぐ傘寿春

鳥取市 夏目一粹

幸せをこつこつ貯めて子に贈る
背に腹は替えれぬクマもにんげんも
忠犬の真似して凌ぐ肩たたき
灰汁がぬけきってつまらぬ人となる
赤ちゃんが生まれ爺ちゃん逝きました

鳥取市 堀寛子

一坪にワタシの全部詰めて住む（人工関節手術入院中 5句）
これよりはプラスチックの膝頼り
翔べそうだ白いねぐらで身繕い
車椅子運転歴にもの言わせ
せつかくの読書邪魔するご回診

鳥取市 宮 脇 道 子

母の老いすべりどめなく年の暮れ
年の暮れ帰鳥の子等に野草つむ
柱の傷残した室に母一人
脛の傷癒しの葉塗つてみる
摺り足で歩けるだけで幸福よ

鳥取市 杉 本 孝 男

ゆつくりと申年送る除夜の鐘
叱られる間は見込みあるようだ
修羅場でもクールなトップ部下も惚れ
縁あつて金婚の坂無事に越え
罰ゲームだろうか医者へ週二回

鳥取市 林 露 杖

紅も香りも淡く冬薔薇
年金の減額通知十二月
一〇パーの期待年末ジャンボくじ
少し惚けつかず離れずダイヤ婚
舐められたものだ遺骨は別のもの

鳥取市 植 田 一 京

たとえばと言つて本心語りだす
家族の和欠けてテレビと仲がよい
晩学をわたしに無駄と言うなかれ
冷蔵庫いっぱいにしてお正月
年賀状読んで始まるお正月

鳥取市 福 西 茶 子

芽を孕み春待ち侘びる冬木立
逆風を受けて根性太くする
二三歳若く見せたい赤い服
ワntenポ遅れ流れを読んでいる
恥じらいも女三人寄れば消え

鳥取市 春 木 圭 一郎

目的を持って行動しているか
少しずつ子どものころの夢を追う
童心に戻り楽しむ日を作る
感動は気楽な自由から生まれ
好きなこと仕事にすればハッピーだ

鳥取市 上 田 俊 路

輝きたく朝の散歩は欠かさない
散り際を教えましようと寒椿
横道にそれた話が終らない
本棚の辞書に昭和の恋文が
歯が抜けるように賀状の友が減り

鳥取市 吉 田 孔 美子

猫が死ぬ猫のハウスでひっそりと
猫が死ぬ抱いていてやれば良かった
猫が死ぬ畑になんか行っていた
猫が死ぬお昼前にはひよろひよろと
猫が死ぬ死後硬直はまだなのに

鳥取市 田中 懂子

菜園の出来があいさつ垣根ごし

笑いじわの似合う女性で老いていく

美しく見せる角度を知っておく

良薬になるひと言を待っている

麻痺の手に希望をくれたビーズ玉

鳥取市 徳田 ひろこ

明日もまたことばの海の冒険者

ひとに逢う門をくぐってゆく不老

私小説まだ締め括る篇でなし

木洩れ日が暖かいなと思う疵

先輩のことば花芽が隠れてる

鳥取市 西川 和子

過去未来纏め自分史練っている

闘いに挑む句会の人になる

休憩のロビーで仲間また出来る

割烹着つけてはあちゃん腕まくり

お互いを譲り円満らしく見え

鳥取市 近藤 春恵

嫁が来て我が家もやつと春が来る

老いてなお女を捨てぬ化粧する

粗大ゴミにならないように老いを生き

ゴミ袋に私の愚痴を詰めて捨て

神様も驚いているゴミの山

鳥取市 太田 幸枝

外は萩 髪をまとめて産室へ

銀盤で熱い演技の火花散る

すばらしい音楽仲間ひびき合う

虫がつき娘門限守らない

祝福のことばにねたまこめている

鳥取市 永原 昌鼓

脳ミソが行方不明になる眠気

薔かぬ種見事咲かせる風媒花

さつそうと歩いてみたい痛む足

ジーンズの破れはカッコいいらしい

何着てもダメと鏡は正直だ

鳥取市 西村 黙光

枯れ芒己が生きたま映し出す

天高し一味違う酒の味

飲みながら運命線をじつと見る

飲める口感謝しながら孫の守り

酔ったふりし過ぎて酒を飲み過ぎる

鳥取市 福田 登美

年始め少し気取って背を伸ばす

化粧して弱い自分をかくしてる

一步引く笑顔に風がやわらかい

病む夫の誤算哀しい紙おむつ

ひと言の温い言葉が身に沁みる

鳥取市 吉田 弘子

無意識にお酒も入れた非常袋
二度続くジंकス僕によく当たる
健康法簡単なので続いている
口ゲンカ母より父の肩を持つ
一本より全体をみる美しさ

鳥取市 近藤 佳子

星たちとお話出来る基地がある
野仏に白状したいことがあり
眠れない夜は想い出と遊びます
掲げてた理想の旗を降ろした日
小春日の花占いに酔っている

鳥取市 美田 旋風

食欲の秋熊の居場所は森にない
剪定がすんだわが家を見違える
正月が来ても介護に明け暮れる
少子化が親のシナリオ狂わせる
先祖から善悪背負い生かされる

鳥取市 奥谷 彩子

夢追って空の果てまで千羽鶴
記憶力いいのが妻の玉の傷
金は出し口ははさまぬ好好爺
仲間の輪ユダ一人いてひび割れる
修飾語煙たい人へ山盛りに

鳥取市 中村 金祥

楽園を探し歩いて旅半ば
共生を知らぬ人間恥を知れ
均衡が破れ自然が狂いだす
曖昧も時には欲しいデジタル化
大事件起きて記憶が塗り変わる

鳥取市 有沢 せつ子

遅い子に親切が寄る幼稚園
中流の暮し質素なごみを出す
感じいいタクシーだなど名札見る
青空が招いたように来る竿屋
吉報がだまって入るEメール

鳥取市 村上 信子

色っぽく衿もと直す娘の育ち
旅に出る目的などはありません
多事多忙迷いをいつか忘れさせ
生きた道取りこぼしたる事多い
身を護る知恵年ごとについて来た

鳥取市 土橋 はるお

新しい店にはちょっと顔を出す
ゆっくり飲めと言いなはるけど酒はない
誕生日ぐらいにつこりして居よう
人殺す勇氣は死ぬるまで湧かぬ
おふくろの味を褒めると妻にらむ

鳥取市 録 沢 風 花

倉吉市 牧 野 芳 光

台風と地震の深傷負う日本
小春日の庭で亡夫の声を追う
バスを待つ五分のとても長いこと
童謡で歌えばカラス愛らしい
精一杯今日を紡いで夕暮れる

倉吉市 山 中 康 子

シクラメン仕合わせ運ぶ彩を選ぶ
産声に新米パパのあわてよう
近過ぎて夫の救いに気がつかぬ
成人の乙女模様が浮きあがる
ひとり居の門はきりと閉めてある

倉吉市 山 本 玲 子

木枯しに立ちはだかつている暖簾
深山の滝知っているのは山男
釣り天狗弱気は魚籠の中に浮く
試着室美人がひとり出来上がり
一切の妥協とめぬ偏屈や

倉吉市 米 田 幸 子

田畑も屋敷も飲んだ三代目
草笛も吹くし時々法螺も吹く
目的地目差して飛んだ竹トンボ
四次元へ飛躍しようとするパワー
其処此処に笑いの種を播いて来た

庭に出て庭と話をして暮れる
肩書きを脱いだら風邪をひきそうだ
子育てが下手で少子化加速する
みんな眠って美しい月になる
少しエッチな考え事をしています

倉吉市 松 本 よしえ

大口をたたきおめおめ下がない
朝起きて先ずは手足の曲げのばし
合併で市になったけど熊は出る
いくさ跡瓦礫焦土の砂ほこり
仲間の死鴉悲しい声で哭く

倉吉市 淡 路 ゆり子

亡父よりも超長生きの八十路踏む
駅前那点字ブロックに救われる
誕生の孫へさらさら竹の春
水道水もう何年も飲んでない
ダイケアー折り紙上手になりました

倉吉市 猪 川 由美子

災害視察パフォーマンスをしなさんな
ジェンキンス氏何だかんだで佐渡へ行き
ヨン様へうつつ抜かされ俺はなに
紅白出場ステイタスから遠去かり
胸大つきいを昔は嫌で隠してた

倉吉市 最上和枝

紅葉と滝が手を組み秋を織る

白糸の滝究極の水芸術

矢面に立つと度胸が湧いてくる

矢絰の木綿に箆の音がする

嫁姑褒め合いながらいくさする

倉吉市 野口節子

私の子愚図で間抜けで愛おしい

触って見たいな愛子さまのホッペ

その昔修羅場もあった若かった

傘寿まだ夢の欠片を抱いている

来る来ない待つ間の揺れが美しい

米子市 政岡日枝子

少しばかりの苦さ離さない私

仕舞風呂にがみが少しずつぬける

ほどほどの高さで響き合う夫婦

輪の中に大きな声がひとりいる

一年を纏めるように除夜の鐘

米子市 白根ふみ

金泥を足して賀状がよみがえる

残菊になるとほったらかしの鉢

見てくれの悪い甘藷がおいしくて

上げ底の笑顔でとりあえず抜ける

裸木になってぶな林種あかし

米子市 木村富美子

矢をかわす器用さなくて傷の数

印があり生きてる限り矢をつがえ

母の指続くいくさにひび割れる

力尽きつがえたままの矢を残し

父さんの負けたいくさは癌だった

米子市 中井ゆき

今年こそ平穩であれ鳥たちに

思い切り泣きたいこともあったけど

どんぶらこ桃は素通りして行つた

孫の手も思うところにとどかない

大根のほろ苦さには母がいた

米子市 門脇晶子

宍道湖の夕陽は神の帰路なのか

賽銭をはずめば響く神の鈴

白雲が一直線におそろしい

児童福祉法知らないままに過ぎてきた

終着駅次に待つのは始発駅

米子市 光井玲子

今もなお月から響く亡母の愛

時々私をいやす童うた

迷い道駅の灯りに縋りつく

何事も中弛みだな活入れる

端切れ集め私だけの袋縫う

米子市 林 瑞 枝

オゾンいっぱい吸える生家の海を恋う
光るもの残して消えた原節子
種の旅何処へお嫁に風媒花
修身を何故に消すのかわがニッポン
童謡を歌い健康老い生きる

米子市 木 村 春 枝

どっこいしょ掛け声に脳動き出す
小抽き出し思い出ぞろぞろ捨てられぬ
正月を待たず義弟は冬の星
とり年に傘寿の坂へたどり着く
幸せを招くめがねに買い替える

米子市 野 坂 な み

明けまして東天紅の声が冴え
雪とひびいて津軽の撥は艶をだす
第二ターミナル羽田変身見ておこう
童謡の好きな大正のオルガン
議員バッジ損な掟は作らない

米子市 永 井 三津子

今日からが足踏みしてるダイエツト
切ないと手を合わせてる御仏壇
しあわせか娘ふくら丸くなり
核家族孤独なドアの音がする
大ジャンプ親が元氣なうちにする

米子市 青 戸 田 鶴

窓明けて早春の風深くすう
銅鐸がひびく神さまお出ましだ
頼りなくなつた父の背押している
枯れすぎてどの洋服も似合わない
迷路歩き思わぬ幸をもらい受け

鳥取県 石 谷 美恵子

セーフよりアウトが多い人生譜
黙認の外ない孫が愛しくて
黙礼を交わす気になるひとがいる
空想の夢に酔つてる昼下り
正確に鏡は年齢をつきつける

鳥取県 鳥 羽 玲 子

長生きをめざして句作重ねて
七色の野菜に元氣盛り合わす
子を寝かせ静かにみんな昼寝する
小説のとりこになって主婦休む
初スキー転んで起きる稽古する

鳥取県 鳥 羽 直 市

アクセルを踏んで未来を追っている
心配の種は早目に摘んでおく
蹣跚したところから向かう勇氣湧く
テレビから広い世界を覗きみる
束の間の小春日惜しみ散歩する

鳥取県 谷口 次男

少子化でますます宝ひとりっ子

戦いは見えない敵と闘と闘

夕暮れと夕闇の差詩が教え

体格は親爺を超えて臍かじり

ヒヨコだと思つていた児ババになり

鳥取県 土橋 睦子

木綿着た一葉さんも新札に

年一度富山から来る半魂丹

圧迫に耐えたバストもダウンする

暖冬に石楠花咲いて淡い夢

あんたもか身の内にいる飲んだくれ

鳥取県 下田 茂登子

正直に喋って根本腐り出す

耐えるしか道が見えない根無し草

反り合わぬ夫婦も老いて実が生った

腹立ちに蹴った石からもう愛

落城の跡発掘と言う仕事

鳥取県 國森 武子

双方がゆずってやっと出来た縁

仲の良い娘私の自慢です

鞆なげ矢玉のように友の家

川の音今日は大きくきこえます

寺の門いつでも来いと手をひろげ

鳥取県 山本 正光

何方にも低い頭は親しまれ

高飛車に決してでない律義もの

解毒剤脳の袋にいつもある

中越を興せ第二の角栄さま

紀宮さまの婚約万歳

鳥取県 西原 艶子

何もなく欠伸を誘う雨の午後

誰も居ぬ部屋には猫の甘い息

子とふたり気兼ねの要らぬ日が続く

妙齢のセールスウーマン長居する

ぬくもりのある掌が欲しい旅さなか

鳥取県 蔵本 悦子

決心がついて心が軽くなる

さつそうと歩けば悩み消えそうだ

逃げそうでギューッと愛を抱きしめる

母さんのエンジン止まる事はない

人間を試しに熊が里に出る

鳥取県 深田 俱久

皇室の慶事で元氣湧きはじめ

そい寝してあしたに続く物語

流れ矢を拾う余裕を手に入れる

両論ヘイラクの風はきびし過ぎ

ヨン様に似た看護師が受付けに

鳥取県 細田裕花

出直しへ風よ吹け吹け芽ぐむまで
とつぷりと暮れて不明な父愛し
遊び球投げて空気を讀んでみる
時計見る仕草にその場仕切られる
本心を吐くと愚図ってしまう空

鳥取県 盛田夢路

柔らかいほつべに邪気はないだろう
目新しい会話もないが側にいる
巧妙に心のすきを狙う詐欺
老いの身が遠い思い出恋しがる
貧乏神もつき合い慣れて苦にならぬ

鳥取県 平尾菜美

少年のやる気に瞳はなせない
合併のまわりに深い海がある
寂聴の引導笑うのがつらい
ふる里を装う父の祭り好き
夕やけの里でブランコ蘇る

鳥取県 山宮愛恵

桜土手風と落葉のシンフォニー
楽しんだ落葉眠らす土の中
お隣はせつせと落葉掃く人ぞ
盗まりました柚子柿みかんキーウイも
芒々とひとり佇む秋の中

鳥取県 竹信照彦

切るほどに徒長枝倍も生える果樹
梨の木を伐ったと淋し老農夫
血圧計腹を立てたらピンと跳ね
氷雨降る昼寝するのにいい炬燵
畑打つ役終え妻が種を蒔く

鳥取県 佐伯やえ

ふる里の大山は絵に雪化粧
雪ゆきゆき生きるはずみがまたふえる
寒小菊ひそかに恋をしています
雪をみて楽しくはすむベンがある
大雪に安堵農家の祝い酒

鳥取県 山下節子

破裂したバブルのつけがまだ続く
それぞれに持ち味のある子沢山
理由もなく親に逆らう反抗期
ゲンコツの効果後からきいてくる
目の高さ合わせゆつくり不満さく

松江市 川本 畔

よくもめる賞味期限のある三十路
新しい池には鯉もなじみず
胸の霧晴れず日暮れていく駅舎
君のせいカレー作りの名人に
ボヘミアン往ったり来たり目立ちたい

松江市 銭山昌枝

松江市 安食友子

余力ある内に大きな勝負する
気前いい話が弾む宝くじ
葬儀屋へ何度も同じ事を聞く
豊かさ癒しを貰う美術館
リサイクルするには歳を取り過ぎた

松江市 三島 淞丘

思い出し笑いこらえて朝の経
やることはやつた熱燗二三杯
談笑へ煮こぼれそうな家族鍋
長電話切って用件思い出し
巻き癖がまだ直らないカレンダー

松江市 小川 注湖

人生は誤算重ねてまた走る
喜寿祝い顔の皺には華の数
とほとほとわれと歩むか月の影
算数は答一つで窮屈だ
年金をふた月に分け収支ゼロ

松江市 松本 知恵子

振り向いた空に満月笑ってる
適量があいまいになるロゼワイン
人間の誤算で済まぬ温暖化
一呼吸おいてピエロになっている
夕暮れの早さ小春日への誤算

灯の点を眺めつくしている虚ろ
老いたとて追いかけてこは大好きさ
恩情も薄情もない刹那主義
日暮れ方裏のわたしを演じます
潤滑油救いの神と成らしめよ

松江市 佐野木 みえ

水仙が咲くと元気になるわたし
家中がゆず煮る香り包まれる
さりげない振りでジェラシー燃やしてる
フラダンス踊る彼女を想像す
干柿がおいしくなってる子の帰省

出雲市 伊藤 玲子

シクラメンに埋れて五歳若がえる
佳句に会い温泉に入り鹿野まで
政界のあれこれ料理する湯舟
この歳で遊び仲間は元気いい
ホクホクと仇とったりパチンコや

出雲市 園山 多賀子

笑い皺などと根性未だ確か
人見知りしない私は雑魚仲間
順不同思い思いに風邪を引く
誤作動はなかった老母の握り飯
プロフィールおよびその答書いてある

出雲市 佐藤 治代

良い話聞いた耳から心風ぐ

幸せがいつばい欲しいから笑う

ささやかな五感で虹を抱いている

句と遊び友と遊んでまた明日

笑い声追い越して行く冬の午後

出雲市 岸 桂子

秋の夜長を十七文字で燃やそうか

澄んだ色だけでは描けぬ肖像画

あの時の失敗いつも悔やまれる

駄々っ子に似た夕立が通り過ぎ

子がみんな降りて気ままな縄電車

出雲市 小白金 房子

新札の温みを包むおとし玉

朝夕へ弥陀の光に生かされる

泣けるだけ泣いて新風入れ替える

ひっそりとわたしの過去を焼きすてる

マンションの高さ夕陽が欠けて行く

出雲市 石 倉 芙佐子

身の内の炎が消せぬ寒椿

もう少しきりりとした春の帯

雪おろろん声を殺して泣かまほし

牙に角取れると神様近くなる

知恵袋すっからかんになったらし

出雲市 小玉 満江

トンネルを出ればやさしい風が吹く

井戸端の自慢話は手短に

女性天皇世界平和が来ると良い

ドーランで客を迷わす旅役者

鮮度の無い顔でも朝は化粧する

出雲市 久谷 まこと

親も子も目標いまだ思案中

一つずつ覚え明日の糧にする

それナーニ覗く子供の輝く目

錯覚を頑固頭は耳かさぬ

こだわりがあるから笑顔見せられぬ

出雲市 多久和 敬子

かごめの輪だんだん小さくなってくる

中心にばあちゃんが居て安心だ

愛情を一杯詰めて宅急便

あれこれと迷い六十路の坂登る

酔い回りうっかり口を滑らせる

出雲市 吉岡 きみえ

のど飴をくれた仲間に札を言う

だんまりを決めたいくさが長くなる

合併に右往左往の水面下

宗教いろいろ信心いろいろ長い列

私でも役立っていると思いたい

出雲市 富田 蘭水

雲南市 毛利 幸

惚れぬいた葉書一枚みつめてる

小春日和こんな日もある山陰路

酒やめてまともな父となつたはず

精進の料理に心たべている

耳鳴りを忘れなさいと酷な医者

出雲市 小豆澤 歌子

伝説を語ると遠い風の音

ときめきの一瞬でした雨が降る

重すぎる私を捨てにペダル踏む

芋の葉を信じて散ったひとしずく

セラナーデ胸を癒している夜長

出雲市 岡 あきら

日本語を大事にしてね新造語

道草を重ねかさねて現在地

師走の七日 昭七会の忘年会

無理強いはいしないと肩の凝らぬ酒

ふたりだけの城を護った塀を塗る

出雲市 城 多喜

計算がぴたりと合って御破算に

胃薬を飲んでぜんざい炊いている

まっ直ぐなあなたをぐいっと曲げてみる

こぼさないで下さい愛をさし上げる

北風がわたしにマントくれました

妖艶なネオンに集う人の群

大切なものがころころ転びだす

唸り声あげてマイクを離さない

ぶつりと絆が切れて宙に舞う

これでいい我が身慰め床につく

島根県 多々納 テル子

足の裏揉んで一日頑張ろう

初デビユー路地で赤ちゃん取り囲む

そこかしこしぶとく生きるアワダチ草

肩凝りをほぐして心軽くする

着飾った山を眺めるにぎりめし

島根県 持田 多輝子

独居にも馴れて未練のない余生

生きている証でゆれるネックレス

結論をあせりみすみす損をする

敗戦も飢餓も知らないネオン街

錯覚で合づち打った日の不覚

島根県 森 茂美

十二月八日忘れて憶けている

気持ちよく物価を上げてくれますすね

被災地の雪に捧げる鎮魂歌

新聞よりチラシが多い土日曜

湯豆腐がいいねと囲む小さな卓

島根県 伊藤 寿美

神様が逃げないように縄を張る
身の程を知って小さな葛籠拭る
錯覚のまんまで咲いて枯れた花
十二月独りで貼れぬシツプ葉
通販で買う病院に無い薬

岡山市 井上 柳五郎

生きている証念入り賀状書き
年賀状だけでとぎれぬ友もあり
生きる力ひとつ貰った年賀状
完投へエース個人の意地も見せ
並木道師走というに桜咲き

倉敷市 井上 富子

天下国家を論じて唾の飛ぶ炬燵
眼の中に入れて育てた息子がニート
雛祭りまだ健やかな老姉妹
虫の眼になって遊んだアウトドア
花鉢四季を手頃に剪って活け

倉敷市 小野 克枝

錆付いて離れぬ絆磨き合う
おんなから女に戻るまでの修羅
信念でとべよ陽だまり水たまり
崩れない女に夢が小さく住み
生きざまを見せて冬の樹天を突く

岡山県 福岡 智恵子

一年の計弱音など吐かぬ自負
退院の許可もらいまた羽ばたける
うっかりを痴呆と診られ医者嫌い
柚子味噌の出来を褒められ未だ遣る気
遠く住み心安まる子の電話

岡山県 富坂 志重

干し柿に一寸さわってハチにさされ
雑談でもらした一言悔いている
だます事だまされる事大きらい
少子化に悪いが未だに死ぬぬ九十路
辛抱をしらずに育った孫案じ

岡山県 小林 妻子

五十年手塩の山も無惨なり
白菜の一番漬が食卓に
食療法女も痩せるのに躍起
免許更新まだまだ車手放せず
坊さんも神職さんもクリスマス

岡山県 福原 悦子

道具箱覗けば見える父の顔
玄関に置いた金柑媚を売る
紙一重人生にある泣き笑い
包装紙無造作破りもめている
逃げ道に荷物が一つ置いてある

岡山県 山本玉恵

もう過去をたたんで明日の風を選ぶ
方田のかたちに添うて深む愛
切り捨ての台詞集めて旅に出る
偶然の出会い鼓動は鳴りやまぬ
仮面ひとつで浮世渡つて来た自信

岡山県 大石 あすなろ

煮びたしにわたしの愛を含ませる
野分け吹く冬の入り口覗かれる
盗まれた心お返し下さるか
カラオケの仲間はみんな主婦ばかり
まろやかな言葉で傷を彫りにくる

広島市 森田 文

似たようなはなし眼科の待ち時間
コスモスを五本束ねて賑やかに
枝豆のつるり翡翠とほめて呑む
誘いにも乗れぬ体力イブの宴
人情家行ったり来たり橋の上

竹原市 岩本笑子

雲よ雲よ後ろ姿が亡父に似る
耳をすますと夫の足音だった
新しき年平等に平穩に
師走とやテレビ一人がしゃべってる
ハンディはどうあれお餅好きな子で

竹原市 石原淑子

円くなる平和の好きなだんご虫
韓国ドラマ尽くす男に魅せられる
炊飯器賢くなつてパンも焼き
逢いたくて椿の彩のルージュ選る
被災地へ暖冬で佳し春よ来い

竹原市 森井菁居

貧乏くじ引いて結果は神任せ
コーヒーの美味さゆとりと安らぎと
寒いからみんなで囲むキムチ鍋
学力が落ちた日本の遊び癖
懐かしい人物運を連れて来る

竹原市 時広一路

和の心カクテルグラスいつも持つ
山やお洒落は任せておけという木の葉
観光地バス制服を着て並ぶ
平等なグーチョキパーで差をつける
錆びついたレールゆつくり行く私

竹原市 正畑半覚

若い若いと言われ続けて古希の坂
日向ぼっこしてます爪をつんできます
一匹も釣れなくなつてオゾン吸う
雪が止んだら蕾が開くかもしれぬ
歳をとるごとに輝く樹になろう

竹原市 小島蘭幸

腕立て伏せを五回ほどしてから眠る
傘を忘れたことは誰にも言いません
亡父のともだちと飲み明かそう春よ
八十四歳の亡父と飲んでる夢を見た
柱時計の中にいるのは亡父だろう

広島県 福島万年

しっかりと大きな嘘に抱かれてる
美術館出れば一変街の風

孫娘ピアノで今日の自己主張

細やかな年金妻の座は不動

我が庭にまた来てくれたジョウビタキ

広島県 藤解静風

弁解をすれば遠退く真実味

爪先と踵を使い分ける坂

合併をして村が消えバスが消え

ローソクの完全燃焼見て和む

まだ翔べる傘寿の翼手入れるる

宇部市 平田実男

菜園がオアシスとなる定年後

火傷した恋が脳裏を離れない

非戦闘地域がイラクにある不思議

負けて勝つことは勝つより難しい

好きだよと言いたい時もあるんだよ

美祿市 安平次弘道

百態の風に鱗を光らせる
飯の世の吐息でバラは枯れました
退化しているのは只の耳鳴りか
後始末するには夕陽赤すぎる
縄電車に乗ってた影を見失い

熊本市 永田俊子

人知れず白ばらだつて燃えている
紙縫りひねる指が昔をひきよせる
来る来ない花びら来ないで終る

アドバルーンゆらゆら自分を見失う

山海の珍味のはての白湯の味

熊本県 高野宵草

肩書きをゆずる肩の荷降ろすごと

日の丸の白き世界に見せばやな

クリスマスひと騒ぎして冬ごもり

美味しさは互いに本音吐ける酒

植木鉢玄関に居る霜の朝

熊本県 岩切康子

空に書く絵は晴々と無限なり

節目とて外遊二度も家空ける

腹立ててやがて馬鹿さを自省する

映画観て兄弟喧嘩懐しむ

家に居るだけで機嫌が良さそうだ

唐津市 宗 水 笑

少子化に済まぬがせめて卒寿まで
土石流河童の家も容赦なく
奥さんを好きで一票入れてきた
記念写真貫禄のない僕が居る
晩成の夢ほそぼそと孫の守り

唐津市 市 丸 晴 翠

新しい友も増やした住所録
目分量の料理を嫁が聞きに来る
性善説ニュースを聞いて死語とする
壁の花シャルウィダンスに血が騒ぐ
期限切れのお菓子私がテストする

唐津市 井 上 勝 視

納得し師表と仰ぐ塔誌読む
句馴染みに尻叩かれてついて行く
句の人に逢うて見たいと思う冬
DNA笑い乏しい句が続く
私だけ何故と焦りの続く闇

唐津市 坂 本 蜂 朗

お揃いのセーター妻は見せたがる
手作りのマフラーやけにまといつく
汗のシャツ臭っています生きてます
シャツとシャツ笑みのこぼれる缶ビール
妻の客奥へ肌着が逃げていく

唐津市 樋 口 輝 夫

鬼の首取る気で探す誤字脱字
乗り越した上に忘れた棚のもの
乾杯の前口上が長過ぎる
そんなにも偉かったのかと聞く弔辞
無い袖も振らねばならぬ熨斗袋

唐津市 久 保 正 剣

夙とおでんの素が手を結ぶ
指輪という手錠欲しがるのも女
純愛がダイヤに負けた星月夜
パンチパーマなかった頃の征露丸
つんのめる足でふんばる傘寿坂

唐津市 山 口 高 明

言論の自由皇室批判する
役得と懐肥やすお家芸
一遍で出来る治療を二度に分け
屠蘇酌んで一寸エッチな父と成り
伝統の国技支える異人さん

大洲市 中 居 善 信

道逸れて一つや二つ嘘もつく
燃えるものいっぱい抱いていた二十歳
友達とその友達も仲間たち
何か事あれば集まる血の絆
阿吽には遠いところにいて夫婦

東かがわ市 清川 玲子

台風に好かれて日本水浸し
エンピツの先から森の匂いする
偽装表示罪ないうどん泣かせます
やさしさがどの薬より効いてくる
歳だけどはばたいてみよ酉年に

東かがわ市 池内 かおり

こんがりと妬く頃合がむつかしい
落込むと高見盛の真似をする
可愛くてつい意地悪をしてしまう
逆風も思い違いも越えた仲
我が身より痛い新車のかすり傷

東かがわ市 川崎 ひかり

ドリンクを飲んで頑張る孫の守り
恩ひとつ返して除夜の鐘を聞く
旅行日は晴天と決め組むプラン
五分五分の勝負急がぬ方がいい
長所だけ拡大コピーにして配る

東かがわ市 原 賢

ひと呼吸おいて微罪を許し合う
無為徒食妻の荷物となる余生
細やかな生き甲斐ですと茶を入れる
信頼を崩さず夫婦しています
ポケットにまだ古惚けた恋がある

東かがわ市 伊勢 八重子

病院の長い廊下にあるドラマ
結願へ心も温いお接待
口喧嘩まだまだ元氣あるしるし
いい話誰かに言いたい喋りたい
百薬の長が命の鍵握る

東かがわ市 神保 坊太郎

お見舞に良く効く嘘を置いて来る
来年の今日会いましょと主治医殿
出雲へも離婚届をしなければ
五センチがあれば脚立を落ちまいに
どこまでを芝居にするか妻の乱

松山市 丹下 美津子

砥部焼の鶏も威張って春の床
吉兆の知らせ白雉舞い下りる
耐えて来た歩みを母は語らない
ほどほどにすればよかったボロが出る
何時の間にか大事な家の嫁になり

松山市 宮尾 みのり

檄文は真筆がいい下手でいい
お利口になってこの頃叫ばない
子守唄うらみつらみが垣間見え
辛辣なジョークふわつと京訛り
喪主の座が微妙に浮いている葬儀

松山市 高橋 宏臣

高知県 赤川 菊野

磨かれた窓に世間がまぶし過ぎ
だまし舟何度折つても騙される

句読点打って横道から戻る

変わらない顔だが明日に自負がある

鉢巻きをきりと軒かいている

松山市 古手川 光

ロボットがやり取りしてる年賀状

大地震怒りを向ける先が無い

再会を指切り紅葉地に帰る

抜けるような天がこせこせを喰う

幼児惨殺書きたい死刑嘆願書

高知市 小川 てるみ

脱ぎ捨てる殻が硬くて剥れない

真心をあげると温い風が吹く

丸ひとつ描いても昨日とは違う

酒好きのDNAがあるらしい

事情など知らぬ他人の差し出口

高知市 北川 竹萌

初日の出拝みに鏡川堤

盟友の一字が温い年賀状

世の移り日々のテレビを追うて知る

検診に朱点なしとて主治医言う

日を拝み年の始めのカメラ撮り

激動を生きた男のデスマスク

箸一膳今年も同じ屠蘇の膳

ゆきずりの風が人生変えてゆき

鈍行で車窓の景色ひとり占め

岩田帯一度も巻いた事がない

砂川市 大橋 政良

人間ドック錆を落しに行ってくる

息抜きを考えている途中下車

一すじの煙で野辺の人となる

檣山天国入居予約をしておこう

止り木にジキルとハイド来て座る

黒石市 相馬 一花

アオムシのように野菜を摂る暮し

平然と浮気重ねるのも男

女房が青筋立てるツーショット

突然のクマに必死の巴投げ

万華鏡覗き良からぬこと思う

十和田市 阿部 進

ボケ防止毎日酒を飲んでます

長生きをしたいポックリ死もしたい

喜寿なれど人生まだまだこれからだ

もう一度あの日あの時きて欲しい

血糖値高く酒抜き喜寿祝

弘前市 高瀬霜石

小銭入れだけが元氣な音を出す

ピンボケの写真にひとりホツとする

割り勘に決まる飲む人食べる人

インスタント好きですカメラもコーヒーマ

シルバースーツ明日は僕が座る番

弘前市 岡本花匠

納豆のねばりで雪に身構える

白い闇抜け出る願ひ四季の歌

ティータイム春待ち侘びる笑いの輪

雪晴れ間ヨン様気取り街を行く

寒月の情緒に浸る露天風呂

弘前市 相馬銀波

見送りの泪を嫌う亡母でした

軸足の右がカーブを楽にさせ

裏の裏読んだ質疑が足枷に

歩く飲むたべると寝るの子守する

弱点を見抜かれました酒にする

弘前市 今愁女

風神と地震なに脅され年昏れる

手つかずのあしたがあるさ初日の出

年金で三食喰えるありがたさ

贅沢は敵の時代育ち華美知らじ

大人は怖い児らに教える情けなさ

弘前市 高橋岳水

好奇心うせて臍抜けの殻になる

体験がないから無茶な机上論

人恋うて路地に住みつく雪女郎

ある予感万札で買うジャンボくじ

雑兵の終着駅は始発駅

弘前市 富士慕情

眠れないまま朝刊の音を聴く

親殺し子殺しの記事またかいな

詰め放題まだまだ欲を詰めている

松茸を買う人を見る好奇心な目

礼智信忘れ路上の座り臍臍

弘前市 宮崎ヒサ子

新駅落成火花が呼んでゐる

もうバーゲン季節狂っているのかも

平凡に回る時計の頼もしさ

潮時でした障子ゆっくり張り替える

新しい暦に息を吹きかける

弘前市 須郷井蛙

老人会役が付いたら下りられず

買物でゴミも一緒に付いてくる

燕の巢いいなあ兄妹いっぱいいて

ご近所の生活が見える散歩道

安売りの日まで耐えてる母の腕

第5回 春はくろぼこ川柳大会

日時 4月3日(日) 10時～15時 開式13時
会場 新日本海新聞社中部本社ホール
(TEL0858-26-8300) (JR倉吉駅下車
⇒徒歩…直進10分・左折3分)

宿題 《欠席投句拝辞》

「母 校」河内 天笑選 (堺)
「悪 い」天根 夢草選 (茨木)
「抜 く」内田 久枝選 (松江)
「ストロ―」嶋澤喜 八郎選 (交野)
「着 る」山本 玲子選 (倉吉)
「甘 い」山下 節子選 (岩美)
「無 色」西浦 小鹿選 (鳥取)

出句 各題2句まで 締切11時30分
会費 2,000円 (入選句集呈)
昼食 弁当80個用意 (¥ 600程度: 当日
先着希望者)

表彰 最優秀作品賞・優秀作品賞 (河内
月子選) 秀句賞 (各題3句)

懇親宴 3,000円 (大会終了後・同ホール)

問い合わせ 鈴木公弘 〒689-0343

鳥取市気高町飯里84-4 TEL0857-84-2886

(主催) くろぼこ川柳会 (共催) 公家の会ほか

(後援) 新日本海新聞社 鳥取県川柳作家連盟

行間を削ると見えてくる本音
水臭い男は裏で呼吸する
リハビリを兼ねた散歩はパチンコへ
青かった海は帰らぬ少年期
水を流してからパンツ上げている

青森県 小寺花峯

嬉戲ながら登山している実年者
焼けただれ骨立無膚の山なんて
エメラルドグリーン思いがけない釜の色
こまくさのエロスが拗ねている砂礫
しのびよる硫化水素のしたたかさ

弘前市 櫻庭順風

朝日なにわ柳壇 今年の10秀

—16年12月25日発表—

(太字は本社同人)

最優秀句 川柳塔社名譽主幹 橋高 薫風選

長生きの母が初雪うれしが
秀句 横山 捷也

全集もの二冊目からは飾り物
名人がチャンスは三度あると言う
大北 芳郎

紅一点空気がわらわ老いてなお
歌舞伎観た帰りイタリアレストラン
米澤 徹子

凡人の日記は三度めしを食い
定期より切符で乗るといい景色
村上 玄也

ちよっぴりの黒字で妻と回り寿司
腰痛のお蔭で文は簡となる
藤井 則彦

故里に帰り電気を消して寝る
番傘川柳本社幹事長 田中 新一選

最優秀句 吉道あかね

こんなにも強い私の傷だらけ
秀句 森本 月子

いつか来た道かも知れぬ胸騒ぎ
人間の傲慢裁く川の色
吉道航太郎

身を削りながらも父は唄つてた
笑い声ぐいぐい元氣引き寄せる
辻村 衛

覆水が返らぬならばすすののみ
老いの胸にドン・キホーテの槍光る
井本 健治

帰ってこいと言わぬが父の祭り笛
意志ころす静かに秋刀魚裏返す
谷村 正明

子を守る母の機転は神がかり
中川 実

川柳塔の 川柳讃歌 ②

木津川 計

「貧乏人の振る舞いとはどういうものか、具体的に書きなさい」という入学試験問題を出した専門学校のマスコミ科があった。

その答えからいくつかを。①電車の中でキップを握りしめている。②メニューを手に品名より値段を先に見る。③自転車を盗まれたらといって警察へ届ける。④布団をよく干す。⑤カツオ節のバックを輪ゴムでとめている。この答えにはくは参った。③の場合は諦めるが、あとはくわが家の振る舞い、その日常でもあるから。

タクシীরメーターばかり見て着いた

三宅 保州

振る舞いの機微をよく捉えている。持ち合わせの心細いときなど、ばくも見詰める。降り際にメーターの上つたときのくやしき、もうちよつと走ってくれと言ふ訳にもゆかず。いっそメーターの上る残り距離も刻々表示できかないものか、と思う貧乏人気がいまもつ

て抜けないのが悲しい。

立食パーティー何だか損をしたような

宮尾 みのり

パーティーと称しても立ち食いなのである。ある立食パーティーでチキンにかぶりついている麗人を見て、その浅ましさにがっかりした。思えば、逝つた中村歌右衛門はパーティーで一切飲まず、食べずを貫き通したのである。かくありたいといつてもなかなか。右の句、高い会費を払つたのに、の思い。

反対のホームの人を見て飽きず

有 沢 せつ子

人間のバノラマを一望しているのだ。次の電車を待つ、その待ち方の一人ひとりの違いである。せつ子さんもわずかとはいえ所在ない待ち時間を、人間観察に当てれば飽くことがないと思つたのである。いい方法の発見。

秋風に物言いたげに散り行く葉

南原 正和

あはれ／秋かぜよ／情あらば傳へてよ。佐藤春夫が詠つたように、秋風に人は悲しい思いを託そうとしたのだ。散り行く葉を人間の終末になぞらえれば、秋風に言い遣したいことはいくらもある。

加藤楸邨であつたか、「向日葵の大声で立

つ枯れてなお」を思い出す。花も葉も語りかけているのである。まして散り際は、ときに寂しげにかほそく、あるときは大声で「わたしはまだ死にたくないーッ」と。

冬至の日古参の首を斬りにけり

高瀬 霜石

師走の二十日過ぎである。斬られた古参の祝えぬ新年が目に見え。さて、斬つたのは何者か？①リストラを進める非情な会社である。②霜石さん自身である。

しかし僕には、そんな非情をこれみよがしに言い立てる人物がいるとは思えない。指名するリストラ係は後味悪く、罪悪感に苛まれている。冷たい日の冷酷な仕打ちの故に。

右の句、古参の首を斬つた会社のやり方を霜石さんは知り、同情したのだ。「切り」でなく、「斬り」にその思いがあふれる。

幸福と思う淋しいとも思う

出口 セツ子

今は煩わしいことのない解放感である。幸せ、と思うが、やはり淋しいとも。山頭火もセツ子さんの心境であつた。

やつぱり一人がよろしい雑草
やつぱり一人はさみしい枯草

（立命館大学教授・「上方芸能」誌代表

自選集

橘 高 薫 風

点滴の自問自答に答なし
八十の恋も迷宮入りとなる
砂湯にて似たビリケンの足の裏
ネクタイをすれば道化になりさがる
志のかけらを拾う旅に出る

両 川 洋 々

テロ憎む赤い呪いの月が出る
還暦も恋する電池切れてない
キリストもアラームもいくさ好きらしい
たっぷりの余生だ恋もして逝こう
告発のペンが暴走して困る

阿 萬 萬 的

落ち目かなついつい愚痴の数がふえ
うす味に馴らされ元気でいる老後
生きてれば何とかなるさ ケセラセラ
数多い恥を重ねて来た米寿
米寿ですばらばら行こう老いの坂

石 川 侃 流 洞

内視鏡心の奥を覗いて見
米寿もう釣瓶落しに似た余生
添寝して嫁の寝言の子守唄
鰯不漁分っていないしらす干し
外国産だつて松茸土瓶蒸し

板 尾 岳 人

なにごともしなかつたように咲いて梅
あれ以来逢う人もなし冬ごたつ
梅一輪母の乳房よおぼろ月
全身で愛した花に水をやり
冬景色乳房が二つある如し

奥 田 み つ 子

ETと共に観た日もかすみゆく
繁二郎展 馬を眺めた日も遙か
かりそめの絆にしては長過ぎる
恩は恩 死ぬまで忘れないだろう
命とや かげろうの如 鈴のごと

河 井 庸 佑

持病とは付き合うことにして余生
どちらとも取れる返事で迷わされ
一石を投げて度量を測られる
捨て石で相手の出方そつと見る
建て前で切り抜けてきた会議室

川 島 諷云児

決断は今だ遮断機上がつてる
底のない柄杓で水を汲む暮し
明日あると思えぬ歳になりました
貯めとこう三途の川の渡し賃
友情に胡座をかいていた迂闊

木 村 あきら

家族風呂菩薩の首が浮いている
曾孫守る使い古した子守唄
一日一善淋しい心満たされる
泣き顔は見せぬ男の意地つ張り
耕せば土も返事をしてくれる

工 藤 吟 笑

寺の庭老僧休みながら掃く
線香の煙で薬師目が開かず
ただ会釈だけして行つた老遍路
迷信と思うが結局神頼み
街角で行燈揺れる占い師

黒 川 紫 香

無念にも入院中と書く便り（再入院）
夢ばかり見ていて一夜また明ける
病床で思うは句会のことばかり
一日をテレビ見ながら思うこと
来年は白寿大事な命だな

小 西 雄 々

傷ばかり増えても曲げぬ自尊心
氷上を舞う妖精は炎になった
ガーデニング一家総出の知恵を出し
大根抜く背なの大山今日も雪
好意抱く人の棲む町雪が舞う

小 林 由多香

災の年払うお飾り太くする
掛軸も変え正月の床にする
ありがたや賞与例年どおり出た
神さまにお願いしても駄目だった
小細工をしたところからほつれだす

斉 藤 嘉

ありがとうのことばがきれい子の瞳
腐葉土になリたくなつて散る木の葉
逆転のチャンス代打が燃えるとき
再会は翼の像の前と決め
初空を子等の風絵にあげましょう

田 中 正 坊

シナリオをまた書き替える酉の春
生き抜いて迎えた戦後六十年
六十年まだ生きている 生きてやる
老いぬれば命だんだん重くなる
老いてなお花咲かせたいのち

玉置重人

釣書きに酒と煙草は書いてない
串カツの匂い素通りむつかしい
遠回りしてもあかるい道帰る
スケジュールこなすカルシウムを補給
いくばくの余命と思うペンを研ぐ

恒松町紅

もし予告あつても自然には勝てぬ
金利ゼロ大きな誤算出納簿
指定券小さな贅沢老いの旅
世相荒れ話題も多い交差点
斜めから撮つてもやはり皺の数

遠山可住

風と遊ぶ余生は神に任し切る
ポケットにいつでも父が生きている
納豆にウマが合わんと嫌われる
とろろ汁おろすほど良き手の疲れ
初恋も別の港で老いている

土橋螢

青春に誓ったことば思い出す
柿盗りに熊が出るとは恐ろしや
老人にならず黙つて恋をする
一年を縮めて一つ歳をとる
振り向くと罪の欠片が落ちている

仁部四郎

葬式の受付ができ見直され
葬式の受付笑いたいことも
葬式の受付ものの値段知り
葬式の受付いろは歌留多読む
葬式の受付に居た大物氏

野村太茂津

兇殺し奴おまえは酷いバラノイア
死刑より無期だ死ぬまで謝罪せよ
親の身になれば今夜も眠れない
長生きのお陰深夜テレビに訓えられ
目標は白寿と決めている卒寿

波多野五楽庵

謎謎が解けず駄まで来てしまう
花和讃ねむれねむれと言う如く
木枯しが冬の訛りを駈け抜ける
酔い過ぎて突然家出したくなる
負けが続いて亡母に似ている雲さがす

藤村メ女

真つ白に干してはればれ心足る
見たまを語る子の目光つてる
おでんふつつ大根がのぞいてる
幸福を自分に聞かせ鍋磨く
お先祖に健康感謝の灯を点す

芳 地 狸 村

デイゴ咲くサンゴの島へ舟の旅（宮古島 5句）

潮の香のしみる灯台ひるかすみ

珍しい貝が集まる海宝館

赤青の彩が見事なみやこ焼

絶景の隆起サンゴが芸術品

宮 口 笛 生

蟹食いの旅ホイホイと行く夫婦

野良着からスーツに替えて旅に出る

酒一升鞆に入れて楽し旅

中毒は承知の酒に舌つつみ

蟹食いの土産に蟹を買ってくる

森 下 愛 論

哀しさの走るページの裏を読む

残像を背負って孤独老いてくる

新札の上で凡夫は眠くなる

引き裂けぬ想が瞳の裏にある

運命線見つめ余生を確かめる

八 木 千 代

清らかなままに芒と月の仲

芒野になるよ月見草の跡地

月見草の代わりに植えた椿の木

月からの文を椿は運び人

咲くも落ちるも独りで決めてわがままな

八 十 田 洞 庵

呼び鈴へせめて女の髪を撫で

一言で別れ愛とは何だろう

同権のおきて女に迫られる

まだ色香うつる鏡に燃えるもの

蛇になるか仏になるか紅を引く

寒 中 お 見 舞

今年のお正月は入院してしまいましたので、欠礼することが多く失礼しました。外は今にも雪が降りそうですが、温い病室で過しています。この号が出る頃、退院しているかも知れません。今しばらくがんばり、皆様にお会いできるのを楽しみにしています。

黒川 紫香

第15回 井笠川柳会笠岡誌上大会

薬 ひこばえ

課題「夜明け」 「動 く」
 今川 乱魚 伊豆丸竹仙
 村上 永筆 共選 川上 大輪 共選
 土橋 螢 恩塚 治子
 応募料 1000円（定額小為替）発表誌送付
 応募要領 指定の用紙又は便箋に各題2句（計4句）を列記。郵便番号・住所・氏名・柳名・電話番号・所属柳社名を明記（全てにフリガナを付ける）
 締 切 2月21日（月）
 投句先 〒714-0081 岡山県笠岡市笠岡507-68 井笠川柳会宛
 TEL 0865-63-5858 FAX 0865-63-6131
 お問い合わせは 戸田さお迄
 賞 品 課題1位には石碑贈呈（2名）（本人希望句・5月21日建立）
 3才に粗品呈（句碑建立者を除く）
 会員募集 年会費2000円（年4回誌呈）

水煙抄

奥田 みつ子 選

八尾市 脇 俊子

年輪を重ねて夫婦洪も取れ

四方山の障りをとばす深呼吸

マジックで変身したい夢がある

組紐の撚りに女の性を見る

木漏れ日をつかみ取りしてティータイム

好き嫌い花占いに身を委ね

愛媛県 花岡 順子

また逢いに来るよ優しいことを言う

大根を煮込む師走の音の中

折り合いをつける潮時むずかしい

三度目の嘘にも母は騙される

生きたとは地団太踏んだ時も過ぎ

オレオレへ家の息子は居てまつせ

和泉市 横山 捷也

激論に洪茶一杯ソツと出す

大ジョッキ熟女同士のグチが飛ぶ

週刊誌一冊読んで輪に入る

若い気でいる女房の靴の色

良い趣味とほめられ野菜おいてくる

出世した順に上座の同期会

シドニー 三谷 たん吉

皆様と共に不正かNHK

銀行屋タマシイ売って地獄行き

武士道のかけらも知らぬ日本人

ニュースより低俗テレビまだましか

ふるさとよ少しは残せあの頃を

見せてくれ誠実毅然明快さ

高知県 桑名 孝雄

談論風発なくてチビチビやる二月

節酒節煙中途半端な妥協策

自己責任の重みが判る二日酔

風やよし いざ出陣の孫の風

酷寒のみぎり小人閑居する

今治市 塩路 よしみ

京懐石くずすに惜しい迷い箸
媚売らぬ野生に生きる鬼あざみ
弱音など吐きはしないよ陽は昇る
この橋を渡れば涙枯れますか
ひと言が胸に重たい傘の雪

大阪市 升成 好

健康の過信を叱る内視鏡
せつかな釘はまっすぐ打たれない
学ぶより遊んだことが役に立ち
愚かさを許すゆとりがまだ持てぬ
ゆうゆうの亀は兎と競わない

八尾市 松葉君 江

ご近所は大事と亡母口癖に
先のさき読んで近道教えない
ゆつくりと走れば景色倍に見え
アクシデント バネに最悪最善に
失敗を見守る親にいる勇氣

日立市 加藤 権悟

太陽を一気のみする日本海
とろ火ことと母のおでんが待っている
父さんが一番似合うヘルメット
階段を登ったとこで息を吐き
風をよむ男寝返りが早い

東京都 やまぐち 珠美

失敗の彼方を見ない木偶の夢
汚れとはいいのちの軌跡綿ぼこり
半分の笑み煮凍っているころ
シューズから解けて素足はよくしゃべる
サイフォンと語って醸し出す宇宙

今治市 渡邊 伊津志

眼鏡から目が飛び出してくる激怒
お言葉を返す気静かに眼鏡拭く
孫を抱く眼鏡とられて嬉しがり
判一つ押すに眼鏡を掛け直し
美人ではないが眼鏡の似合う顔

草加市 飯土井 健翁

老いてなお覇気で勝負をしてる日日
底辺に生きて宝となる闘志
プロレスを見て血が滾るまだ卒寿
退屈を知らぬ卒寿の読書欲
百の坂五合目からのきつい坂

和歌山市 柏原 夕胡

透明になるまで深呼吸をする
濁点が多いわたくしの歴史
迷想の中でわたしがもがいてる
吐息ひとつ突き抜ける嘘許してる
叶うならあなたの山を登りたい

岐阜市 平野 あずま

大阪市 伏見 雅明

八方美人みんな味方でみんな敵
贅肉はすっかりとった吊し柿
太陽を吸って艶増す柿すだれ
五平餅にまぶしてあつた木曾の秋
バラ銭で天下を握る屋台酒

泉佐野市 稲葉 洋

フセインに立場聞きたい泥試合
報復に歴史何処まで遡る
地震雷おやじのランク下げ放し
食い扶持の年金削る熨斗袋
世を映し仇も情けも様vari

堺市 大久保 伸子

東京都 井上 つよし

無記名にしたからみんな反対だ
にくらしいけど正直な鏡です
鬼の面かぶって弱さかくしてる
茜雲わが身をめぐる秋ひそか
運氣よい風を静かに待っている

神戸市 両川 無限

相生市 村木 信子

どん底で流した涙無駄にせぬ
思い出をたどると伸びてくる絆
少年の脱皮愚図った跡がある
聞き違い思い違いでまたすねる
楽々と生きて聞えぬ天の声

気合い負けせぬようにいつも背伸びする
しんがりを妻が受け持つ縄電車
母子元氣妻と安堵のお茶を飲む
入社式やがて会社を背負う顔
立ち上がるたびに気合を掛ける妻

藤井寺市 若松 雅枝

ナツメロが心に沁みる年の暮れ
任地から名物詰めた愛の便
松の内虫干し兼ねて和服着る
今年こそ今年こそとて日を重ね
思い切り両手伸ばして春謳歌

駈けて来るリングの頬の声弾む
まだ来るな遺影の友が語りかけ
落武者になつて見送る三次会
追伸の追伸出来て書き直し
どんぐりの小径で君と拾う秋

悠久の大地に挑む鋏の汗
学歴が光る時代よ遠ざかる
除夜の鐘いい年でしたありがとう
若水を汲んで至福のお茶点前
浮世旅始まるでかい呱呱の声

シドニー 坂上 のり子

學術調査と言つてグルメにする鯨

人殺しの人権守る弁護人

平和つてひもじい子等のない世界

捨て金になつて習つた世の仕組み

温暖化どんなだ五十 百年後

メルボルン 藤原 ポン吉

パチンコで捻出するぞお年玉

予知はずれ自信が揺らく予報官

リストラの父が張り切るお餅つき

美しい音色爪弾く給料日

韓国語身につけ夫様になる

北九州市 岡田 幸生

出る杭に寒い視線が突き刺さる

あり余る暇があるのに無洗米

子は都会介護保険の世話になる

世話焼きが纏まる話ぶち壊す

ときめきはもう無い妻と待ち合わせ

高知県 百田 幸

ふところが寒い夫は楽天家

ささやかな貯金箱だが夢がある

丁寧な言葉に少し距離をおく

一輪の花玄関にある温み

難聴の妻に夫が気を配り

今治市 野村 清美

茶柱に今日一日のいい予感

ホッとしてひとり芝居のにが笑い

コーヒーに心安らぐ昼下り

さりげなく夕日に心洗われる

転びそうで転ばぬ足を撫でて居る

府中市 馬場 利子

雪しんしんわたしの過去を埋めてゆく

山あり谷あり人生まわり道

傷が癒え明日のドラマを組み立てる

罪一つ許して眠る冬の森

花切手心をうるおすひとりぼち

広島県 藤岡 ヒデ

木枯しに抵抗もなく舞う落ち葉

富有柿また来年のお礼肥

ビーボーが師走の町を急きたてる

ホールインワンたまにあるから面白い

来年へまた夢を追う亀の足

倉敷市 撰 喜子

嫁ぐ子にしんみりしてるパパ一人

糸切れた風の自由を知った父

散歩道土恋しがる犬の爪

誘われた趣味に余生の花が咲き

家事分担男女平等ふりかざす

松江市 山根 邦代

鳥取市 谷岡 清子

毎日の予定気楽な風まかせ

年の瀬に小さな義理が走り出す

やる気湧く孫の笑顔の力なり

朝霧の中でふるさと動きだす

頑張りをくれる野山の秋の色

出雲市 加藤 スズコ

ためいきを笑って聞いてくれる人

心の渴き癒してくれる里の水

うっかりとチャッカリ姉妹仲がいい

生い立ちを語る親子の夜は長い

一番違い吐くためいきの当りくじ

鳥取市 岡田 信恵

人生をつまずきながら生きている

なに一つ不足はないが愚痴こぼす

子宝と愛され育つ一歳児

一つだけ子どもに内緒の夢がある

信頼の絆でつづく親子です

鳥取市 河田 のり代

集うごと唄って残す労働歌

遠来の客のみやげは柿づくし

マーちゃんと呼べば振りむく孫二人

新品の靴だ座敷で履きならす

心ない言葉の角が身を責める

球根を植え春会うを信じつつ

泣き笑い日々を紡いだ師走風

今日も無事沈む夕映え手を合わす

喜怒哀楽八十年の足の裏

老いてなお夢と希望は捨てられぬ

倉吉市 酒井 芙美子

まだ白寿浮世のテープまだ切れぬ

遠くの孫ビデオに撮ってなつかしむ

やる気でのスタート古希の坂登る

化粧した心が春の風に乗る

ゴミなのにボーイ捨て出来ぬ戦中派

米子市 小塩 智加恵

具だくさんおつゆに元氣もらう朝

ヨン様を見てもこの胸正常値

夫婦でも違う薬で生かされる

祝う春ビール値上がり税も増え

逆らわず丸く丸くと生きている

米子市 足立 由美子

今ならば若さで苦勞のり切れる

響き合う絆を太く強くする

ゆつたりと山の紅葉とひびき合う

童心にかえり素直さ取り戻す

児童への安全地帯減るばかり

米子市 猪 森 スミエ

信号を確かめながら渡る杖
新しい年に羽搏け千羽鶴
古傷になるべく触れぬ思いやり
童謡が湧く故郷の山や川
童顔が残る彼女の片笑窪

米子市 池 尾 保 子

インターネット意味は孫から教えられ
味噌汁の香りが誘う眼が覚める
本当の素顔鏡が知っている
壁一重災いもあり幸もあり
新築に古い表札似合ってる

和歌山市 土 屋 起世子

ひとり住む家に陽が射す月も照る
共に来た苦節の道に咲いた花
今朝もまた茶粥戴く幸がある
煩惱のつづく余生の日記帳
迷子札親に付けてる手が震え

和歌山市 寒 川 武

深々と保身のための頭下げ
結論はともあれ握手して別れ
本心が知りたく少し隙を見せ
文句言う割に協力してくれぬ
ポケットに手品の種を入れ忘れ

和歌山県 森 下 順 子

冬晴れに日頃のうつも逃げてゆく
冬日和暗いニュースをふと忘れ
水仙満開暖かい十二月
ポinasがなければない年で暮れ
ほどいたり編んだり一人の夜は長し

和歌山県 木 村 徑 子

どうだどうだ銀の大山誇る空
カニの宴百万ドルの笑み並ぶ
一幅の絵となる庭に唸らされ
大言海棚からにらむ電子辞書
もしかして私遅咲き詩の精

奈良市 乾 春 雄

級友の夢カプセルに子ら巢立ち
人生の流れを変えた句読点
秋の雲放浪癖がまた騒ぐ
挟まれた葉か本の吐息聞く
片想い胸のトレモロ鳴りやまず

奈良市 矢 野 良 一

繭の実が真つ赤に燃えて秋がゆく
苦あれば楽と亡母の口癖子に教え
男が立たぬ力んでみたが金がない
ふるさとの匂いを連れて友がくる
なにわ文化割り勘主義は合理的

奈良県 藤村 重之

叱られた思い出今はあったかい
ふるさとの野壺今でも忘れない
感傷を誘うアルバムセピア色
飲めぬ分帳尻合わす食べつぷり
ヨン様の騒ぎの外にいる亭主

奈良県 江波 正純

お近づき増える嬉しい六十路坂
九条を皆で担って来た日本
夢があるカウントダウンまだしない
コロないが筋でおでんはよしとする
病歴の自慢花咲く四人部屋

神戸市 木村 忠義

痛そうに新車のきずは目に映る
表札も国際的になつてきた
子供より犬と散歩の人が増え
いつまでも地震の怖さ変わらない
前向きの持続やつぱり酒が要る

神戸市 田中 章子

洗濯がすんだら命干す予定
姑の味をつないで大根干す
足腰を鍛えにジムに行く車
冬近し余震の続く村如何に
星占い今日はいいいこと有りそう

神戸市 山田 婦美子

甘い夢見たくてワインの栓を抜く
薄化粧まだ女です自己主張
少しだけ未練あるけど火を消そう
身の程を知って生きぬく糧とする
言葉には出せぬが熱い血が騒ぐ

伊丹市 延寿庵 野鶴

耐えぬいて人の輪温いバスの屋根
いつだって心の芯は曲げず生き
たつた今不意を衝かれて吐く本音
明日の夢抱いて耐えてるフリーター
忍一字耐えた経験バネにする

篠山市 谷田 多美子

オレオレじゃなかった孫からオバアちゃん
いやなことすつかり脱いで衣替え
よい知らせ待つ朝靴を光らせる
台風に地震日本の地形変えて冬
お遍路の姿にはほっとする夕べ

三田市 石原 歳子

むしろくしゃを抑え静かに菜を刻む
見ただけで幸せくれた鶴
家中が孫の遊戯に沸いた夜
鮎色に煮た大根と夫待つ
そそくさと家事を済ませて友に会う

三田市 堀 正和

冬が来たラジオ体操止めにしよ
渡り鳥コスモポリタンだと思ふ
特養へ行った噂を聞く師走
振ったのは忘れ振られたこと覚え
温暖化僕の冬眠妨げる

西宮市 片山 忠

Vサインしても哀しくなる齡
踏みはずす道があるだけまだ若い
愛ならばトスが下手でも受けてやる
メールだと妙に優しい妻となる
無職でも遊び人とは違います

大阪市 三浦 千津子

遠い日の恋はさらさら砂時計
子と孫の中で多忙の有難さ
不器用は私の愛すべき個性
無い知恵をしぼって生きた顔の皺
退屈な耳が微熱をもつ噂

大阪市 原田 すみ子

手品より鮮やか季節のうつろい
メーキャップ手品のように別人に
決めかねて揺れるまなざし神探す
秋は罪おいしいものが揃いすぎ
柿好きの母の笑顔へ秋日和

大阪市 中井 萌

喧嘩せぬ約束をして夫婦旅
住職が父の具合を聞いてくれ
介護する心にも鬼住んでいる
犠牲者の一人ひとりに名前ある
本心を言えばやさしさひとつ消え

泉佐野市 備後 三代子

玉椿おしやれ可憐にわたくしも
禁酒令守る夫を見る辛さ
夕食もそそくさとすむ禁酒令
ほどのよさ真似の出来ない母の味
心地よい母声いろの子守唄

河内長野市 大西 文次

奥様が骨太夫柳腰
そんな顔するなと親父同じ顔
後はもう成行まかせ人まかせ
留守ですかお出かけですかそうですか
吹きだまり落葉が寄って大騒ぎ

河内長野市 坂上 淳司

捕鯨国なじる牛肉輸出国
碁敵が病むからパチンコ屋通い
鬼も内清濁併せ飲んで古希
土団子磨いて玉とする童
柔肌を撫でるが如く陶土練る

岸和田市 坂口 英雄

被災地の復旧急かすジングルベル
ボランティア暇な人ではありません
オレオレに騙されそうな日向ぼこ
紅白もさびしくなった視聴率
小泉さん都合悪けりゃ先送り

堺市 羽田野 洋介

一言が嵐を呼んだ口答え
どの新聞みてもやつぱり負けは負け
あの頃の記憶も浮かぶ愛読書
慣れた道段差忘れて蹴つまずき
やつぱりね白く見せても黒は黒

堺市 奥 時雄

愛された分だけ人を愛したか
動物の必死の愛をみるがいい
おのずから親が示した人の道
縄のれん客の顔ぶれみてくぐる
あとで来て美人のそばに割って入る

堺市 河盛 龍三

失敗を試練と思う日は何時か
梅もどき鷲もどき来て遊ぶ
途切れない喪中便りに慣れて行く
友の顔思い浮かべてもう師走
夫婦とはおかずを種にまた喧嘩

堺市 荻野 像山

人名漢字増やしても少子化止まず
冬ソナてなんじやいなあと言う老母
テロ弾の犠牲なければ非戦闘
そのうちに弾に当たれば非国民
年金の枠で道楽やってます

吹田市 二宮 栄子

天国に通じる電話ないですか
照れ笑いだんだんうまくなって老い
趣味の会出かい大事に古希の坂
善を積む思いで残り火を炎やす
独り居の心に鍵をかけて住む

高槻市 富田 美義

市長室いつも空っぽ被災地は
北風に歳暮便より喪のハガキ
真冬でも四季が溢れる八百屋さん
偏差値は命の重さ教えない
くじ外れ今年もひとり雪見酒

羽曳野市 森下 一知

味噌汁に解けた昨日のわだかまり
不器用は貧乏神と仲が良い
末席で風を煽った独り言
矢玉を弾く鱗が脆くなってきた
誘われる老人会に鯖を読む

羽曳野市 福田悦子

チヨコレート分つて欲しい愛を込め

今年来ぬ年賀の友が気にかかり

一人鍋 写真の亡母の箸もそえ

五指動く神に感謝をしなければ

梅だより春の息吹を聞く二月

枚方市 二宮紫鳳

孫寢息聞いてサンタも忙しい

夕焼けが明日の幸を予感する

七五三晴着姿の指しゃぶり

幸せは元氣な夫の高笑い

孫二人転がるように腕の中

枚方市 小川良吉

たそがれて片道切符うけとめる

有難う草木に言える歳になる

古稀過ぎて人生パズルまだ解けず

迷いつつ大過なく生き日暮れ坂

いつからか本音たてまえ分ける舌

藤井寺市 俣野登志子

人さまざま上を見てたらきりが無い

体力の試練年末大掃除

私には待つてくれる人がいる

里帰りの娘に愚痴を聞かせてる

生きてる証悩みがあつてあたりまえ

藤井寺市 伊藤アヤ子

年賀状瘦せた曆に急かさせる

それぞれの愛が大きな輪をつくる

さまざまに生きた証の共白髪

落ち着けばさまざまな事良く見える

落葉ふみ杖をたよりに熊野古路

藤井寺市 吉田喜代子

世界の珍味日本の居間で目で食べる

泣き所かたい約束孫の指

七十歳の扉が開く音がする

行く道に力貸してねおとうさん(亡夫)

別居より同居の孤独嘆く姉

八尾市 赤木妙子

さんまよ秋刀魚皿いっぱい波の音

細腕ながら筋金ひとつ通してる

朝刊が夜明けの冷えを伝えてる

笑うピエロ沈み込むのも画布の中

きつと旨い酒汲み交わすらし酔芙蓉

大阪府 神野千恵子

独り住む豆まき鬼を招き入れ

目に余る大樹のかげと七光り

続き読むつもりの本がありすぎる

千カラットつけるときつと肩がこる

見慣れない自分が写っているビデオ

大阪府 小栢 こずえ

日だまりの草は冬でも元氣よい

良い肥料師からもらって春が来る

干柿も人も寒風育てられ

山茶花に勇氣をもらう霜の朝

贅沢に慣れてぜいたくわからない

大阪府 高木 道子

何時かはと夢見て並ぶ宝クジ

幸せに似た虹だなあすぐ消えた

団栗の集いで楽しい和を保つ

何れ行く私の道だと母を見る

北風が訃報の葉書連れて来る

京都市 清水 英旺

満月と対話楽しむ帰り道

ケータイを持つているけど好きじゃない

綾錦着て横たわる東山

野心はないけど身の丈の望みあり

めでる人なき半月もそれなりに

長岡京市 山田 葉子

ひとことで和む空氣に切り替わる

弾んだまま都会に消えた赤い毯

窓際に坐っていてもかすまない

驚いた顔が見たくてバラを買う

家計簿をつけてもやはり余らない

大山市 金子 美千代

相談は背中を押して欲しいだけ

結局はないもののねだりだった愚痴

ネコの手がゴルフへ逃げる大掃除

童歌聞かれなくなり荒れはじめ

激動の一年だった除夜の鐘

大山市 関本 かつ子

一人増え二人減りして年賀状

茶碗蒸し二つに鍋が大きすぎ

むず痒い鼻も我慢の菌科の椅子

たい焼きの列に教師も主婦の顔

素通りも慣れて宅配お隣へ

尾張旭市 三浦 きぬ

決めかねる時は香焚き亡母に問う

振り返る青春そこにいつも亡夫

来年の日誌一年用を買う

亡き夫の影と歩んで六十余年

青春はモンペ軍服溢れてた

高岡市 青井 はつえ

ケータイを持つてはいるが電池切れ

なあなあですます夜更けの自己嫌悪

かえさねば動きださない砂時計

天からの試練草の根深くする

料金の事は忘れた長電話

佐渡市 高野 不二

東京都 小川 賀世子

名の出来ない相手と話合せてる

台風を蜂は予知していたらしい

JAの南瓜も外地産を売る

精検が年中行事になって来る

菜園でぜいたく出来る野菜高

横浜市 金森 徳三

あせつてもあせらなくても大晦日

オレ流が出来ぬ浮世のつらい義理

体重計太りたいため乗っている

余命より治安気になる怖い記事

気の抜けた顔が気付かぬ爛冷まし

横浜市 巖田 かず枝

今年こそメール パソコン クリアする

安普請時々笑う床廊

人使いあらいお人を使うこつ

飲みたいがために付けてる万歩計

手作りはただそれだけで温かい

横浜市 布山 嘉信

丹精の柿へ野鳥も腹満たす

親となり親の意見が見えてくる

子を支え子に支えられ朝を発つ

入門書数冊積んで域を出す

待ち侘びて朝日に燃える冬木立

ちっぽけな城で確かな明日描く

熱い人に元気をもらう電話口

ボジョレヌーボ我が家も今夜解禁だ

手抜きしたシチューが美味いこんな日も

主婦の朝チラシのチェック忘れない

日高市 根岸 方子

活力のとは和菓子と夕茜

アルコール皮膚から吸って二日酔

パソコンとたわむれ雨の昼下がり

ほめ上手思わず頬が緩みだし

反論が出来ず焼芋口にする

秋田県 湊 修水

余生なお明日へののぞみ持ちつづけ

としとつて希望は子より孫にかけ

無理かとも思うのぞみを絵馬に書く

九条を持つ国に在るありがたさ

越後路に心して降れ雪の精

札幌市 三浦 強一

ペット産業大盛況という平和

覗くだけならば地獄が面白い

九条はすばり日本の宝です

むつつりもお喋りもいるぼくの友

無欲にはなれぬ人生あみだ籤

羽曳野市 永田章司

大阪市 寺井弘子

大吉を引いて買わない宝籤

ヨン様の騒ぎに夫冷たい目

仏像にいらちの顔は見あたらず

レールからはずれたわが子道拓く

高知市 伊野部和江

幼児の生きる未来が気に掛かり

伝統を氏子が繋ぐ秋祭り

温暖化楽な暮らしの付けが来る

精一杯の今日が明日に繋ぐ橋

和歌山市 根田よしこ

年末はゆっくりせよと風邪貰う

医者も風邪わたしと同じ咳してる

定年で互いの顔を確と見る

孫五人婆ちゃんサンタ待っている

寝屋川市 岡本勲

受けに入ってる冬ソナの恋模様

挨拶を交わし笑ってはてどなた

見てたのに見えてなかった穴に落ち

妻の名を真面目に呼んで笑われる

八尾市 中島春江

誠実さ決め手となって娘は嫁ぐ

寒の水飽食の胃を引き締める

ひとり住み夫婦げんかをなつかしむ

なぜ怒らない働きぬいて粗大ゴミ

ニートの子居って肩身の狭い親
手を握るだけの見舞いに癒される
運勢に頼りジャンボに賭けてみる
午前二時街は眠りについてない

八尾市 笹倉ひろし

カレンダーの厚みと余命減ってきた

叱つても笑顔で返す孫の知恵

牛どんの大盛り食った頃遠く

一言で散る友情の恐ろしさ

島根県 福岡博利

子が去んで雨しとしとと日記帳

肩書きもライバルもなし雪だより

生きているのが長すぎたとはバチあたり

今日も無事湯舟で神様ありがとう

八尾市 田中トシエ

年明けに捜す去年の忘れ物

十二月喋るオモチャが呼びとめる

救急車重い命を響かせる

割り切ったあとの奥歯が噛み合わず

鳥取県 西原真一

カップルの男を見ればボクが上

勤務した会社二社ともつぶれてる

年金や介護保険はねずみ講

肺がんはチューブだらけになるが吸う

八尾市 田邊 浩三

高知県 近森 功

結び目を確かめてみる定年時
ウルサイがスマンに変わる定年後
茶柱を睨んで今日の予定組む
お互いに終りを探る長電話

安来市 原 煩惱児

額縁に見立てる窓の庭園美（足立美術館にて）
大観をたつぷり見せる美術館
其処此処で眺める位置の庭園美
日本一の折紙流石大庭園

高槻市 安田 忠子

着る服にあれこれ迷うこの平和
フィンランド綺麗な町と娘の頼り
毛氈の赤にも負けぬ山紅葉
から元氣長続きせず胃が痛む

三田市 阪本 藤朗

求人欄均等法でややこしい
勉強は無理せんときと風邪の子に
三十を超えても無職一人っ子
煙突がお家に無いと子に泣かれ

高槻市 佐甲 昭二

ひとつだけ返事欲しくて逢いにいく
九十の母から貰う風邪見舞
七人の敵よりこわい妻の乱
雑学に酔っていいそいそ辞書を繰る

携帯で結び携帯で切れた糸
万歩計曾孫の足に愚弄され
肩書のいらぬ屋台の酒に酔い
幸せの笑顔が揃う松の内

箕面市 寺井 柳童

この狭い地球に神が多すぎる
芝居はね主役の顔で千日前
俺おれの一人芝居にだまされる
十ばかり鯖をよんでた若づくり

西脇市 七反田 順子

世界遺産画面だけでは物足らぬ
お湯の中温泉名所聞いている
時々聞こえぬ振りもしています
舵とりは一歩手前でおいておく

鳥取市 鈴木 一弘

なつかしい町の名を消す町創り
セーターが亡母の温もり離さない
背負う母軽くて重い愚痴を言い
風呂敷のはしが結べぬ大駄法螺

東かがわ市 向山 治延

同窓会友の本音がついぼろり
白黒をハッキリつけて角が立ち
いやな事忘れ上手で丸くすむ
無人駅梅一輪の温かさ

唐津市 岩崎 實

即興のマンガ親子で描き笑い
外食の品とり替えて食べ比べ
あったかい祖父母がいます里の家
定年の峠を下る老いの坂

雲南市 菅田 かつ子

宇部市 高山 清子

足許から老いる淋しい合言葉
夢と知り知りつつ見たい夢がある
誤字一つ急いだらしい置手紙
自己主張一般論で押し通す

島根県 武島 ちよえ

岡山県 矢谷 富士野

キャンバスに女の夢を画いて秋
ヨン様に夢中の日本まだ平和
幸せは娘と天空の湯につかる
華やいで見ても独りはうら寂し

鳥取市 森 美智代

松江市 松浦 登志子

スリッパを踏んでしかえした気持ち
一日を待つ待つ待つ待ちぼうけ
球根を買って鉢買い土を買い
亡き父母に広島産のみかん買う

鳥取市 横田 春名

出雲市 荒木 英子

寄せ植えも花の相性聞いてやる
躓いて父母の戒め無駄にせず
ブライドの一つや二つ誰も持つ
身辺整理可愛く生きる術を知る

鳥取市 近藤 秋星

不注意で壊した皿が引っ付かぬ
茶碗蒸しだけは私の自信です
狸とて懐けばやはり愛おしい
とりあえず合併しました村と町

掘り下げて聞いたからには断われず
世話になる身にはこたえる冬嵐
味のあるお付き合いです今もなお
仕残しを抱えたままで年明け

起き抜けの電話風邪ですかと聞かれ
再検の通知素直に受けて立つ
失敗を笑った人もこけている
歳月は蛇行ばかりの道だった

娘智義父の辛口うまく受け
その昔受けたやすらぎ我が胸に
原爆をその昔とは語れない
悩む子に暖かい風そつと吹け

新春をせめて笑顔で迎えたい
初恋の君も酉年年女
お疲れさまでした申年グッドバイ
新札で今年はお年玉

預金はないが欲は一ぱい溜めている
鳥取市 山口 千代子

女が寄れば噂話に目鼻つく
反論をしたら私が負けになる
人間は欲があるから働ける

鳥取市 山岡 紀子

忘年会主役は意外な人だった

カニすきの忘年会で忙しい

六十歳振り向かないでいいです
手のひらに上手に乗って五十年

倉吉市 前田 喜美子

オレオレ詐欺未然に救う銀行員

超デカイ白菜出来たドナイショ

新生児生まれながらに国背負う

お浄土へ今日があるから続くみち

境港市 遠藤 那珂子

鳥の目の高さ世間の騒ぎ見る

悪い癖 今年直らず年が行く

出雲でも縁を結べぬ神も来る

单身赴任都会に溺れないように

境港市 中井 虎尾

何年も読まず開かぬ宝本

笑ったら笑う鏡の俺の顔

ランドセル世間を背負う第一歩

すぐ緩む私のネジを妻が巻く

新しい年の期待へ底がない
鳥取県 橋谷 静江

それぞれの思いで春を待っている

冬の殻ぬけだしたくて春よ来い

うっかりが大きな話題引きおこす

鳥取県 平木 公子

スローライフ命育む風よ吹け

再生を祈り息子をつき放す

自立せよ父も年金頼りの身

過ぎ去れば何ほどのことない恨み

鳥取県 竹森 富久江

卯たちスカイブルーの夢を抱き

仲よく視えてるね雑草のいのち

はらはらをそっと包んだ月あかり

心通わせ逆風を生きている

鳥取県 毎田 信雄

嘆いても此の世の春が遠ざかり

この地球自浄作用の暴風雨

心配はやめよ自然のなりゆきに

人生は想念次第と神は言う

鳥取県 岡村 孝明

支援金送る罹災者冬枯れる

パトロンと思うか狸庭へ来る

老いた父昔の羽振り名ごり見る

くじ当ってデジタルテレビ楽に買い

和歌山県 辻 内 次 根

本当の自分に還る玉手箱
野路菊の里に会いたい人が居る
昨日より今日に色付く銀杏の葉
漆黒の闇にお化けが棲んでいる

和歌山県 喜 田 准 一

穩便に済ませたあとの胃が軋む
あいまいな返事に知恵を覗かせる
言つたいや言わぬで低くなる次元
核心を突かれ論点すり替える

和歌山県 坂 部 かずみ

人生の面白電車乗りあわす
飽食にあきて時々麦を炊く
出勤のストレス妻に置いて行く
子育てもマニュアル通り動かない

和歌山県 山 田 侃 太

道具箱そろそろ錆を落そうか
革ジャンにあれきりだった恋の染み
ご近所と肩寄せあつて無口です
声がわり父の矛盾を衝いてくる

和歌山県 村 中 悦 男

両親が泣き笑いする披露宴
ゆとりある時の電話は長くなり
亡き母が料理上手とほめた妻
体調を尋ねあつてゐる古い二人

奈良市 田 中 賢 治

公金を食わす紅白幕重い
空元氣 膝が時々笑つてゐる
ランドセル触つて揺する老夫婦
梅蕾風の便りで歩を延ばす

生駒市 小 西 稔

抽選はラストも楽し残り福
日本人ラストサムライ意志強し
欲出すと予感はずれる勝負ごと
古代人予感するどく身を護る

橿原市 藤 永 実千代

護られて身の危険ない視察団
貴公子を演じ続けて疲れ果て
一度きりの人生何故に死に急ぐ
心する深い優しさ有るを知り

尼崎市 河 津 正 治

父に似て五百羅漢の母に似て
拗ねた児をあつさり論す母の知恵
ほんわかかな気分に入る菩薩像
木魚打つ音も乾いた寒の月

尼崎市 古 川 正 子

病室の窓より雲の流れ見る
カサブランカ活花香り賑やかに
腰痛に良いと言われて杖をつき
明日もまた元氣信じて眠ります

尼崎市 小池 幸子

無理をせず無事に聞きたい除夜の鐘
紅葉狩り四季ある国でリフレッシュ
年一度賀状で縁を結び合う

明日の事よりしっかりと今日を生き

三田市 辻 開子

ローカル線散歩ですきですゆっくりと
心技体公園デビューで活気づく
カレンダー一枚になりせかせかと
ウォーキング木枯しの精足休め

宝塚市 丸山 孔一

見るだけの客も吸い込む自動ドア
息子には過ぎた嫁です少し妬け
家車 嵩張るものは妻が決め
妻元氣 一生元氣ただ望む

兵庫県 安達 厚

災害のニュース愚痴などこぼせない
妻の愚痴すまんことやと思うけど
だあれにも一つや二つある不安
二人してあくび連発冬ごたつ

兵庫県 黒崎 美紗子

夢求め連れ立ち並ぶジャンボ籤
イルミネーションついたわが町大都会
誘われて来て見て分かる面白さ
メール打つ指と乗りあう通学車

兵庫県 岩本 美緒子

脳に虫湧かせないよう彩の筆
老いたかな夢見の中の物忘れ
吾が町もイルミネーション魅惑の灯
八十歳よなぜか嬉しく侘しくて

大阪市 尾崎 黄紅

いつも泣かしたあいつ社長になっていた
中国産も韓国産も口に馴れ
お互いを思つて老いの口げんか
全集の二冊目からは積ん読に

大阪市 池上 清治

予定表書き込み楽し新暦
年金の入る日朝一記帳する
合格者載る朝刊を待っている
わたくしもホツとしましたご婚約

大阪市 吉内 タカ子

引き潮をまつて詣でる海の神
被災地は情けの微風待っている
量でない珍珠少しで旨い酒
燃えるだけ燃えたい友とともに生き

大阪市 吉田 富美

石に座し石と冬日を分ちあう
燃えつきし山おごそかに冬に入る
観劇の娘と大笑い十二月
今落ちし枯葉ふまない事にする

一葉に今原稿料 五千円

大阪市 平井露芳

テレビ欄また吉本が出てなはる

饅頭を食べブラックを呑んで居り

ヘルパーが来るからお部屋片付けて

大阪市 中村れんげ

パトカーが暮れのなにわ路かけてゆく

こだわりを捨てておおらか天仰ぐ

ふりむけばいろいろあつて今日生きる

半世紀九条ありてつつがなし

大阪市 吉川弘泰

おお寒い たい焼抱いて戸を開ける

背を丸め熱爛たのむラーメン屋

今日は伊豆 明日は別府と温泉剤

定年後妻に言われて家事多忙

池田市 多田契子

主治医でもそつと疑問を持つ辛さ

焼秋刀魚レモンをギュツと闘志湧く

助け合い百円ずつが生きてくる

信心は今際のきわに効くのかも

泉大津市 助川和美

暖冬に心の寒い事件の世

宝くじ夢の話で弾む暮れ

退院日心も晴れる青い空

ブランドで固めた娘フリーター

柏原市 伴洋子

緩慢に老いの身仕度旅仕度

心底惚れる男の胸に深い傷

着膨れて己が心を見失う

奥深さ味わい深さ日本の美

河内長野市 木太久正一

瀬戸内に沈む夕日の旅途中

老若の力作展示公民館

年一度剪定庭木丸坊主

西暦で歳を数える大正生れ

河内長野市 内海綾乃

サマワより被災地大事小泉さん

ヨン様と同じ眼鏡は似合わない

隣り合わせイルミネーション競争す

しがらみで賀状の数が増えていく

河内長野市 印藤智子

非常袋愛のメモリー入れてある

する事は明日送りして今日も暮れ

古風でもやっぱり好きが言いやすい

おれおれ犯待ちかまえてるやつて来ず

岸和田市 堤植代

しあわせは大の字眠る布団あり

超川柳つくつてみたい夢がある

半袖になりたいような十二月

かゆいところかいてもらえない人がない

岸和田市 森 元 ふみよ

誇り捨てばっかりあいた無常観
便利さに溺れた果てのゴミの山
天災で便利なボタン皆アウト
生きている証を見せて誇る古い

岸和田市 中 岡 香 代

丁寧仕事をやると叱られた
早くしろ丁寧にだと無理を言い
仕事好き家に職場にふえる敵
政治家に嘘のつき方学んでる

高槻市 大 崎 侑 子

夫には失くした指輪まだ告げず
店番に問えば無言で顎で指し
お迎えを待つのみと言いつくす
双方が出口錯覚待ちつくす

豊中市 源 田 啓 生

酉六巡未だあるくは生きられず
嘘日記書いてもこころ晴れまずか
初雪に小千谷の街よ山古志よ
種明しすればなんだと顔が言う

富田林市 古 田 千 華

お顔見に通つて彫つた技芸天(秋篠寺)
家族愛一致団結国を責め
曽我さんは獅子奮迅の妻と母
針供養亡母の面影偲びつつ

羽曳野市 吉 村 久仁雄

いそいそとタコ焼き買うて医者帰り
鍋をふるシェフの気合が隠し味
CDの軽さを嘆く広辞苑
老骨に鞭打ちすぎて粗しよう症

羽曳野市 濱 口 フ ジ

音に酔いリズムに狂った阿波踊り
ストレスを音と踊りで吹きとばす
電子イス糖尿治りケガ治る
みかん山段々畑味の里

東大阪市 米 田 水 昇

街師走ゆつくり歩む女坂
赤いほつぺ田舎の子供はもういない
台風のこわさを語る落ちりんご
ラゲビーの駅青春があふれ出す

東大阪市 今 岡 貞 人

啓蟄や逢いたい人が一人いる
三十年前の手帳は夢もあり
大空へ少年の夢背伸びする
心にも四季あり風の便り来る

藤井寺市 増 井 ヨシ枝

幸せの尻尾しつかり掴んでる
食べる人いるから作る喜びも
一生は一度と書いて寺の門
レントゲン腹の黒さは写らない

藤井寺市 西村 栄一

白い杖風の匂いと冬に行く
人脈を辿ればすべて酒があり
少年の汗が滴る寒稽古
手のマメに家族三人すがりつく

藤井寺市 鈴木 いさお

酒やめてジョギングしよう明日から
泣き言は言わないつもり決めた道
騙されたふりしてるのを知らぬ夫
野菜高僕の菜園見直され

八尾市 寺川 はじむ

大往生笑いが集う一周忌
バブル期の緩んだ紐が締まらない
検査終えグッドサインを出すカルテ
今年もか気まぐれのまま越す景気

八尾市 平川 幸枝

友あれば過去いきいきと御堂筋
神頼み己が弱さを笑い出す
今逢えば若気のいたり比較する
災いに位牌を持って逃げれるか

八尾市 西川 義明

相席の美女にこの目が浮気する
ボーナス日妻の化粧のノリがよい
お互いに元気な文字の年賀状
故郷の母幸せそうな笑い皺

大阪府 畑中 節子

伸びたくてたまらぬ生命^{いのち}誕生え

しまらない欲一ぱいの旅靴

ゆず風呂に歌声ひびき上機嫌

旅三昧お誘いのある今が華

大山市 吉田 幸子

戸惑いをかくせず今朝の風に聞き

歳末のジャンボに新春の夢を乗せ

さわやかなオーラで解けていくしこり

ヘルシーな食事へ話題盛り合わせ

愛知県 河合 ますみ

子等は今人生半ば戦士の顔

酒のみの人生倍に見える下戸

急停車させて老々立ち話

月星を友に至福の機を織る

静岡県 中西 雅

天命か幼児助けた山津波

数十年舌がおぼえたかくし味

さざんかの花が教える冬近し

逆縁の私を包む手の温み

き会 あかつ 川柳

日時—3月4日(金) 14時・国労大阪会館
課題—晒す 弁当 バッジ
投句先—〒596-0824 岸和田市葛城町891-22

岩佐ダン吉

同人特集 親子百句

平成十三年～平成十五年
同人吟から 編集部

おれに似よ俺に似るなと子を思ひ

路郎

子の寝顔汝が父母多くあやまてり

薫風

ビデオからわが子ひとりの運動会

高野 宵草

他所の子を叱ると親がとんで出る

松本 よしえ

親ばなれ子離れ孫も来なくなり

片岡 智恵子

負うた子がいつのまにやら指図する

猪川 由美子

おとうさんこちらでひとつカーブいこ

坪井 孝一

親子とはこうありたいネ鴨の列

川端 一步

やがて子も川の深さを知るだろう

伊藤 寿美

息子孫声がよく似てややこしい

羽津川 公乃

娘夫婦と旅の雪さえあたたかし

門谷 たず子

子には子の暮しがあつて聞かぬこと

細川 稚代

娘をさらう訪問客をおそれ待つ

木村 貴代子

男子誕生今三代が元気です

榎原 公子

彼の世より父母還りませ花吹雪

木本 朱夏

子離れができず伸びる芽摘んで

小谷 孝美

子のために浴びる火の粉は熱くない

赤川 菊野

戦争へ外地勤務の子を案じ

小玉 満江

子が出さぬもしも戦になったとて

宮崎 シマ子

遣伝子が親の癖まで継いでいる

(故)長谷川 淳

親子の情森のサルから学ぶもの

矢内 寿恵子

父の背を出世のジャンプ台にする

大橋 政良

キャッチボール親子のこころ通わせる

北村 賢子

娘の恋にまず母が折れ父が折れ

大石 あすなろ

父と子の手垢のらくろ一代記

家出した子が面倒を見てくれる

良い親でないから子らが自立する

父よりも大きくなった子の背中

まだ親に力があると思わせる

父の戦記に八月の風入れる

親として質を問われる子の躰

子に残す地図は定規をあてて書く

嘴の黄色い親が子を育て

少子化に子離れ出来ぬパパとママ

子の新居 親の気持は解さない

父の齢越えても父の背を越せず

子にあまい親が子の道まよわせる

親に似ぬあの子は神のミステーク

叱れない親を子供に見抜かれる

草をはむ親子の馬が絵のような

亡父母の恋の遺伝子継いでいる

子に恥をかかぬように生きてきた

親に背き子に背かれる人生譜

健康とやさしさだけをくれた父母

丹下美津子

児玉 蛙

出口セツ子

黒田 能子

政岡日枝子

原 みさを

乙倉 武史

原 賢

村上 玄也

米田 恭昌

竹治 ちかし

平田 実男

中田 あい子

米田 幸子

太田 昭

青戸 田鶴

西原 艶子

安達 忠央

渡辺 富子

富坂 志重

親と子の合わぬ意見が皆光る

親ばなれ出来ないままに親になり

子沢山親と住むのが名乗り出す

親として楔見えない処に打つ

親と子の隙間を埋める鍋の湯気

親と子の価値観の差で揉めている

我が子にもど根性あり安堵する

親子とは似てますなあと子が喋り

母と子の互いに育ち合う絆

忘れまい亡父の肩と母の背を

走り続けた父の背中を子は知らぬ

無愛想な親子に深い絆あり

この腕にぶら下げた子も遠くなる

古希祝う子等の心に甘えよう

喜んで親は子供に利用され

叱られても矢つ張りママの膝にゆく

親と子と孫が引き継ぐ社交下手

なんとかなるさ親子で飲める飲んでいる

父母は遠く私の胸にすみ

親亀の甲羅に乗らぬ子に賭ける

富田 蘭水

生嶋ますみ

久保田千代

宮尾 みのり

田辺 鹿太

玉置 当代

中 宗明

桧谷 郁子

瀬戸 まさよ

松下 比ろ志

谷口 義男

谷口 義

小糸 昭子

松尾 柳右子

石谷 美恵子

野坂 なみ

宗 水笑

三宅 不朽

國森 武子

小野 克枝

親にしたことを子供に返される

子を思うためのパンチと子は知らず

ケイタイで親呼びつける遠隔地

親馬鹿になる気掃省の三ヶ日

子ども等に支えられつつ生きる倅

大器待つ親の願いを子は知らぬ

口答え減って子供は親離れ

親馬鹿を知りつくして来た利口な子

子育てに何度でもして来た覚悟

親が子を殺傷これで平和かな

親の敷くレールに子供進まない

同居して親も大きな脱皮する

唐突に子の結婚が伝えられ

子を親に預けババママ バケイション

親の手の届かぬ先に運不運

父母からの教え守れば越えられる

親と同じ道を歩いた茨みち

親と子の絆をつなぐ一通話

子孫孫残す野山に苗木植え

福永 ひかり

岸本 宏章

小野 旬多留

長谷川 春蘭

阿部 進

田村 邦昭

江見 見清

武本 碧

吉田 孔美子

太田 幸枝

近藤 春恵

有沢 せつ子

後藤 早智

酒井 一壺

浅野 房子

夏目 一粹

下田 茂登子

福原 悦子

原 苑子

息子から労られたりせぬように

子の一言心満ちたり痛んんだり

父さんは古いと妻が子に味方

やりとりがあって親子の情が増す

川の字に寝た子が親に手を上げる

似ていても似ていなくても私の子

子を庇うかたちで泳ぐ鯉のぼり

子には子の思惑あつて噛み合わぬ

親の気を知らず風の便りだけ

子の心読む術親は鍛えられ

嫁がせる娘に玄関の鍵持たせ

子も巣立ち少し理性の帯緩め

パラサイトいつしかあてにする歳に

介護するわが子忘れた母を抱く

ひたむきに育てる親に子もなつく

子の盾になる度胸なら持っている

存外の長寿子供も老い仕度

親子ともゆとりの土日もてあまし

子に欲しいのは雑草の逞しさ

新家 完司

原 さよ子

藤井 正雄

安達 はじめ

井上 富子

古今堂 蕉子

加島 由一

城 多喜

成重 放任

米原 雪子

菊地 政勝

永井 三津子

緒方 美津子

上田 俊路

藺田 獏杵

西口 いわゑ

島元 ふみ

西谷 治三郎

古手川 光

愛染帖

波多野五楽庵選

播磨原市 安土 理恵

添い添げるつもりだったのですわたし
女がひとり渡る世間は一幕目

和歌山県 三宅 保州

花吹雪になってあなたを包みたい
義理を欠くことをはじめてみませんか

尼崎市 長浜 美籠

瞑想の内に悲劇は描かない
気分一掃したくてキャベツみじん切り

堺市 和田つづや

言い分が通らなかつた肌寒さ
はぐらかす事が上手になり悪女

藤井寺市 太田扶美代

嘘泣きも狸寝入りもしておんな
美しいけれど虚しい音がする

弘前市 高橋 岳水

浮き沈み重ね人間味が熱れる
人間の証見果てぬ夢を追う

富田林市 池 森子

薔薇はカリスマ一部始終を華にして
晩秋やほそい命を火に贅す

弘前市 高瀬 霜石

隣まで押し寄せてきた癌告知
中年のポケット 葉二つ三つ

和歌山県 木本 朱夏

散りざまは人それぞれにバラ牡丹
ジェラシーを溜めて黄色い薔薇の精

大和郡山形市 坊農 柳弘

フィクションを重ね自分史を裁く
未練まだあつて振り向くナナカマド

大阪市 小谷 集一

無理してもここで捨て石打つておく
雑草も踏まれるまではたの草

倉敷市 小野 克枝

不足分払い嬉しい封を切る
夫婦って何だろ時々詰まる溝

富田林市 片岡智恵子

言い訳がことりと喉に落ちてくる
ふつ切れて自由な色に塗りかえる

弘前市 野村 清美

人間のせいで種無し柿になり
コーヒーもお茶も静かな午後の雪

弘前市 相馬 銀波

死ぬ死ぬなとO型の血が騒ぐ
冥土まで楷書で行くと決めている

鳥取市 土橋 螢

堺市 矢倉 五月

どこで眼を瞑つたのだろ道連れ
空き缶をコロコロ風は演出家

奈良市 乾 春雄

艶増してやがてを知っている花弁
石仏の吹雪く半身から氷柱

和歌山県 桜井 千秀

逃げ足の速い月日と冬籠り
自己欺瞞笑わない日が続いている

弘前市 福士 慕情

知恵の輪がするりと解けて春の風
成りゆきの仮面だんだん板につく

奈良県 渡辺 富子

跡継ぎの無い墓念入りに磨く
約束が鎖に変わる恋をする

大阪府 岩崎 公誠

半世紀飼われた妻の味に染む
建て前と本音で風の向きを読む

大阪府 若松 雅枝

一人きりパントマイムの夜が更ける
輪の中を泳ぐのつべらばうの群

奈良市 白根 ふみ

旅に出れば毬は自然に弾みだす
安平次弘道

米子市 高野 宵草

羽曳野市 吉川 寿美

大阪府 初山 隆盛

松原市 玉置 重人

美祿市 安平次弘道

人前は夫唱婦随としておこ
札幌市 三浦 強一

風花が様子見に來た待ちぼうけ
吹田市 岩屋 美明

思い違いを恥じていますと実南天
弘前市 宮崎ヒサ子

なるようになるさ囁くシクラメン
黒石市 相馬 一花

かすみ草平均寿命越しました
松原市 小池しげお

も一人の私が賭けをそそのかす
高槻市 乙倉 武史

ハードルを越えたところに落し穴
砂川市 大橋 政良

傷口に不信吹き増す北の風
泉佐野市 備後三子

木綿針 後始末にはことかかぬ
堺市 桜沢 千世

北風に背ばかり向けていいですか
横濱市 金森 徳三

やさしさに魅かれて道を踏み外す
八王子市 播磨 充子

人情に脆くメガネを拭くばかり
奈良市 米田 恭昌

りんごの皮切れて決心揺らぎ出す
倉吉市 淡路ゆり子

赤い血が熱いと書いた日を君も
唐津市 仁部 四郎

裏に裏表に表ある政治
大阪市 板東 倫子

五十年添つても歩幅まだ合わぬ
八尾市 生嶋ますみ

ほうじ茶の湯気の向こうにある生家
西宮市 牧瀬富喜子

折り鶴が仮設住まいで年を越す
吹田市 太田 昭

振り向けば昭和の跡が褪せている
松江市 三島 淞丘

僕とこと君とこと空ひとつだよ
四條畷市 吉岡 修

吊し柿鐘は俳句の音で鳴り
唐津市 久保 正剣

ご自愛を祈るわが身の不養生
大阪市 伏見 雅明

丸描いてゆとりのところ知りました
弘前市 岡本 花匠

星が飛ぶ今日の心を置き去りに
西予市 黒田 茂代

老婆のパフに女を垣間見る
和泉市 西岡 洛辭

メリットがなくても底う親の愛
滋賀県 中 宗明

ひとりごと未練ばかりを溜めて冬
西宮市 門谷たず子

触角を伸ばし余生の身を守る
米子市 林 瑞枝

ありがとう短い五文字美しい
米子市 小塩智加恵

始まりは十三年の秋のこと
交野市 田岡 九好

相槌を打って主役にされている
和歌山市 山口三千子

抜かれたら後はゴロリとコルク栓
豊中市 水野 黒兎

一幕目がなかった淡いうぶな恋
茨木市 藤井 正雄

あざやかな夕日の中にいる不安
米子市 青戸 田鶴

御好意に甘えますよと財布閉め
大阪市 川原 章久

丸とバツ間違えられてからドラマ
西宮市 西口いわゑ

哀愁と希望で迫るコンチエルト
堺市 坪井 孝一

紛争を避ければ屈辱にまみれ
堺市 奥 時雄

ポケットに密かに自我を温める
出雲市 園山多賀子

ストレスを消せば気力が枯れはじめ
唐津市 坂本 蜂朗

石蹴つて見ようストレスにけるかも
岡山県 山本 玉恵

妥協して自分の色があせてくる
鳥取市 岸本 孝子

ガサガサと耳が鳴りだす十二月
尼崎市 春城 年代

感じよい人と時々すれちがう
米子市 足立田美子

振り返ること多すぎる十二月
鳥取市 上田 俊路

健康法聞いて忘れて恙無し
高槻市 富田 美義

雑念を木端微塵にする手品
堺市 山本 半銭

輪切した頭脳まあまあ大丈夫
八尾市 吉村 一風

頷いているが納得していない
倉吉市 松本よしえ

髭と眼光 男の商標かもしれぬ
尼崎市 春城武庫坊

年金カットはつばつ死ねということか
大洲市 中居 善信

足るを知る養生訓で古稀に來た
河内長野市 坂上 淳司

生き終わる日を定年と決めており
大阪市 三浦千津子

喫茶云と愚陀仏庵で畏まり
弘前市 櫻庭 順風

広辞苑わたしの脳が離さない
鳥取市 福田 登美

モナリザの吐息を聞いた事がない
大阪市 神夏磯典子

老化現象受け止めるより外はなし
京都府 稲葉 冬葉

胃袋とした約束をまた破り
鳥取県 石谷美恵子

大切に今日の命を積み重ね
境港市 遠藤那珂子

妻子にも内緒にしてる過去がある
藤井寺市 鈴木いさお

私の秘密まさか神様喋るまい
八尾市 宮崎シマ子

機転利く男時々煩わし
大阪市 井丸 昌紀

憶れた余生あくびのもつたない
香芝市 大内 朝子

一病と仲よく縁を積み重ね
大阪府 澤田 和重

血迷うて季節はずれの花が咲く
鳥取市 録沢 風花

父さんがサンタと悟る子に育つ
唐津市 市丸 晴翠

騒がれた昔を知っている曆
富田林市 大橋 鐘造

すき間から噂こぼれる風の道
八尾市 村上ミツ子

空ビンに小銭を貯めるだけの知恵
京都市 都倉 求芽

遅ればせながら冬のソナタで熱くなる
和歌山県 森下 順子

なまめるく生きてわたしに敵はない
池田市 栗田 久子

約束を果たしたように彼岸花
松江市 川本 畔

ボタン押すだけの家事でも忙しい
大阪府 小栢こずえ

候補者の連呼に迷う訝たち
鳥取市 福西 茶子

修羅越えて髪にちらほら白いもの
今治市 塩路よしみ

新しいいのちの影で逝くいのち
鳥取市 夏目 一粋

子は親の後姿のコピーです
西脇市 七反田順子

買ってきた花の機嫌が悪くなる
和歌山県 辻内 次根

病院に待つ忍耐を嫉けられ
西宮市 井上 松煙

流れ矢が当たってからの二人旅
鳥取市 徳田ひろこ

家計簿にいつも付いてる黄信号
交野市 山川日出子

ときめきを鞆につめて持っている
神戸市 山田婦美子

無人駅ここが私たちのスタートとさ
三田市 堀 正和

いらいらがつのる厚手の説明書
羽曳野市 永田 章司

耳鳴りは愛の打算の前ぶれか
大和高田市 鍛原 千里

右脳を研ぎにあなたと美術展
海南市 堂上 泰女

呑みこんだ言葉へ鍵をかけておく
和歌山県 柏原 夕胡

財産は無いが時間はあり過ぎる
高槻市 瀧本きよし

煩悩も歳相応で恙ない
高知県 桑名 孝雄

延命措置年金だけが看取りする
唐津市 井上 勝視

誹風柳多留二四篇研究 75

ような句だナ」と定家が言つたろうと言つものでしょう。
清・佐藤 賛。

598 かくれんぼ姫のするのハ大さわき

五連

小栗 子供のするかくれんぼはかわいいものだ、嫁がするとなるとこれは大事件で、大騒ぎになる。隠れた先は土蔵か川べりか、それとも鎌倉目指して姿を隠したか。

泣て居ル姫土蔵からめつけ出し

安四義 4

つらい姫門ト口迄ハ度々の事

明五礼 4

清 蓬萊連に属する五連の句であるから、松ヶ岡の句としてよいかも知れぬ。蓬萊連には「川傍柳」という句集があり、これに松ヶ岡の句が多い。五連も松ヶ岡に関する句を何句か詠んでいる。

佐藤 同右。

599 升わなをひるまかけとく中の町 青 峨

小栗 升毘は升落し、鼠を捕らえる仕掛けの一種。枡をふせて棒でささえ、その下に餌を置き、鼠が触れると枡が落ちてかぶさるようにしたもの。(日)

升毘は、本来、人が寝静まって鼠が出てく

小栗 清 吾・山田 昭 夫

伊 吹 和 男・大野 秀 二

橋 本 秀 信・粕 谷 長 生

清 博 美・佐 藤 要 人

596 とむらいからやみ付キ息子かよひ

丸 水

小栗 吉原通いを始めるにはさまざまなきつかけがあるが、この息子は山谷の葬式から流れて行つたのがきつかけ。その時は大一座でわけもわからず行つたのが、今や病み付きになつて通い詰めているといった体。

普通は、病み付いてから辛いことになるのに、その逆の表現をしたところが面白い。

人のうれひをよろこんでむす子出る

三二 22

ごくらくへみな行クといふ寺くずれ

安八義 4

伊 吹 賛。礎稿の後半、気が付きませんでし。面白いと思います。

清・佐藤 賛。

597 百の字があるでしまいの御哥なり

狭 衣

小栗 百人一首の第百番目の和歌、

百敷やふるき軒端のしのぶにも

なをあまりあるむかし成けり

順徳院

を詠んだ句。句意は、「百」という字が入っているの、百人一首の最後の百番目においてあるわけだということのこと。

あつらへのよふな哥しやとていかい、

安六宮 2

百敷やこいつ大尾とぬひて置キ

天五松 1

橋 本 賛。類句 1 は、「史伝」では不明とされているが、百番歌とされた根拠を御教示願えれば。

山田 賛。橋本兄の疑問。「百番目に詠えた

る夜中に仕掛けて置くものであるが、夜が本業の吉原中の町では、閑散としている昼間に仕掛けるといふもの。実際にそうしたというよりも、吉原の夜と昼の逆転振りを表現した句だろう。

よしはらの夜ハ昼迄にやつと明ヶ 拾、19

橋本 賛。夜は不夜城。

清・佐藤 賛。

600 もふじやのこわいゝをきくに八水をむけ

小栗 市子（梓巫子）の句。

玉章

市子は、死者の霊を呼ぶいわゆる口寄せを行うもので、死者の言葉としてさまざまのことを言う。主題句は、この口寄せを行う際に、水を手向けるものとされていることを詠んだもの。

声色は、もともと①声の音色・調子のことであるが、②他人の口まね、就中歌舞伎役者の口跡を真似ること、をいう。主題句の場合、①とこれば至極まじめな句となり、②とこれば「市子はしよせん声色だ」ということを見抜いてコケにしている句となる。礎講としては「亡者」という語感や類句からの連想から、②のニュアンスとしておく。

ゆふれいのこわいいち子上手なり

天八宮2
いとあわれなる声にていち子い、

橋本 賛。だが①と②はあまり限定せずともよいと思う。現在でも、恐山のイタコなどとも死者の声色（男女）を使つてのたまふ。

清・佐藤 賛。

601 星入りの女房を息子持ッ気なり 石 斧

小栗 ここで「星入り」は、吉原細見における遊女の格付けの記号で山形に星がついた上妓のこと。昼三、三分女郎など。句意は、息子がそうした上妓を莫大な身請け金を払つて、女房にしたがつていというだけのことである。

ただし、「星入り」には「斑点があること」の意があり、用例を見ると引け物（傷物）のニュアンスがある。

「麒麟・鳳凰に星入のひけ物でも出そふなもの」と（風流志道軒伝）（日国）

星入の夜にひけ物の首をしめ 九五三〇

従つて、「星入りの女房」という語句が、上等等両方に取れる面白さが、作者のねらいなのであろう。例句も同様の趣向である。

ほし入はかえつて高い五丁町 一九一四

橋本 賛。この場合は高級遊女のニュアンスを感じる。

清 賛。高級遊女であつても、女郎上がりといえはひけ物の意識があつたのではなからうか。

佐藤 賛。

602 四郎兵衛が昔居た所かなものや 夢 中

小栗 元吉原の句。昔、四郎兵衛（吉原大門の番人）が居た所には、現在は金物屋があるという意。

亀河岸から弁慶橋に至る道筋を「大門通り」というが、『江戸名所図会』の「吉原町の旧地」の項の挿絵に「大門通」があり、「昔此地に吉原町ありし頃の大門の通りなりしにより、かく名づく。今は銅物屋、馬具師多く住り。」と書き入れがある。（銅物屋）に「かなものや」とルビがあり、主題句もあるいはこの漢字を宛てるべきか）

大丸のあたりがすが、きひいた所コ

四七二八

元吉原で如露を買おとなしざ

三三二二

清 元吉原と新吉原、一般の読者にはわかりにくいかも知れぬ。注意を要するところ。

佐藤 賛。

人の道外さぬように手を合わす

お芝居の逃げ口上が立派すぎ

信号に今日一日を預けとく

親友の二倍も生きている私

盛り籠のフルーツ出自など聞かれ

散る紅葉芽生える樹の芽神の愛

小出した真心で差を付けている

柱時計命を刻む音がする

舞い納めするかのような冬の蝶

さつそうと歩こう虹はまだ消えぬ

女のいくさ花も実もつけ冬囲い

嫉糸思い違いが多すぎる

陽あたりを拾いつつ行く散歩道

生と死の狭間でくれた良い笑顔

暗闇の一步一步を子に押され

さしかける傘はいつでもわたしから

童謡でどの風穴あいてくる

柿一ツ亡母に供えて詫びをいい

五十年貧乏神と暮らして

型紙の年々変わる妻の腰

ストレスを飛ばす茶碗がよく割れる

地震台風宇宙は動く大自然

日本列島やんちゃな申が大暴れ

娘も四十路同い歳です雛人形

イエスマンほどよく使う姑に

篠山市 円増 純子

堺市 桜沢 千世

米子市 足立由美子

岡山県 富坂 志重

篠屋川市 森 茜

米子市 林 瑞枝

大阪市 小泉ひさ乃

今治市 野村 清美

高知市 小川てるみ

鳥取市 永原 昌鼓

鳥取市 奥谷 彩子

羽曳野市 吉川 寿美

米子市 木村 春枝

和歌山市 福本 英子

倉敷市 小野 克枝

池田市 栗田 久子

米子市 門脇 晶子

境港市 遠藤那珂子

交野市 山川日出子

篠屋川市 平松かすみ

羽曳野市 福田 悦子

大阪市 津守 柳伸

大阪府 畑中 節子

岸和田市 土橋 房枝

松江市 安食 友子

シャンブーした髪が抜けると淋しいね

華やかさなければ健気に野菊生き

背伸びして読んでるのは文学書

夕暮れの淋しさ癒すミルクティー

すつびんの愛へコスモス揺れている

こだわりも私がゆえの道しるべ

ぽーっとして若い若いとのせられる

底も見た天辺も見た百舌鳥が啼く

矢面に立てば揚げ足取りに来る

カレンダー日程表が追つかける

口紅を濃くし私に活入れる

賞味期限延ばす薬で生かされる

わくわくとマツケンサンバ腰を振る

一瞬の一撃に泣ききつくり腰

身構えてはずみに乗った口車

ヨン様のマフラーちよつと意識して

河内長野市 植村 喜代

八尾市 中島 春江

岡山県 福原 悦子

三田市 石原 歳子

八尾市 村上ミツ子

大阪市 吉内タカ子

西脇市 七反田順子

東京都 岸野あやめ

鳥取市 西川 和子

篠屋川市 坂上 高栄

鳥取市 岸本 孝子

兵庫県 中上千代子

大阪府 桑田ゆきの

大阪市 三浦千津子

倉吉市 山中 康子

和歌山県 森下 順子

富喜子さんの句―何を絞った跡かをくどくと言わず、強く

打ち出したところに作者の感覚の動きが思われる句である

と思う。そろそろ労りの章にはいりたいものです。ゆきさんの

句―自分の中から消えていかない愛と憎との同居、これを川

柳の目でより明確に表現されているのが素晴らしい。温かみ

を感じます。千秀さんの句―テーマ的には新しいとは言えな

いが、何かを引きずっている人たちの孤独感がリズムよく伝

わって来る。きつといい出合いがあることでしょう。真理子

さんの句―情景が鮮やかに浮かび上がる切れのいい句であ

逃げる

福本 英子選



逃げるのは一番早いという私
雲行きが悪そうと席を立つ
突然のぐらぐら逃げるのを忘れ
敬遠など無縁真つこうから勝負
煙幕を張って逃げ道考える
逃げ腰の男を太い線で消す
終章へ逃げる素顔は見せられぬ
逃げられて分かった妻の有難味
答弁を王虫色で逃げる知恵
足元からこっそり逃げてゆく若さ
お利巧が逃げてのろまが叱られる
挨拶に顔を背けた福の神
フレームからはみ出し自分から逃げる
逃げ回っている俺に似たモンタージュ
老いの知恵忘れまじったよワッハッハ
鬼だけで良いのに福も逃げて行く
逃避行するには体デカすぎる
逃げて逃げて男心を挑発す
悪事横行逃げ口上も上手くなる
二の足を踏んでチャンスに逃げられる
逃げるまで気付かなかった青い鳥
新札が一泊したら逃げちゃった

度 浜 丘 愛 論 権 悟 寿 美 宏 章 公 誠 輝 夫 東 吉 扶 美 代 正 剣 尚 士 千 里 保 巳 勝 巳 老 己 夕 胡 典 子 妻 子 碧 強 一 旋 風

逃げ腰に母に見せてる通知表
自衛隊危ない時はお逃げなさい
逃げたこと後悔してる籠の鳥
歯が立たぬ相手と分かりあはずさ
政治屋は駆け込み寺を持つて
青い鳥またも逃がした脇見ぐせ
片減りの靴だが逃げたことはない
逃げ腰だ後追いなんかするものか
逃げ出したふる里夢で追ってくる
カーナビへかけ込み寺を教えとく
犯人が逃げる捜査の予算切れ
土壇場になると責任者が居ない
友達のままがいいわと逃げられる
足跡を残さぬように逃げなさい
逃げ道は隠しておこうその日まで
住 地獄から逃れることは難しい
約款の逃げ道だろう細かい字
逃げ腰の男追うほどひまはない
逃げるのは止そう白梅咲いたから
逃げ切って手持ち無沙汰な夜になる
人 真つ先に逃げてはまった落し穴
地 逃げ上手きつと友にも逃げられる
天 尻尾など切れても逃げた者の勝ち
軸 逃げることを教えなかった母の悔い

晴 翠 九 好 子 正 和 清 史 愁 女 哲 男 一 風 理 恵 四 郎 准 一 美 代 子 德 三 慕 情 ミツ子 柳 弘 次 根 朝 子 霜 石 天 尾 等 ヒデコ

短

本吉 宗光選



気短な夫待たせて厚化粧
一生は葉っぱの露の落ちる距離
短足が目立つて嫌になる写真
ライバルの短いメモにおめでと
公園も釣瓶落しの帰り道
髪切って振られた無念またばれる
ウインクする短い愛のコンタクト
嬉しい日とても短い時間切れ
短足のチワワが助手の顔で乗る
小説は巻頭言でまず理解
短気だが嫁の前ではにこやかだ
何故か短い栄光の日の二十四時
さようなら短い恋のはしり書き
短日に老いの二人は冬籠り
襷より短い紐をもて余す
気短が十年日記続けてる
熟年の短期留学夢を持つ
この先へ過去は短く折りたたむ
幹事さん短い言葉よろこばれ
日の長さ短くなつたなあ冬至
ひとときの逢瀬はかない窓白み
身勝手な大人が奪う子の生命

志 洋 次 根 セツ子 久 仁 雄 かずみ 浩 三 英 旺 とし子 栄 呼 開 子 こずえ シマ子 敏 子 五 月 倫 子 淳 司 フジ みつこ タカ子 度 正 和 德 三

短いがキツチリと利く妻の咳
短気なの悪い癖です悩みます
老い先は急がなくなるともしてている
短日の夕日すんと海に落ち
日短は佻しい気分猫といふ
五十段短い足で苦勞する
元氣だった人がと言われたい最後
一年が短くなつて古希の坂
いつもショート君が似合うと言つてから
子の便り一行だけにある温み
追伸のたつた一行母の胸
短いがぼくを支えてくれる足
たかが五分待たせる身には短いが
兄よりも短い足でよく歩く
短いが父の手紙が許してゐる

ミニドレス私も着てた頃がある
老婆と一泊二日のフルムーン
短期間だけなら添うてみたい人
友と会う短い時間貴重です
隠したい尻尾短い方がいい

短いが父の言葉にある威厳

よく動く短い足を陽にさらす

東の間の逢瀬に絡む細い月

わが余生短いなどと言わさない

美 義
三喜夫
修
茂 代
順 子
智加恵
志千代
ヒデコ
深 雪
ゆきの
勝 巳
ミツ子
康 子
螢
神典子
のり子
恭 昌
茶 子
圭一郎
銀 波
雄 々
かおり
坊農柳弘

わくわく

山川日出子選



憧れの作家に並ぶサイン会
今一度鏡覗いて逢いに行く
陶工が不眠不休の窯開き
すき焼きを囲むトーンが高くなる
大物よ来いと念じて竿を振る
外地から帰る子を持つ夕の膳
ヨン様をわくわくと待つ軽い脳
無口でもわくわくとすると顔にでる
わくわくとときよしのサイン待つ長蛇
わくわくと子の帰省待つ割烹着
好奇心少年の日をとり戻す
鍋物に目のない箸を持つている
プロポーズ受けたその夜は眠られず
窯出しの明日待たれる胸騒ぎ
地獄から救出された健気な児
フランスパンとワインが鳴らすドアチャイム
初対面青い瞳の孫胸おどる
村中がわくわくしてゐる嫁が来る
芋掘りにわくわく気分子供達
呱呱の声わくわく待つてゐる廊下
福袋わくわく開けるまでがいい
神棚でわくわくしてたジャンボくじ

晴 翠
獺 沓
愁 女
霜 石
淳 司
たず子
充 子
一 粹
あずま
（渡）富子
ヒデコ
銀 波
柳 弘
一 知
花 匠
理 恵
俣 子
勝 視
悦 男
とし子
哲 男

茶柱の予感わくわく弾んでる
今朝の靴わくわくさせる初デート
パソコンを覚えて今はわくわくと
試着室わくわく蝶になつてくる
男子よりわくわくさせた女子ゴルフ
楽天がわくわくさせるプロ野球
ヨン様のお出ましを待つ長い列
エイプリルフルわくわくさせて笑うとは
きょう寂しわくわくがない日記帳
わくわくと余生楽しむ趣味の会
わくわくとマツケンサンバと揺れてます
わくわくがどきどきとなる初デート
わくわくとカニ食へに行くバスツアー
わくわくのが心が失せていとあわれ
わくわくと鳩追いかける千歳飴

期待してカメラ構える初日の出
尺八を習つて二年 初舞台
わくわくといひ予感する春の風
紅葉のライトアップに君と酔う
六十の手習いわくわく時忘れ

胎動へわくわく弾む毛糸玉

わくわくとカブセル開く同期会

わくわくと正月待った少年期

ベレー帽わくわく友とタカラヅカ

弥 生
一 風
章 久
雄 々
東 吉
九 好
尚 士
あやめ
英 旺
活 恵
かおり
克 治
シマ子
水 笑
（奥）五月
浩 三
朝 子
泰 女
愛 論
正 雄
春 雄
前たもつ

初步教室

題 — しぶちん

三宅保州

主役は作者なり

しぶちんも私腹肥やして香に迷う
 しぶちんと言われる人のお金持ち
 NHKしぶちん宅のベルを押す
 親よりも子はしぶちんの上をゆき
 しぶちんの祖母が助けた子の学資
 この五句に共通して言えることは、作者は
 どこに居るのでしようかということです。句
 の登場者を、句という舞台の外から観客とな
 った眺めていませんか。言い換えれば第三者
 や傍観者の立場でこの句を作っていますか。
 か。このような句は得てして報告句や説明句
 になり勝手で、訴えの弱い句になる傾向があ
 ります。作者自身が語って、作者が主役にな
 って句の中に登場するとインパクトが増すも
 のです。例えば、宏子さんの句は作者が祖母
 でも子でもない表現になっています。「しぶ
 ちんと言われた祖母に扶けられ」とすると作

者が孫自身になり「爪に火を灯して学資出し
 てやる」とすれば作者が祖母自身になります。
 「主役は作者なり」を念頭に置きましょう。

【同想句】

「しぶちんで家を建て」的な句
 宵越しの金を貯めてのマイホーム
 しぶちんのお陰で建ったお邸よ
 しぶちんが大黒柱で家建てる
 有名なしぶちんだから家を持つ
 しぶちんに徹して立派な家が建ち
 しぶちんが村一番の家に住む
 しぶちんと言われた屋敷冠木門
 「しぶちんも出すときは出す」的な句
 しぶちんの爺婆孫のいいなりに
 しぶちんも孫には弱いおこづかい
 しぶちんも孫には甘いところを見せ
 しぶちんも好きな事には弾みます
 しぶちんも好きな事には決らない
 しぶちんしてパツと一点豪華主義
 「奉加帳」を詠んだ句
 しぶちんがとりを務める奉加帳
 奉加帳しぶちん宅は最後にす
 「賽銭は一円」を詠んだ句
 賽銭へ一円玉を投げ入れる
 賽銭は一円玉と決めてある
 賽銭は一円玉と決めている
 章司
 れんげ
 重之
 那珂子
 道子
 賢治
 洋子
 フジ
 政子
 徑子
 光枝
 英旺
 雅明
 孝明
 夕胡
 淳司
 いさお

【添削・批評句】

原 帰り際しぶちんの声浴びせられ 准一
 どういう場景での帰り際に詠んで下さい。
 原 しぶちんをすれば心がひからびる 水昇
 標語的な感じがします。具象を詠みましょう。
 原 ローカーローしぶちんで行くダイエツト 俊子
 ローカーローとダイエツトが重複気味。
 添 しぶちんに徹することですダイエツト
 原 しぶちんでどんな御方が自分かな みね代
 少し視点を変えてみて、
 添 しぶちんと言われる人に教えられ
 原 しぶちんは友を作らず一人旅 稔
 ちよつと淋しい句なので、
 添 しぶちんをひとり楽しむ旅に出る
 原 人生も金が溜まるほどしぶちん 利子
 リズムが悪いので、
 添 しぶちんに徹して金を貯めている
 原 しぶちんも身体のためと言うセリフ かずみ
 「セリフ」は不要。「言うておく」は如何。
 原 溜まらないしぶちんない家族です 順子
 五・七・五を組み替えると良くなります。
 添 しぶちんのない家族で貯まらない
 原 しぶちんと皆がささやくお人柄 美紗子
 自分を主役置き換えてみませんか。
 添 しぶちんと言われているのは知っている

原 東京のタクシー負けぬとしぶちは 美 義
結語の「しぶちは」の収まりが悪いので。

添 東京のタクシー負けてくれまへん

原 しぶちになれそうもない私には 綾 乃
その理由を読み込みましょう。「私には」を

削り、「旅行好き」「食べ歩き」など。

原 恵比寿願してはいるのにしぶちんだ 弘 子
添 恵比寿願だからしぶち憎めない

原 しぶちが運動けちり太鼓腹 智 加恵

添 運動もけちった揚げ句太鼓腹

原 けちだけと生きる知恵だけたとある こそえ

添 けちだけと生きる知恵なら惜しまない

原 身についたしぶち人に見くだされ 美 恵子

添 見下されてもしぶちん学を身につける

原 しぶちでケチのつもりがお金なし す み子

添 しぶちと違ってお金が無いのです

原 しぶちと決めた人生ひょうひょうと 映 子

添 しぶちと決めたひょうひょうと生きている

原 しぶちが当たらぬクジを買い続け 開 子

添 しぶちも当たらぬくじを買い続け

原 しぶちの二人暮らしが子が見兼ね タカ子

添 しぶちの二人暮らしを子が見かね

【少し工夫すれば佳くなる句】

戦中派しぶち捨てる事が下手 きぬ子

「推せん句」の小川イセさんと同想ですが。

原 しぶちの財布は紙で含ます 信 雄
添 しぶちの財布は紙で膨らます

原 しぶちと言われる程は貯めてない 孔 一

添 しぶちと言われるほど貯めてない

原 しぶちが残した金で子等がもめ 萌

添 しぶちが遺した金で子らが揉め

原 しぶちも出す時は出す寺の寄付 幸

添 しぶちも寺の寄付なら弾みます

原 箸やすめ明日へのこした冷蔵庫 千代子

添 また明日へ残してしまふ冷蔵庫

原 養育費出世払いにしておこう 喜 子

添 養育費出世払いと念を押す

原 向こうから掛かった電話まだしてる 藤 朗

添 相手から掛かったときは長電話

原 誘われてしぶちんと行く無料館 はじむ

添 しぶちに無料招待誘われる

原 リサイクル流行しぶちん目立たない のり子

添 しぶちも見直されてるリサイクル

原 寄付をする代わりにペン買替える 像 山

添 しぶちが入れあげるほど惚れるとは 時 雄

原 弔電を打って香典出し惜しみ つよし

添 しぶちの妻のおかげで年が越せ

原 しぶちで通したあの日悔やまれる 秋 星

原 月末はしぶち料理大いばり 節 子

添 しぶちに御馳走になりうたえる 忠 子

【佳句】

味噌舐めてちびちび酒を飲む男 信 子
おとつとこぼれた酒を指で舐め 典 子

しぶちの遺伝子薄い三代目 正 和

すまんけどわてのしぶち生まれつき 清

しぶちは頭脳明晰だと思っ 千 華

しぶちの家の柱は太くなる 起世子

【今月の推せん句】

しぶちもこの寒さには負けました 伊藤アヤ子

しぶちも冬將軍という寒さにはまいった

という、川柳の伝統的な要素である「おかし

み」が溢れています。

しぶちの手からこぼれる無駄がない 升 成

無駄の一つもない様を巧みにたとえられて 好

います。

しなくてもいいしぶちんをする戦中派 小川 イセ

「しなくてもいい」がまさにとびつたりの措

辞でこの句を際立たせました。

しぶちの袋に一つ穴がある 寒 川

「一つ穴がある」の例えが抜群。どんな穴

か読者に考えさせ、かつ容易に解るのが良い。

【私の句】

いい嫁になったしぶちんにもなった

年金にしぶちん学を教えられ

秀句鑑賞

同人吟 玉置 重人

— 1月号から

毎月届けられる川柳誌は、私には大きな楽しみのひとつであります。

同人の皆様の熱い息吹きと、その情熱に触発されることが大きく、たくさんの糧を吸収しているのです。形を忘れず、形から出るのをモットーに、作句にもがき苦しむのはいつものことですが、それだけにひとつの句ができた時の楽しみは大きく、ますますハマッテしまふ毎日ですが、皆様の川柳作法はどのようなだろうかと、楽しく想像しております。

何年かぶりに秀句鑑賞のカードが回ってきた。編集部からの連絡に、余程辞退を考えたが、長い間同人の末席にいる以上、これもひとつのつとめと割り切つて、重たいペンを取りました。

全力投球で皆様の玉句と対峙しましたが、二千句に近い熱い息吹きに、圧倒される思いです。

できるだけ多くの句と対話するつもりでしたが、紙数に制限があり、意に添わぬ鑑賞文になったことと存じますが、ご寛容下さい。

いい人生だったと二人して言おう

岸 本孝子

紆余曲折を乗り越えてきた、二人三脚ぶりが窺えてなんとものたのしい。世に夫婦の数はゴマンとあるが、二人の人生を謳歌できるのは、正に幸せそのもので、新年の巻頭にふさわしい人生讃歌である。

摺り減った靴よ勤めもあと少し

早川 盛夫

サラリーマンの悲哀がにじみ出ているようだが、熟読すると定年までの人生を楽しんでいるさまが感じられるのが救いである。サラリーマンのベロソスが効いて、共感のできる句になった。

気持よくさせていただくボランティア

前 たもつ

社会奉仕と簡単に言うけれど、体力、時間が伴うだけに、誰でも出来るものではない。それだけに、作者の人柄がにじみ出ている句に出会った読後感が、なんともすがすがしい清涼剤になった。

コーシヤル抱えて走る市営バス

伊藤 博仁

赤字に悩む交通局の担当者、その対策になりふりかまっておられない。素人目には、あの満員続きの地下鉄を見ると、どこが赤字なのかと疑いたくなるが、諸般の事情で赤字は一向に解消せず、むしろふえるばかりである。おかげで川柳人はなんとも風刺の効いたこんな句が作れるのである。

老けたなあ小さくなったなあ母よ

岩佐 ダン吉

そんな姿にしたのは誰なんだ、と、孝行な作者は自分を責めるのである。が母もそんな子供の気持ちは百も承知で、いくつ何十になつても、愛しくて仕方がなく、母と子の絆はますます太くなるのである。子の目から見れば、老けようが、小さくなるうが、いつまでも長生きして欲しいのである。

絵馬の誤字これじゃ合格見込みない

西谷 治三郎

ゆとり教育とやらで、小中学生の学力の低下は著しく、勉強よりゲームに強い子供がふえてきて、当局もようやくその弊害に気付いたのか、ゆとり教育見直し論も台頭してきたようだが、合格祈願の絵馬が誤字だらけでは寛大な神様も、苦笑するより仕方がない。

信号へふと立ち止まる向老期

江口 度

老いを自覚し始めると、信号がなんとなく気になるのである。心なしか近頃の信号はクルマ優先のような気がしてならず、歩行者への青信号の時間が短く感じるのは私だけだろうか。

いずれにしても向老期ともなれば安全第一で、慌てることはないのである。

舞う巫女のお尻を拝む初詣で

中島 志 洋

一読明快、楽しい初春の風に誘われまして初詣での句もそれこそゴマンと拝見したが、見付けの楽しさ、おもしろさは正に群を抜いている。作者は真面目なお人柄で、然も米寿を越えられて尚、川柳眼に磨きをかけておられる姿には脱帽の他はない。正に川柳バンザイである。

せめてもの金箔の酒ほとけさま

高杉 千 歩

何年たつても忘れられない故人は幸せで、考えようによっては、男は先に逝つた方がよいのかも知れない。よくしたもので統計的にも男性より女性の方が平均寿命は長い。家族を愛し、酒を愛し、歌も好きだった鬼遊さんも以て冥すべし。

ちっばけな幸せでいい秋刀魚焼く

細川 稚 代

背中の青い魚は、昔から庶民の味方で、さんまも鰯もご多分にもれず、汗して働く庶民にこそさんまの煙も似合うのである。平凡でも、つましくていいのです。ちっばけな幸せこそが生活の基本で、これにまさるものはないのでは。

何時までも元気でいると邪魔になる

米田 幸 子

家族に迷惑をかけたくない気持が、痛いほど判るけれど、それは作者の取越苦労と言うものです。家族の皆様はいつまでも大事にしてくれるのです。ましてや元氣なればなおさらのことです。但しひよつとすると作者は嘆いているフリをしているような、気がしないでもあります。

立ち読みで迷い道から抜け出した

澤田 千 春

活字離れが叫ばれてから久しいが、書店をのぞいてみるとなかなかどうして、信じられないほどの混みようである。立ち読みでひろったヒントが役にたてば、こんなありがたいことはない。

立ち読み族の一人としてなんとなく共感かできる。

沢山の無駄を重ねて生きてきた

伊藤 寿 美

寄り道、回り道は人生につきもので、無駄なことを積み重ねてこそ、真実の道が見えてくるのかも知れません。

真面目ひとすじに生きてきては無味乾燥、幅も深みありません。なにかを教えられたような気がしました。

重宝にされるが右腕にはなれず

平田 実 男

世に器用貧乏、便利屋と称される人が時々いるもので、ちよつとしたことは頼みやすいが、大事は託せず腹心にはちよつと、と言う例が多い。

人を見る眼力を養ふことは、将たるものの要諦のひとつでもある。

別腹という美味しさが面白い

岩切 康 子

ダイエツトに悪いのは百も承知していながら、好物にはついつい手が出てしまふ、作者のおおらかぶりが窺えて楽しい。

輪をぬけて自分の色をたしかめる

赤川 菊 野

輪の中ばかりにいては、自分を見失いかねません。時には輪から抜け出るのも、自分探しによいかも知れません。

本社 一月句会

一月十一日(火) 午後一時
アウイーナ大 阪

厳しい寒さの中、各柳社からも多数の参加を得て、123名の賑やかな初句会となった。

計報は東かがわ市の滝井勝氏。ありし日を偲び一分間の黙祷を捧げた。

おはなしは体調を崩された名誉主幹に替り天笑主幹。人様を喜ばす事をいつも考えているという内容。実行している例として、各地の句会で心をつつ句が披露されるとすぐメモをとる。それはその人に会った時その句が縁で、コミュニケーションがとれる。披露中の句をメモる、という作業はむづかしいが楽しくて、句会の味わいを倍加させる。

川柳を介し、人を喜ばせ人の和をあげよう。ユーモアを交えながらも名誉主幹のご快癒への祈りを込めたお話でもあった。

昨年度月間賞杯永久保持者、太田扶美代さんにカップが贈られた。

月間賞は北野哲男氏(三田市)に輝く。
(司会)朝子(記名)月子・真理子
(受付)賢子・ルイ子(清記)義

席題「生きる」

吉村 一風選

今日よりは少し良い花明日咲かす
生き生きとマツケンサンバ祖母おどる
再就職不満は言わぬ生きる道
どん底を生きて意欲が湧いてくる
まだ傘寿今から青春して生きる
生きてやる覚悟で朝の靴を履く
ひとりでも生きねばならぬ餅を焼く
長電話愚痴をこぼして生きている
生き残り津波の浜に立っている
ベン先に生きる気力をたぎらせる
まだ生きてますと現況届出す
百歳へ充電してる春の酒
父の敷くレールに乗らず子は生きる
たくさんいのちいたなきながら生き
生きてきた山坂語る古ノート
生きてこそ花も実もある恋ができ
妻に子に他人に迷惑かけて生き
晩酌の一合生きて行くちから
しあわせは喧嘩相手と生きている
生きる事やと楽しい古希の春
強き愛時にはもうく生きつつけ
生き下手の心はいつも凍てついて
文句言い愚痴を並べて生きている
年金と妻の叱咤で生きている
生かされる限りは時こう花の種
日々好日食悠々と生きている
裏道にそれて歩くも生きる知恵

深雪 日出子 庸佑 順子 シマ子 鹿太 たず子 奮水 咲二 さくら 玄也 隆盛 庸佑 天笑 光久 つづや 集一 いわゑ 梓 度 愛論 房子 奮水 楓楽 きらり 玄也

生きてるといふしらせなり年賀状
捨て切れぬ夢追いかけている余生
山ほどのシグナルがあり生きている
匿名の臓器で生きているいのち
流木に生きた十日へする拍手

住

今日よりもあしたの夢のため生きる
ペン一本の不滅信じて生きている
生きてゆく哀しさをふと福寿草
生真面目に生きて時々笑われる
妻と二人苦楽を分けて生きている

人

生きようとふん張っている呱呱の声

文

雑草に笑われないよう生きてます

月子

地

道草の好きな詩人と生きている

扶美代

天

二度と来ぬ余生を生きる知恵袋

憲太郎

兼題「ふところ」

籠島

恵子選

懐をするりと抜けた福の神
新春の夢ふところに初句会
ふところが冷めないようにたぎらせる
ふところに住みついているケチの虫
ふところに触れて火の粉をかぶるペン
ふところが溜息をつくルイ・ヴィトン
吐ききれぬ言葉はふところへ仕舞う
ふところは見かけ倒しで鬼が棲む

雅明 美明 月子 典子 富美子 弘風 美代子 憲太郎

ふところの金がなかなか出たがらぬ
ふところに自問自答が詰まつてゐる
ふところに夢をいっぱい詰めてある
ふところの深さをしのぶ通夜の席
ポインセチアじつと見ているふところ手
使うのが惜しいジョークがふところに
ふところに二ト口入れている強気
ふところの深みに落ちた甘えん坊
ふところの深い人だが気を遣う
ふところに温めているよ第一歩
ふところに入つたものは可愛がり
ふところの深さに負けたバラの刺
ふところの深い男に溺れてる
ふところの都合が顔に出てこまる
ふところに飛び込んで来いVサイン
ふところに真心がある小商い
ライバルがにつこり笑ふふところ手
ふところの財布がすぐに浮かれだす
余生とは何かと思うふところ手
引退はなかなかしない懐手
孤独だと知つた味方の懐手
ふところの具合知つてゐるのし袋
ふところに疑心暗鬼のみつをの書
俺俺と母のふところ狙われる

義 希久子
天 笑
庸 佑
扶美代
柳 弘
かりん
美 花
信 子
寿 海
ア キ
朝 子
修 誠
保 州
順 子
篤 子
正 坊
義 義
和 夫
保 州
柳 弘
三 郎
たもつ
萬 的
房 子
朱 夏

ふところの蛍が熱くなつてゆく
人
被災地をふところに抱き温めたい
地
人間を歩きふところから学ぶ
天
ふところの大きき妻に負けている
軸
ふところの吃水線に気付かない
兼題「魔法」 西内 朋月選
お出かけの供は薬と魔法瓶
寝たきりにならぬ魔法をかけている
天国へ妻とポックリ行く魔法
好きという魔法にいつも負けている
シースルーなども女の魔法です
黒づく魔法を使う女かも
リストラの風にやさしくなつた魔女
月末の妻は魔法に長けてくる
魔法とけあなただのことが見えだした
魔法よりこわいのはインターネット
しんみりとくどかれ魔法かけられる
如意棒がほしい師走の台所
階段を下りて魔法をときに行く
太目です空飛ぶ箒作動せぬ
春を咲かせる魔法を秘めている土だ
柩の中でやつと魔法が解けました
家計簿に妻の魔法がかけてある
悲しみを癒す時間という魔法

ア キ
直 樹
弥 生
希久子
雅 明
満 州
則 彦
ア キ
つづや
みつ子
重 人
明 子
いわゑ
千 代
瑠美子
富美子
義 義
潤 子
希久子
朱 夏
楓 楽
俣 子

知りはれへんやろけど嫁はんは魔女
春風に恋の魔法をかけられる
ポックリと消える魔法を模索中
冷蔵庫妻の魔法が詰めてある
土壇場を妻の魔法に救われる
痛いののは飛んでけ母さんで魔法
あの人を視線に魔法かけられる
馬鹿になる魔法をひとつ持っている
母さんは魔法の言葉溜めている
頑ななところをほぐしたい魔法
玉手箱魔法かけたか開かない
凍て蝶の魔法を解いた春の風
金持つと魔法のように消えていく
お念仏自分にかかる魔法かも

天 笑
篤 子
楓 楽
希久子
庸 佑
ダン吉
みつ子
ア キ
茜 茜
ますみ
潤 子
一 風
篤 子
朝 子
誠 誠
泰 子
咲 二
咲 二
公 誠
つづや
洋

兼題「のろける」

西口いわる選

おのろけが一人歩きをする怖さ
結局はのろけ聞いてた友の愚痴
おのろけの一つ二つ言いたいな
優しさが取得とさらりのろけてる
類染めて老母がのろける三回忌
のろけられその上酒をおごられ
膨れつらも可愛いなどとのろけてる
あつさりとのろけて帰る木偶の坊
百歳ののろけも類を染めている
寒気困来ても夫がいますから
途中からのろけになつてくるメール
くすり指のろけ話が堰を切る
妻の後追うなんてこと申します
入籍の会見してるのろけてる
さりげなく妻がのろけてくれました
おのろけを聞かされ安堵里の母
片方の耳でおのろけ聞いてやる
負け犬の前でのろける無神経
おのろけをふんふんと聞く度量人
おのろけの瞳の裏に闇がある
のろけではないかと妻のこと話す
あの人のはのろけ出したら長いよ
二言目にうちのひとがと熱いこと
モナリザはのろけ聞いてる顔だろう
息継ぎの酒まろやかにのろけてる
記念日のバラともだちにふれ歩く

雅明 寿美 忠子 一步 直樹 一步 たず子 愛論 保州 真理子 たつお 明子 千代 和香 咲二 洋子 房子 倫子 孝一 寿一 正坊 月子 玄也 哲男 柳弘 重人

爺ちゃんののろけに婆ちゃんが照れる
悪口がいつかののろけになつて
添えなけりや死ぬわと妻が言うたから
親の目を細めさせてる夫婦仲
次の世もやつぱり妻を選びます
仲裁のやがてはのろけ聞かされる
佳
おのろけの行方ジェラシーへと続く
おのろけを言つてた頃が華だった
のろけなくなつて本音がこぼれだす
同じ日に死ぬんかいなと言はるの(矢)五月
のろけきく女将が高いつけにする
人
おのろけをさらつと聞かす男前
喧嘩ばかりの夫婦ですのと嬉しそう
天
父母ののろけを聞いている平和
軸
熱っぽく彼の話を聞かされる

兼題「信じる」

西出

楓案選

つづや 寿美子 賢子 隆盛 希久子 アキ 順子 能子 修 憲太郎 美花 保州 アキ 雅明 満州 民 美龍 深雪 義子

胸に抱くブーケ幸せ信じ切る
冗談を信じて今も待つている
こんにはちと言えは逃げだすランドセル
信じれば石も仏に見えてくる
極楽があると信じて聞く法話
空缶にお代人れさす無人店
眉に唾信じる前につけて置こ
信じるか信じないかは君次第
目に見えるものしか信じられぬ主義
冷蔵庫信じています妻は留守
甘い言葉をまた信じてる欲の皮
箸二本信じて合より外になし
頭から信じてならぬコマシヤル
神様もうつかり出来ぬお賽銭
赤ちゃんの目に疑いは点も無い
折れた言葉をまずは信じよう
明日あるを信じてるから笑えます
大ゲンカ出来る二人の信頼度
動かない目玉信じることにする
信じてはいませんが金は貸せません
子約した私の明日はきつと来る
信じよう私自身が救われる
おばあちゃん出世払いで良いと言う
この指に止まった妻を信じてる
もういちど信じてみよう始発駅
堂々と生きて信用してもらおう
佳
信じよう海の深さと空の青

能子 朋月 咲二 はず子 はじめ 淑子 寿海 鹿太 房子 希久子 一風 義度 美明 美花 ひさ乃 俣子 重人 月子 朱夏 寿美 哲男 集一 千里 義 信子

信の字にしよう今年の漢字こそ
苦勞性らしい手の皸信じよう
私の年齢信じられませんか
やみくもに信じてくれるのが重い

人

人間を信じた地球怒り出す

地

未知数の力信じて明日を向く

天

足腰を信じて一歩踏みだそう

軸

風の中自分信じるのはかなし

兼題「祝辞」

板尾

岳人選

満席で祝辞聞く人寝てる人

抱きしめてくれた祝辞を忘れない

これからのことを案じている祝辞

小咄をマクラに入れてある祝辞

ネクタイをキュッと祝辞に立ち向かう

大往生だから祝辞で送りたい

懸命に生きたわたしへ出す祝辞

胸をうつ祝辞が続く紙コップ

長過ぎる祝辞へ騒ぐ紙コップ

事情知る人をほろっとさす祝辞

気の効いた祝辞も旬の男なり

きれいな嘘混せて祝辞のさつと終え

頼まれた祝辞甘味のさじ加減

ライバルへの祝辞言葉を選っている

馬耳東風祝辞が止んで眠気覚め

利昭
美代子
保州
つづや

かりん

みつ子

月子

章久
保州
千代
たつお
瑠美子
保州
ルイ子
真理子
千里
洋

天笑
一風
昭三
庸佑
昭

あちこちで忍び笑いの出る祝辞
風邪引いた言訳をして読む祝辞
早よ祝辞終れと思うにらみ鯛
とりあえずエーで始まるのが祝辞
書いたのも読むのも代理です祝辞
長すぎる祝辞迷惑しています
一晩中練った祝辞を置き忘れ
祝辞ではみんな立派な人になり
三人目以下同文でいい祝辞
許されぬ二人に祝辞のないドラマ
祝辞より祝儀の中身気にかかり
嘘も少しブレンドされている祝辞
秘書の書く祝辞社長に読めない字
なにもかも水に流して聞く祝辞
ふる里に祝辞送れる人がいる

欣子
三郎
度
章久
修
三喜夫
たもつ
玄也
能子
弥生
さくら
ますみ
寿美子
集一
れんげ

佳

お天気をほめて始まる祝いの辞
祝辞まだ続いて鯛ににらまれる
祝辞ではみんな社長になる素質
ご祝辞がすぐ演説に変わり出す
おめでどうただそれだけでいい祝辞

人

ご祝辞を腹の子供も聞いている
あつという短い祝辞にあるセンス
天

軸

お祝辞を頼まれているのし袋
かすみ草祝辞聞いている花鋏

北野哲男

耕治
一步

一歩

一歩

川柳大原500号 合同句集発行 記念川柳大会

とき 4月24日(日) 開場9時

ところ (締切11時30分) 開会午後1時
大原町総合センター(智頭線大原駅から歩3分)

参加料 2000円(発表誌・軽食)
欠席投句拝辞・御祝、寸志等拝辞
総合点10位まで呈賞

おはなし 川柳塔社主幹 河内天笑氏

兼題と選者「どこまで」岡田千茶・「しつかり」
小林由多香・「ここだけ」国米正志・「すつかり」神原日出夫・
「にらむ」土居哲秋・「さわやか」
新家完司・「むげん」尾高水陽

事前投句 締切3月20日「これから」小林妻子謝選
宛先〒707 岡山県英田郡大原町下庄町785
小林妻子宛 ☎0868-178-22607

宿泊の方は内容をハガキに添書きをして、
早めに投句願います。宿舎は国民宿舎五
輪坊ですが前泊・後泊・共同部屋・個室
等も明記願います。事前投句にも別途呈
賞10位まであり。

宿泊料金(二泊二食)五輪坊6825円・交流館8925円
主催 大原川柳社 後援 岡山県川柳協会他

水煙抄

秀句鑑賞

—1月号から

池内 かおり

しとやかにおてんば包みこむ晴着

大久保 伸子

お屠蘇気分も抜けぬ初春に相応しい巻頭句、街を歩けば注目的、いつものおてんばはどこへやら、さすが大和撫子です。

鉄塔で疲れた雲がひと休み

馬場 利子

人か雲か、雲か人か、こんな川柳眼が私も欲しいのです。ひと休みしたら歩き出そう。

売り言葉塩をきかせて返される

山田 葉子

肚に据えかねて売った喧嘩、痛い所を突かれた。感心している場合ではない。勝負は互角、きれいさっぱり忘れよう。

身の丈の深さで余生泳いでる

土屋 起世子

身の程を知っているから溺れることもな

く、悠悠自適の毎日、幸せなお方ですね。

どの指も個性を持って仲が良い

塩路 よしみ

無口で思慮深い人、言わずもがなを言ってしまう人。個性と思えばお互いさま。

ゴミ出しはかわいい声で頼んでる

巖田 かず枝

こんな気配りの出来るかわいい人にお願ひされると、きつと断れないでしょう。

長男の嫁の役目が終わらない

川島 良子

永遠のテーマでありましょう。ですがその役目を全うする気概を持つ女性が、まだまだいる事に安堵いたします。

ネクタイを緩めまだまだ飲むらしい

坂口 英雄

飲み会ならばどこへでも、こんな人たくさん知ってます。もうお相手出来ません。

少年の出すシグナルに耳すます

江波 正純

こんなやさしい大人が増えるのが望ましいのですが、私は近頃少年、少女達と目を合わせないようになりました。

おつき合いかおしくなった子の喧嘩

鈴木 一弘

親であれば誰もが体験する事、でも子供達はずく仲直り出来るんですよ。

爪に絵を描いて厨を遠ざける

三浦 強一

ネイルアートの流行で、おしゃれな女性には付け爪で対処しています。多少家事は疎かになるでしょうね。

憂鬱という字は見ると憂鬱に

木村 忠義

書けばますます憂鬱に、眉間に皺が増すばかり。どこを押せばこんな着想が浮かぶの。

秀才と才媛宴終るまで

堀 正和

義理が絡めば行かねばならぬ。この日はかりは寄ったかつて御両人を盛り上げて下さいます。その後の事は自己責任ですぞ。

芸術に触れて一日画家になる

花岡 順子

割れ物に触るが如く介護の手

武島 ちよえ

合併にかくれて見える鮎と鞭

高野 不二

八二五句、じつくり鑑賞する機会を下さりのんべんだらりの毎日に喝を入れて頂きました、ありがとございました。



滝井勝君の長逝を悼む

木村 あきら

十二月七日早朝、滝井勝氏令息から突然の訃報を受け、早速川柳塔本社に通報、各関係先への連絡に追われました。

四日ほど前に、入院先の香川県立白鳥病院三階の病室にお見舞しました。その折、奥さんと息子さんが付添って居られ、ご本人は少し弱られたようにお見受けしましたが、必ずよくなることと信じていました。まさか、こんなに急に亡くられるとは思いません、大変驚いた次第です。

勝氏は、昭和五年十一月二十七日に東かがわ市（旧・香川県大川郡）帰来四八九番地に生を受けられました。

長じて、日本の九十パーセントのシェアを誇る白鳥の手袋裁断技術者として、株式会社ウルシハラ手袋工業に入社されました。入社以来その道一筋に模範社員として勤め上げられ、定年後も乞われてパート社員として勤務して居られました。一生を手袋業界に尽され

たその行跡は偉大なものがあります。

川柳を始められたのは平成十年四月で、友達に誘われて、川柳塔おっぱい吟社の句会に出席されて以来です。以来、句会活動の中心として活躍していただきました。

平成十二年十二月に、木村あきら、成重放任、神保坊太郎、河内天笑、西出楓楽の五氏の推薦を得て、常任理事会で本社同人になられ、本格的に川柳に取組まれるようになりました。

その矢先の平成十三年夏、食道癌がみつかり、香川医大附属病院に入院され三カ月余りで退院されました。それから自宅療養のかたわら、体のためと趣味を兼ねて自家菜園作りの、おだやかな日々を過ごしておられました。小康を取戻された間は、作句にも励まれておっぱい吟社の例会では通算十二回の選者を立派に務められ、選句眼もたしかなのがありました。

まだまだこれから活躍が期待される人なの

に、憎むべき癌は大切な人を奪って行きました。かえすがえすも残念でなりません。

十二月八日、東かがわ市の河井ホールでの葬儀は多くの方に見送られ、惜しまれながら極楽へ旅立たれました。

積最勝信士 享年七十五歳

心からご冥福をお祈り申し上げます。

滝井 勝句抄

合 掌

福相の妻が一緒にいる自信

湯に浮いた貌は如來の穏やかさ

踊いた石から学ぶ渡世術

梅一輪春さがけの花便り

穏やかな顔に波風越えた自負

病一つ持つて福寿をあきらめず

兵法の情け逃げ道開けてある

浅学を支えて辞書も草臥れる

ガン手術妻の涙に見た絆

闘病記勇気を貰うために読む

再起への喜びが湧く退院日

波立たぬ処に捨てるグチ一つ

そろそろと子の言い分も取入れる

開祖への思慕法灯の灯は消えず

谷越えて結ばれていた赤い糸

母の味みんなの舌を知っている

雑草の野心に誰も気付かない

天命に何の逆らう術もない

紅差して寒い心を引き立てる

編輯部

治三郎 祐作 求芽 千莖子 奮水 泰雄 晴美 とし子 萬義 美籠 重人 宵草 典子 高栄 比ろ志 スミ子 諷云児 あやめ

富 玲 芳 美 重 勝 義 伊 和 龍 博 龍 和 子 尚 稻 孝 秀 活 メ 庸 宏 武
惠 坊 光 知 忠 見 え 人 佐 枝 枝 文 枝 代 子 士 子 一 夫 惠 女 佑 昭 章 史

愛論報

定男 克子 朝子 弥生 雅文 湖風 柳弘 敏子 三重子 章久 太一郎 元紀

模元 美善 幸子 節子 克枝 照彦 玲子 紀惠 公惠 京子 孝惠

清 美善 幸子 節子 克枝 照彦 玲子 紀惠 公惠 京子 孝惠

路地裏の宇宙にはばたく工場の灯
小さいが顧客の顔が見えてる
主婦の知恵町工場に生かされる
あがいても行き着く所みんな骨
窓際の男が乾くあばら骨

川柳塔みぞくち (前月分) 小西 雄々報

大山の風の匂いに身を癒す
嫁話笑りの風につてきた
晩秋の風もつめたい日暮れ時
傘寿まだ生きぬくつもり風探す
木枯しを仲間に入れて年の暮れ
独り身へ北風吹いて虚脱感
天国の夫に届ける風もある
風車いつもにこにこ回ります
亡き父母の風恋しくて暮参り
風上にいるから噂流れだす
風よけになった父はは今思ふ
サルビアの燃える思いを風伝え

川柳塔おっぱい吟社 木村あきら報

倅せは二人で歩く長い道
寄り添って見えない壁を越えてゆく
雑草が這いつくばって春を待つ
鉄拳の昔もあった好々爺
苦手だが掛替えない母が居る
胸の奥見せてそのまま具になる
忘れは病はびこる破目になり
台風が仕事残して通り過ぎ

恭昌 半蔵門 あや子 良子 愛論
公美枝 千代美 鈴枝 豊枝 信雄 和代 智恵子 弘子 静江 正光 雄々
輝夫 文仙 賢 八重子 八重子 八重子

バアさんが着て見る吾子の鉄兜
トキメキにこれが初恋かも知れぬ
なれ合いが手かせ足かせ身をしばる
娘夫婦と暮らす夢が叶った老いの春
久し振りローカル線で聞く訃り
梅一輪手向けてありし遍路墓
少子化で年金根元枯れてくる
長寿策梅の威力に賭けてみる

川柳塔唐津

仁部

四郎報

みのるさんお花あげよう声がする
落ちそうなスボンで我慢比べする
お七夜の祝い息子と酌み交わす
和を以て貴しとせぬ天邪鬼
モザイクの記憶をたぐる共白髪
酒煙草やめたなら悪友来なくなり
老人大学皆留年志望
絵手紙をかざして初音吸わせてみ
テロの国合成写真もおてのもの
公園で会うのものはじめわくわく

竹原川柳会

時広

一路報

ガタンゴトンガタンゴトンと鳴る枕
丸い背枕は低い方にする
日々好日枕に感謝して寝息
枕木が一寸狂うと皆狂う
父ちゃんの童話を聞いた腕まくら
輪廻転生枕の下の水の音
ありがとう父の翼のおかげです

吟笑 放任 ひかり よしみ 寿々女 貞月 初恵
実 蜂明 高笑 水笑 晴翠 輝夫 勝視 四郎 正河 虹
蘭幸 栄恵 節夫 芳居 厚子 不子 慶子

傷ついた翼やすめる母の湖
世代交代翼をすてる勇氣もつ
ひなを抱く母の翼よ観世音
案山子だって翼が欲しい今日の空
折鶴の翼に平和重すぎる
真つ白な翼をつけて孫育つ
離れてる心をつなぐメールです
再会を信じてサヨナラを言おう
老友と旅のプランで今日も暮れ
人間が好き川柳の仲間たち
地藏さん仲間に入れてかくれんば
幸せだナア議論戦い合う仲間
柳縁の仲間わたしも光り出す
二等辺三角形でいる仲間
月一度趣味の仲間になる夫婦

佳句地十選 (1月号から)

菊地政勝

今日の憂き風呂で流せるほどのこと
親切を金に換算してしまふ
介護して母娘の絆問うてみる
霊柩車道を間違ふことはない
石段に叱られている不摂生
最後尾それでも根気だけ走る
懺悔することはないかと胸に聞く
満ち足りた生涯でした木の葉舞う
つまらない約束ばかりする小指
祈願には本当の歳を書いておく

房千代美 敬子 幸子 淑枝 千枝 史子 孝枝 万年 輝恵 正宏 汎美 静風 力
義章 宏子 節司 完案 楓吉 信子 愁女 志洋 哲男

インターネット仲間には世界中にいる
一人減り二人減り八合目の仲間
最後にはちゃんと握手をする仲間
鬼も仏もみんな仲間を持つている

川柳大阪

高木 信幹報

たてよこの糸温かい愛を編む
楽な道歩くと墓穴待っている
鞭でずか試練も耐えてにぎり飯
ブレーキが効かぬ六十路の物忘れ
でかい声やつぱりノーで決めている
菊作り笑顔で逝った兄想う
不揃いの団子に母の温みあり
返り咲く男の顔は決まってる
温暖化クーラー入れて鍋料理
郷愁を招くトンボの透けた羽
初孫に崩れるような祖母の顔
弁当屋立派なお尻でドアを開け
敬老と温泉旅行に誘われる
手ぶらとは言うけど携帯離さない
おかしい事言うでタレント元気で
亡母の味わしつみれの団子汁
天高く洗滌し過ぎ干場ない
それなりの決め手イチローのバット
いっぱいの菊で亡母を飾りたい
この道と決めたらひたすらに歩く
吉備団子鬼やつつけるエネルギー
菊見ごろ友の誘いは酒らしい
オレオレはおかしな奴の代名詞

民恵 笑子 半覚 一路 章久 タカ子 隆司 ダン吉 芳香 東吉 一風 ひろゑ 朝子 洛酔 司 川童 敏 美花 かよこ 柳弘 笑風 重人 比呂志 一步 善純

スキャンダル勲章つけて晴れ舞台
地球いま人の愚叱る風地震
台風が手抜き工事を露呈する
イチローは栄誉賞さえ場外へ
腹立てて結局まずい茶をする
隔世遺伝あゝ宿命の団子鼻
日の丸に菊が香りし凜とする

京都塔の会

都倉

千年の都びとたち行きかえり
紅葉黄葉 小宇由なる京ひと日
秋の陽が冴えて見得切る紫宸殿
遣り水は加茂や琵琶湖の水を引く
神様も他人で頼りにはならず
他府県の車で埋まる紅葉狩
他のものは食べぬ蚕の繭の艶
他のことはさておき料理うまい妻
他所事と割り切れなくてポランティア
他人だと悟ってからはよく眠る
試して合点なるほどなあるほど
人間の驕りを自然から学ぶ
自分自身愛でる大事さ学んでる
雑学の人から学ぶべきる知恵
好きな師の癖もいっしょかもらつて
あと書いた日の墨の香を忘れない
可愛がられる年寄りになる本を読む
握り飯亡母に追いつくことはない
突っ立っている電柱からも学ぶもの
コーヒーで大福食べるひと呼吸

喜楽 本蔭樺 照月 功 鉄心 まつお 信醉 求昇報 英子 義子 求芽 寿美子 義 満子 シマ子 哲子 百合子 朱夏 春 美穂 ふりこ 宏子 葉子 美龍 石舟 たず子 たもつ 輝美

お菓子屋の前にそびえる歯科医院
迷っているのにケーキ屋の自動ドア
子どもにはピカピカ光っていた駄菓子
お点前にお菓子のほうがかしこまる
黙秘権ポテトチップスス tira ける
菓子持つて親戚来れば何かある

岸和田川柳会

原 さよ子報

癖のある酒が好みに合っている
隠しても癖と尻尾はすぐばれる
すらすらと嘘をつく癖自己嫌悪
ノーマルな服装だけど目立つてる
百歳が普通ですとよと長寿村
普通賞そつとあげたい人がいる
泣き上戸怒り上戸で仲がよい
返信にそれと匂わす金無心
期待した返信チクリ針さされ
返信の札に人柄しはれる
友の通夜名月さえもはけて見え
泣かされて子役の画像はけている
ピンボケの話術さん相ませる
ばけたのか記憶にないとは永田町
こつそりとサブリメントで呆け防止
三猿を決めて二世帯丸く住む
同期生皆穏やかでいやさる
新妻の丸いお腹に耳あて
花丸をつけて欲しいな家事育児
大人でもやつぱり丸がほしいです
丸洗いしても宴の残る染み

則彦 啓子 正坊 静枝 いわゑ 益子 盛之 寿海 房枝 珠子 仁緑 岩夫 弘基 弘子 さよ子 東吉 洋 一脩 ダン吉 路子 ふみよ 守 みね代 和美 香代 檣代 幸子

避難して丸い姿勢で寝る辛さ
素直さが見える彼女の丸い鼻
ナースの手はけた振りして握ってる
はけた振りしてたんまり貯めてはる
食事前必ずバンド外す癖
天皇家戦後御一家背が丸い
普通なら上出来俺の遺伝子だ

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

ゆつくりと湯舟につかる人恋し
ステージを降りて仮面は汗を拭き
散歩道もつと歩けと万歩計
ゆつくりと冷えたグラスにひとり言
出雲弁ゆつくり流れて法話会
ゆつくりとなさいとお茶を入れかえる
九条がボチボチ仮面ぬぎたがり
仮面ぬぐ暇さえもなく来た米寿
石投けて水の深さに酔いしれる

長柳会

村上

直樹報

この道を選びひたすら雑魚の自負
よけいな事話して役に選ばれる
戦地でも張りこの虎の自衛隊
定年でお歳暮貰う数が減り
お歳暮も定年過ぎは急に減り
泡飛ばし激論の末握手する
地に還る母好きだった花の木に
贈与税どっさり取られた夢を見る
百坪の終の住処で今日も無事

笑司
みつ江
清
鍊太
穰一
蛙城
呂万

はるみ
かつ子
聖子
恵美子
好栄
伸子
博利
清泉
白汀

直樹
明子
靖博
武男
ひろし
もこ
よしお
たけし
正一

地震でも慌てぬ我が家子沢山
忘却は心を癒す贈りもの
左遷地できらめく星がうるんだた
苦も楽も飲み込み人は地に還る
娘の門出贈る言葉に愛をこめ
未練かな更地に出来ぬ個所ひとつ
喜寿祝夫に贈る羽根ぶとん
愛がありダイヤもあつてクリスマス
活断層抱いてる地にもサクラ咲く
畏まる席で地を出す大阪弁
左遷地の地酒の旨さ人の好き
プレゼント豪華になつてきた不安
虫食いの土地にバブルの敗戦記
夕映えのもみじが選ぶ西空
よく笑う血筋母から贈られる
被災地へ是非暖冬を贈りたい

川柳ささやま

遠山

可住報

石けんの泡に埋もれてる安堵
憧れへ近づきたくて背伸びする
影法師並んで歩く背の丸さ
夕食をすつかり忘れた炊飯器
音みんな丸く聞こえて朝が明け
人柄をすつかり変えたのはお金
堪えて来たドラマすつかり墓にうめ
よい夢の思い出朝の数珠をもつ
朝の汁亡母の味まで近くなる
蛇口から今日が始まる母の朝
喝采へ明日は追われるトップの座

マサ
てるこ
敬二
和代
靖子
芳野
けい子
史

正子
三和子
幸雄
和子
富美子
英美
正美
淳司

恵美
純子
美紗子
美智子
文子
靖子
とみ子
多美子
開子
つや子
八重子

農夫の姿髪薫帽がよく似合う
何もかもすつかり許し駅に着く
すつかりと忘れたことにする不義理
類伝う涙信じたのが不覚
金婚というてれくさい晴れ姿

川柳塔きやらぼく

福代

天雀報

無国籍ペリカン百羽何処へ飛ぶ
下弦月見上げて歩む朝の道
晩秋のイモの葉ゆれる散歩道
小一小三曾孫がくれる笑い種
秋明菊も残菊も余生のなかに
後悔をしないで花は散つていく
住所録心友はかり残つてる
乗りついでやつとこ句座の仲間入り
亡き母の面影おつて同じ趣味
実感の痛みに耐えて強くなる
台風がそれて稲穂がお辞儀する
千差万別織るにおれない人模様
もし僕が神なら地震などおきぬ
身のほどに合ったくらしに伸びる爪
テレビから感動くれたレスキュー隊
怠けたツケがいつか仕事にふりかかる
腹までは読ませないぞと猫かぶる
千の風見えるメガネが欲しくなる
変心をしたくて群をぬけ出した
肩寄せて青空仰ぐもみじ燃え
役に立つ事ありそうで生きてみる
心はくして相手の掌の中に入る

富子
君代
哲男
芳郎
可住

瑞枝
初枝
雪江
紫泉
ふみ
やえ
天雀
寿々子
那珂子
なみ
すみえ
玲子
亜弥
てい子
春枝
晶子
蘭
恵子
千春
章江
富美子
日枝子

優太ちゃんの未来を護る神ほとけ

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

千代

文化とやうちも隣も即席題

指一本ご飯の炊ける文化の日

文化とは大にオベベを着せること

連綿と嘘 政治家の文化かも

あるがまま気楽に生きて恙なし

次男坊気楽でよいと嫁になる

ひとり居の気楽や老いの贅沢さ

マフラーに気楽な首を巻かれてる

気楽さへ時々とどく果し状

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

塩味がきつい女の愚痴たまる

ふところに女が住んで揺れている

鼻折られ女涙でせめてくる

裏町の女できれいな水を飲む

青春の骨を鍛えた柔道衣

骨のない猫がネズミと住む世代

発掘の骨がロマンを語りだす

ためらえば小骨がささる無言劇

骨のある寡黙が隅にいる不気味

無駄骨はないと母さん言うている

レントゲン美女も私も同じ骨

骨身惜しまぬ男の汗は美しい

喉の骨母はごはんでとりました

終りには妻にお礼を言うつもり

人生は幸せでしたと終りたい

千代

弘直

能子

シマ子

欣史子

慶子

加津子

香住

喜美子

あずき

弥生

シマ子

英一

欣之

はじむ

まつお

欣子

國治

ダン吉

更紗

とみを

博仁

弘直

芳香

店仕舞い師走の風が突き刺さる

初殺を焼いて農家の一区切り

その話終えろよ酒がますますなる

火の付いた親父の小言終らない

佐助の咲くを待たずに友は逝き

読書する秋読み切れぬ本がふえ

回想に耽るシーンは雨がよい

回想に夕日と歌う赤とんぼ

金に泣き金に笑って夫婦ゴマ

今はもう母を越えたと思いたい

回想のおおかたを占める妻の貌

思い出の引き出し父も母も居る

無味乾燥カラカラ音のする種火

人情におぼれて鬼になりきれず

穏やかな時は流れて朝の粥

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

結ばれる夢も果敢無く拉致家族

花籠にリボン結びてお見舞に

斑鳩の壁面の破片夢結ぶ

熟女ひとり明日の顔を考える

脛かじり明日があると歌ってる

くじ買って長者の明日を夢に見る

明日の日の約束もまた忘れがち

ゆえあつて明日の暦をくつてみる

地震台風野球も荒れた年の暮れ

木に凭れ空をみている老の文字

傘たたみ一つにさせる粋な雨

小春日の頭の上をモノレール

半蔵門

巳代一

義明

浩三

きらり

春蘭

幸生

ますみ

一風

あかり

政義

秋雄

柳伸

宏至

加津子

東園

正子

宏一

守弘

昭三

幸子

千恵

久子

勝巳

しづ子

寛之

半蔵門

来ぬ返事ポストを濡らす秋の雨

糸偏によわい女でさみしくはないか

靴音のまざまざ響き神経科

葉湯や一字一字の文字を嚙む

迷い蹴散らして枯れた向日葵

城北川柳会

吉岡

するするとながる子供おんぶの子

仲直りうどんするする朝の膳

するすると決断出来ぬ気の弱さ

隣組回覧のみ続いている

いじめするリストに乗った孫しかる

夫婦仲一肌脱いでもとの鞘

忠告をよく消化して噛みしめる

イチローとストで際立つプロ野球

はじめの田植えするする足とられ

永住を震災に遭い移り住む

よく噛んで消化をさせる処世術

坂道でえんこしてますするすると

幸せを一人じつくり思案とき

孝行に差があるけれど皆我が子

百歳のリストをめざす今卒寿

淋しくて人恋しくて秋の夜

度の合わぬ眼鏡で言を左右する

先送りしては墓穴を掘っている

お隣はいつもうちより気楽そう

返済はするする延ばしばかりと

ずるずる老い一日無為無策

別れたい言うてするする五十年

和子

年代

薫

武庫坊

芳子

修報

八重

はじめ

美代子

政子

美智子

久留美

達子

正

あい子

柳一

静枝

昭子

タカ子

順三

一枝

志華子

求芽

重人

あやめ

喜美子

倫子

とし子

温かい嫁へする長居する
ハードルを下げる愛が見えてくる
口笛を吹けば明日の風の音
ライバルに勝つたリストから消そう
許しても許さなくても花は散る
リストから消え退院の軽いドア
次々に消化不良の流行語
大物も小者も消化して首相

川柳塔なら

坊農

柳弘報

嘆いても直りませんな性格は
借景と入れかわり建つ巨大ビル
嘆くまい恋のゲームももう終わり
大根が高くて嘆くおでん鍋
ほつこりと民話を紡ぐ祖母の膝
逆縁に嘆き悲しむ母が伏す
借景に通天閣のある暮らし
民営化大阪駅を街にする
あいそ笑い上手になった民営化
営みに嘆きの壁は無くならず
衣食住足りても嘆くこと多し
借景の見事な所墓に還る
紙風船民話飛び出す置きぐすり
嘆く涙を笑いとばして風を待つ
万葉の道秋には秋の彩をもつ
借景に春夏秋冬もう幸
まだ嘆く余裕が仏まで還か
借景はまほろば秋が澄みわたる
嘆くのはよそうお日さま笑つて

典子 高栄 集修 千里 ひさ乃 史風 公一 博一 あやめ 千梢 とし子 登美子 春雄 真理子 弘風 理恵 美佐子 冬葉 太一 洋子 一風 孝子 國治 弥生 美千子 朝子

菊人形声なき声を出す戦
正調の民謡知っているこけし
思い切り泣いて嘆きをロックする
借景の花野に母の椅子を置く
落葉掃く人と生駒を語りつく
山麓の風が洗った錆びた脳
難民の癒すものなし蒼い月
国民の中に私も括られる
紅葉は七やないぞという木の葉
植山を借景にする老いふたり
生かされて生きねばならぬ紙おむつ
かわはら川柳会
あの人抱んだものは放さない
赤い糸掴みはなさず共白髪
逆境で掴んだ意地の花ひらく
いとし子の掴んだ手から愛かよう
人類の平和な暮し掴みたい
夜明けまで解いた算数忘れまい
算数は苦手でも子育ては二重丸
にこやかに計算上手八百屋さん
親になる計算できず子が悲劇
西宮北口川柳会
無縁仏の骨を集めた猿芝居
シナリオは神の手にあり生きている
輪の中のひとり芝居が浮いてくる
由緒ある鄙びた町の芝居小屋
孫の守り責任ないよである様

桜竜 隆盛 更紗 秋雄 和夫 茂雄 ダン吉 章久 富子 道子 余史子 登生 泰良 好道 かず恵 悦子 寿子 雅子 俊路 能子報 黒田 哲水 紀乃 昭三 キク子

無責任だから責任とらされる
言い切った手前責任重くなる
責任の重さに耐えるチビた靴
きみを泣かせた責任がある薔薇のトゲ
肥えた責任全部しよ！こむ膝頭
責任者ずらり並んでお詫言する
責任の重さ相つち打てずいる
一歩リードすぐに浮かれる子を案じ
追いつかれないよう私走つて
リードお見事雑踏泳ぐ介助犬
うしろから息が聞えるほどリード
夫にはリードされてる振りをする
斬新な思考で会をリードする
始まったばかりにとにかく外野席
書き始めだけは埋まっている日記
自分史に終始かわらぬ夫がいる
切れを出せず一年暮れ始め
落ち葉かさかさ踏むひとりつて佳しいネ
平凡な余生に夢を二ツ三ツ
新陳代謝やがて皆も消えるのだ
コンピューター沈黙して動きだす
先代の自慢している鬼瓦
午前五時今日一日をどう過ごす
遮断機下りてふと振り返る昨日今日
亡き姑のルーベ素直になじみ出す
川柳塔みちのく
古日記文字の蒼さも懐かしい
人生の最後に背負う床柱

良恵 江美 鹿太 たず子 嘉彦 トミエ 能子 てる 千代 折杭 哲男 歳子 光久 求芽 朋月 美籠 文 石舟 網子 房子 順子 五月 美代子 富喜子 洋子 あすなろ

尾灯点滅たしかな返事だと思つ
極楽まで担ぐ重荷を妻と分け
はだされて情に返事をしてしまふ

古いけど捨てられないのMサイズ
古い話の中でルーツを確かめる
かやぶきの古い民家も見直され
オレオレ詐欺うっかり返事出来ません

につこりとチヨウ気持いい水眼鏡
につこりは孫と遊べるほどの余暇
神様がくれた小さな荷を担ぐ
鯛鍋の笑顔明るく銚子増え

ヨン様に吸われてしまふあの笑顔
につこりと会釈を添えて鬼が来る
看取る身の苦勞も消えてゆく笑顔
につこりの遺影に胸が詰まされる

湯上がり返事優しい顔です
モンローが着た古着だという高値
捨てがたい古着を干しておく冬日
につこりがとても可愛い糸切歯

川柳塔わかやま吟社 牛尾

永遠にあるのに僕にない時間
パソコンも生身ウィルスには弱い
鉢巻の浸みこむ汗に春が来た
予約した年金だんだん痩せ細り
輝いてやまとの春へ行く葉書
予約したお節料理へ誰も来ず
一泊して祝賀の会へ予約する
来世まで予約のできる妻がいる

青夏 彩人 きよし 初枝 ヒサ子 てる 隼人 順風 銀波 ふさゑ 花匠 愁女 黙人 岳水 慕情 花峯 一花 五楽庵 緑良報 大輪 保州 伶 良一 彬節子 紀久子 豊太 博司

旅プランパソコン予約してひとり
別人が来てた予約のレストラン
縦帳と予約している初舞台
皆揃うまではケーキと睨めっこ

予期しない老いが体に来て座る
おもろない時におもろい顔が来る
永遠いつか私も流される
永遠に口を利かない訳じゃない

道風の蛙は永遠に僕の影
永遠の真理はどこにあるのかな
屈折をしながら続く血の絆
代々の無形の文化受け継がれ

ひと言で永久の昭和が語れない
永遠の生命戴く地に還り
パソコン音痴水の流れが早すぎる
パソコンをしている無風空間だ

パソコンのメールで孤独埋めている
携帯やパソコン出来ぬあかんたれ
心枯れて真夜中パソコンと遊ぶ
意のままにならぬパソコンすぐ凍る

パソコンの頭脳にわたし負けている
あかんべをしてパソコンをOFFにする
尼崎尾浜川柳会 山田 耕治報

ごっちゃ煮の独りが美味い除夜の鐘
若者に戻る薬を研究中
年暮れて善の足あとに残しこ
夫婦にもゆとりが出来た車椅子
人生の夢もゆつくり低飛行

和香 克子 秋子 英子 和子 利治 輝一 准一 泰女 三喜夫 美子 和 美子 正博 美津江 あき子 稚代 三男 順子 東吉 寿良 晴美 五月 秋子 カズ子 よし子

災難の手術ランプの消えを待つ
やめとくわ今日仏滅の気乗り薄
木枯しが吹けばわが家の晩は鍋
月末の少しゆとりが買う刺身

虚と実のはざまに揺れる年の暮れ
ヨン様に女心をぬすまれる
髪染めで笑いの渦の中にいる
地震国綺麗な富士は休火山

人生の歯車ゆとりは潤滑油
親の愛知らず育つた子煩悩
天国の暦毎日日曜日
ゆとりはないが家には温い飯がある

暦では相性がよいはずの妻
来年はうまく咲かせよう花暦
日めくりが枯葉のように散つてゆく
暦見てデートの日まで決めている

走っても走らなくてもくる師走
なに彩に埋めていこうか初暦
川柳塔おとり 西原 艶子報

かすり傷ぐらいは舐めておけばよい
メルヘンで金波銀波の夢もらう
おとこより先に女が暮れてゆく
古傷がタイムトンネルくぐらせる
今日も無事暮れて感謝の手を合わす
傷口を企業秘密が守りぬく
好きな道みんなきらきら目が光る
母さんに撫でて貰えば直る傷
坂道をころころこころと年の暮れ

美代子 里江 勝巳 耕治 正治 龜子 まさ 昭三 孝一 イサミ きよし 比呂志 求芽 諷云児 義芳 江美 鹿太 美龍 由多香 雄々 螢 黙光 以和万津 小生 登美 風花 道子

道半ば暮れる夕日が早すぎる
さらさらの一年生と手をつなぎ
親友が心の傷にふれたがる
さらさらと青春時代面映ゆい
いつまでもさらさら光る目でいたい
古い傷同士結んだ赤い糸
消えそえない傷あとを時が消す
来し方を眺め行く先日が暮れる
さらさらの思い出白く風化する

川柳藤井寺

高田美代子報

三歳が相手本気で怒るなよ
屋上で下を覗いている本気
菊日和本気であなた奪います
本気かしら笑うところで怒りだす
それ本気訂正してはどうですか
本気になれば五本の指に入るのに
本気ですかバラ百本をくれた彼
手編みのセーター本気にしてもいいですか
食膳に母の本気が溢れてる
無言劇妻が本気で演じてる
この度は何を釣ろうか魚市場
肩揉みという餌で釣るおこづかい
釣り天狗逃げた魚の夢を見る
ブランドで釣った魚に逃げられる
釣られ頃釣って下さいうちの娘を
餌やらず釣った妻です狂いない
釣ってきた烏賊が美味しい今日の酒
釣り銭はいらぬとだいたい酔っている

幸次郎
舎人
松枝
知恵
ヒロ子
清子
真一
一弘
艶子

六点
一箇
瑠美子
登志子
春蘭
栄一
悦子
扶美代
喜代子
淳司
武義
いさお
志洋
一知
アヤ子
ヨシ枝
雅枝
耕策

メンツなどどうでもいいい気楽です
儲け話メンツ二の次三の次
身を削りメンツを入れるのし袋
名門へ親のメンツを背負わされ
見栄はった財布だんだん軽くなる
終の駅まで持ちそうにないメンツ
かくし味母の面子を引き立てる
書き終える積りで五年日記買っ
ド忘れを思い出しているアイウエオ
パソコンを打てぬがお針好きな指
山頭火のような旅ならしてみたいし
釣り人は終日沖に夢を見て

南大阪川柳会

吉川

寿美報

地球の絶叫あなたに聴えるか
釣り上げた鯛絶叫をするかも
瓦礫の下で生命の声をふり絞る
断崖に立つと絶叫したくなる
よるこびの絶叫だろう呱呱の声
宝石はないが胆石七つ持つ
夢よりも真実一つ追いかける
世話好きも潮時だけは決めておく
自惚れがあつて潮時見失う
潮時だと思ふ歩幅が広くなる
生涯現役それまで狙う今の椅子
最長もちびつ子も居て同居の和
戦後史に八月十五日の苦さ
男と女愛慕累神代から
最長の夜水害の屋根にいて

昭子
史郎
鐘造
かつみ
絹歌
みつこ
龍一
庸佑
映三子
政代
美代子
桂子

直子
度
寿美
重人
楓楽
弘子
千里
タカ子
柳伸
アキラ
章久
志華子
柳弘
たもつ
シマ子

結婚の夜の明けない長い夜
新憲法不戦の誓いまだつづく
オイ枯葉論吉に化けてくれなにか
怖いのに子供はみんなお化け好き
お化けにより怖い事件が紙面埋め
お化けでも負けたと思う厚化粧
にんげんの弱み握っているお化け
お化けでもいい会いたいねお母さん
潮時と腹決め虫歯抜きに行く
雪女熱燗好きですぐに溶け
コースター絶叫したのは彼氏
お化けならロングヘアーになつてから
お化け屋敷の裏で一服吸うパイ
お化けより怖い大きな熊が出る
潮時が来るまで我慢動かない

はたる川柳同好会

水野

黒兎報

復興を急ぐ越後に雪迫る
なぜ起るあつてはならぬ事故にミス
針百本のんだ位の反省は
万物の霊長なぜか殺し合う
なぜ泣くのやさしい佐渡が目にしみる
核兵器ないのに平和なぜ来ない
泣く声で母はなぜかとすぐ分り
年取ればきつとあなたもわかる何故
なぜなぜと探れば深い闇にあう
急ぐまい人生しばし途中下車
百均で感心しつつシヨッピング
百度石じゃまにされてる初詣で

弘泰
憲太郎
更紗
叡子
ひさ乃
修
朝子
集一
初太郎
遠野
昌紀
なきさ
萬的
欣子
庸佑

黒兎
柳童
契三郎
正三郎
長一
禮子
直次
昭子
敵子
久子
信男
春代

急がずに歩こうまわりがよく見える
百葉の長に魅入られ胃を亡くし

川柳塔まつえ吟社

三島 松丘報

秒読みとなり鳩尾を伝うもの

日本の隅であくせく焦つてゐる

焦るから余計に早く陽が沈む

ライバルを追ひ越したくて焦つてゐる

人並に焦つて見たいた年の暮れ

かたつむり焦つてみても変わらない

咲く梅が平和な初春を予告する

雨が降るらしい蛙が鳴き出した

一目惚れ恋に予告は要らないね

三十までに嫁を貰うと言つたのに

続編の予告枕の下におく

予告など要らぬ出たとこ勝負する

誤算らしい鴉が頭ひねつてゐる

翔んでみて羽根の長さを知る誤算

台風に米百俵を奪われる

慰めるつもり誤算傷に触れ

青春の誤算と共に強く生き

人間の誤算ロボットに笑われる

末席でチャンス窺う猫が居る

あの人の隣席が空いてない

主婦の席ゆづつて嫁の設計図

エリート席は胃薬のにおいする

隣の席美人の匂い吸い込んだ

席順にすつたもんだで爛がさめ

わたくしをひょいと振り向くこぼれ花

緑 骨

勝

知恵子

昭二

治代

義良

すみこ

茂美

静恵

幸子

昌枝

きみえ

浜丘

蘭

多喜

螢

多賀子

ちえこ

房子

たけし

邦代

澄子

玲子

注湖

政子

喜美子

振り向いたあの日重なる青春譜
振り向けと引つ張る君の磁力線
振り向けば蛇行ばかりの足の跡
振り向けば七色の虹立つように
振り向かぬ若さがあつて一直線

富柳会

池

大根の白は何にも希まない
横道にそれた話がおもしろい
おもしろいほど儲かつたのは内緒
まがいはいはない青空が保証人
横を向くドミノ倒しが嫌だから
隠し事すればするほどおもしろい

末席に連なり風を読む野心

金額で違う戒名など要らぬ

起承転結のドラマいま佳境

持ちきれぬ感動詰めた宝箱

こたわれば連鎖底なしの沼へ

感動を抱いて斜陽とたそがれる

幸せと感じることもあるひとり

漫画家は渋い顔してペンを取り

語り終え木の葉一枚枝を去る

連呼したあの時の顔今の顔

連作のさかぬ男へ接木する

何故だろう小さな石に蹴蹴く

一蓮托生串柿にされた私

方言を纏う遠野の自在鉤

恋の風キュンとハートに感じたい

欲のない素手で感触たしかめる

森子報

アキ

扶美代

和子

奈保美

淳司

幸一

富美子

深雪

巳代一

英子

萩乃

浩子

キミエ

高鷲

一慧

治朗

紅紫朗

幸代

夕子

亮幹

奏子

鐘造

神も国語も脱いでくのにの酒
感性を鈍らせたたかに生きる
秘密握つて夫の顔を眺めてる
九条の今日から語り部になろう
ベン固れるまで連綿と戦の絵
何食わぬ顔が並んで披露宴
連れ添つた花よ風よありがとう

岩美川柳会

石谷美恵子報

ゆつくりと二人で過ぐす雪の宿

少年よゆつくり答出せばいい

ゆつくりと月と遊んだ露天風呂

ゆつくりと煩惱を消すうまいお茶

客寄せの効果はつちり蟹の汁

五厘やいとギツクリ腰によう効いた

温泉の効果は猿も知つていた

百葉もサプリメントも効かず近き

寝て見るとテレビ体操効果なし

百均のスカーフ首にしゃれてゐる

札幌の効果裏口すつと聞く

素つた手を絶品にする袖子の皮

父さんの手打ちの麵が呻らせる

年越しのそばが眼鏡をくもらせる

ラーメンが冷えた体を春にする

主治医から麵類食べと処方され

もう一度きれいな声で呼ぶあなた

結び目を下にずらして御香典

震度六男結びは耐えている

ゴチャゴチャと母が結んだ里の秋

欣之
順子
シマ子
ダン吉
初太郎
仲雄
森子

圭一郎
一瑤
重忠
きみ子
孝男
蟹郎
よしえ
公乃
和子
雅女
完司
一京
公子
裕子
かつみ
螢
石花菜
はるお
睦子

大吉のみくじを結ぶ枯れた枝
愛ですよ体よく妻に縛られる
縁結び神の手抜きが増えてきた
目の高さ合わせゆつくり不満さく
仲人の結ぶ言葉がながたらし
温泉で長寿の効果試してる
結ぶのも解くのも金が横たわる

高知川柳社

川竹

松風報

背の高い妻に履かせぬハイヒール
アメリカの誤算原油が高くなる
化粧品高い品からよく売れる
台風が野菜に高値付けて去り
つべんに昇ると四面楚歌になる
観覧車最上段で実る恋
展望台みたいな父の肩車
相談に乗るから来いと太い貌
石段に鈴が鳴るなると七五三
王様を太らしている蟻の汗

出世には無縁に生きてコップ酒
鎌を振る土へ肩書きなど無用
出世して失うものの二つ三つ
出世して前と変らぬ低い腰
出世した人が本音を仕舞い込む
蟻の列誰も出世を考えず
出世劇終わってからの友の数

むらくも川柳会

毛利

御婚約発表今日は大安日

和枝 茶子 たぬ 節子 静生 菖子 美恵子 かず子 暖 京子 功 快風 孝雄 圭二 哲史 幸 良雄 千恵子 美々 まさ子 てるみ 悦子 典雄 和江 幸報 秀子

秋風がボストの底へ落ちた音
泡立草我もの顔に野をうめて
足あとを残して猫は盗み食い
敬老の長寿の集い和やかに
その先を思えば迷路からむ糸
長雨に洗たく物も干し場なく
逝きし娘の瀬戸の花嫁歌ならぬ
神の国さすが台風通り過ぎ
片付けて物と心を整理する

木枯らしが師走の町をせきたてる
腹を据えたがたしなで生きている
年末の掃除もがたがた無事終り
木枯らしに一葉が枝にしがみつく
がたがたと足と腰引く牽引器
がたがたの身体いたわり撫でさすり
男とはがたがた言わぬ意地がある
心外な風が千里の外にある

うぶみ川柳会

小谷美ツ千報

過保護してミスバランスの肥満の児
バランスが崩れて世相荒れ狂う
魚好き脂ののつた鯖を買う
余熱まだ忘れず追った木瓜の花
ほととぎしが冷めないように胸に抱く
まだ余熱あるからきつとうまくいく
母の骨余熱が残るのどほとけ
ゆき摺りの風が落ちていた余熱
いざという時の尻尾にある余熱
哲学の道想いに耽り独りゆく

恵美子 八重子 ます美 寿 ふうえ 美喜子 喜美 昭子 美保 克子 幸 明朗 信夫 英男 定子 彰 秀夫 護 光 常正 静生 あづま 芳江 重忠 ひろ子 美ツ千 くに

新聞に耽ても本はこつくりさん
耽るほど新聞読めぬようになる
年を取る思案に耽るお爺さん
独り遊び上手に耽る退職後
読み耽るうちヒーローになつており
小半時耽る故郷の雪月花
たんだんと枯れて風には逆らわぬ

三幸川柳教室

古久保和子報

弾けるような笑顔の先にある人
豊かさの中人氣出て来た千枝田
無印でかくれた人氣持つている
絶頂の人氣へ飢えてくる心
福耳と言われ得した試しなない
蚊一匹耳障りして眠られず
耳底に父の教えがこびり付く
氣にいらぬ話ばかりの外耳炎
介護にも温い手となる聞き上手
同窓会耳栓一つ持参する

自己主張するに程よいイヤリング
寝耳に水こら返りを起こしそう
福耳の財布の底が抜けている
聞く耳は持たぬが舌が一枚ある
福の神しずかに耳をなでて去る
耳栓をすると大河の血の流れ
耳朶の硬さと書いてあるレシビ
夕方になると元氣の出る私
あれこれと思ひ溢れる秋の午後
軽い軽いしがらみ捨てた昼下が

和 かつみ 螢 雄人 天人 登美枝 宣子 みね イセ 靖子 清史 孝義 信男 義男 かずみ 幸 昇 当代 碧 桂香 智三 章子 次根 和子 武 准一 起世子

人生の午後秒針が早くなる
エンジンで切つて昼寝もいい葉
名画座の隅でしばしの白昼夢
反古にする午後のシナリオ書いている
午後何時頃だろう私の命
直談判する気旅立ち午後にする
長くなる午後へ続いている自問
調子よい返事をするが重い尻
体調がよいから今日も医者通い
調子いい脳は無限の旅をする

川柳やがわ

森

迷路から助けてくれた優しい手
辛口の言葉で諭すのも好意
好意持つライバル傍にいるあせり
喉仏無言の訳を溜めている
命令を無言でされたことがある
もの言わぬ動物たちが恐ろしい
蟹料理食べてるときは無言劇
秋ことり愛は無言の方がいい
母さんの無言家庭を凍らせる
信号をただ待っている車椅子
からだ中信号がくる老いの日々
信号のメロディーを聞く白い杖
星が瞬く明日は吉のシグナルか
SOS大きく書いた災害地
温暖化地球の危険信号だ
赤信号なんでこんなに長いのか
赤信号優越感の救急車

さち子 登美代 朱夏 町子 保州 千秀 公子 徑子 嘉平 かず子 茜報 日出子 庸佑 寿子 ためり たもつ 典子 忠央 美代子 恵子 房子 一笑 三郎 みつ子 かつみ 高栄 弘風 度

生かされている欲びに陽を仰ぐ
愛嬌を枯らさぬように生きてます
死んだふりして生きるこつ知ってます
今ここを生きるもみじが燃えている
ときどきは部品を替えて生きてます
道楽のひとつに助けられている
道楽のおどり見せられくたびれる
道楽はわたしの蘇生する時間
人嫌いな道楽自分流
永代供養寺を信じる外になし
争いはこの世に人の果てるまで
愛し合うのが永遠だと思ふ
永遠を錯覚させて星光る

岬川柳会

八十田洞庵報

一炊 とし子 朝子 義子 月子 さち子 茜 柳弘 仁洋 弘一 天笑

貸農園こは私の運動場
蹟いた石に驕りを悟られる
一句出来るまでに大根煮とろけそう
鍋の底ついた頃は皆元氣
七光りあって驕りが見えかくれ
誰のため軍事パレードする驕り
あの着物帯まつたりと色が合う
震度七地域の絆光つて
束の間に幸せ奪う世の乱れ
束の間に微笑が凍るその知らせ
暫し脳謀叛をおこすまだら呆け
師の宴あつと言う間に時終る
人生の歩みも調和とれて老い
喪の服につり合う薄い紅を引く

フジ かつみ いさお 桂子 昭平 六平 扶美代 洞庵 真一 泰洋 吐来 敏 庸佑 ヨシ枝 ダン吉 耕策 一知 章司 みつこ 美代子 りつえ 一壺 重人 喜久子 獺沓 和夫

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

住みついた貧乏神が出ていった
ベランダに灰皿置いて住み分ける
住む場所はどこでもいい君となら
このへんで入りましょうよ本題に
町内会まずは雑談花が咲き
雑談でちゃんと言いたい事をいう
雑談で軽い悲しみなら消せる
縁起物の猫もいらなら消せる不況
いららとした方が負け口げんか
産声等待つて立つたり座つたり
江戸心がいらいらさせる京言葉
外出心がこもる妻のメモ
一枚のメモが犯人追いつめる
判読を自分の書いたメモ
父さんのメモが喋って浮気ばれ
メモ取られ私の声が裏返る
メモ片手なれぬ手付のフライパン
メモ通り買って値段を叱られる
メモひとつ政治の裏をかきまわし
一億円のことは閻魔のメモにある
ありがとうわたしのメモに書いておく
エリートは近道抜けて天下り
線路には近いが駅に遠い家
便利屋のように近くにある実家
近づけば花にも美男美女がある
にここ近寄られると気味悪い
自分史を少し飾って胸に描く

三つまで数えて眠る手術台

川柳ふうもん吟社

杉本

孝男報

たけし

忍の字がギヤルの辞書には載っていない
共生を知らぬ人間恥を知れ
神様を揺さぶっておるギヤルみ興
約束を破ってからの向い風
それぞれに持ち味のある子沢山
破られた記録に闘志湧いてくる
ひたすらに咲くのも散るも私流
心臓が破裂するよな恋してる
戦中戦後破れかぶれる恥を知れ
親の脛いつまでかじる恥を知れ
アラインギヤルが塗るから映えるのだ
良心を平気で捨てる恥を知れ
ギヤルのそはよわった鼓動鳴り止まぬ
儲かれば偽も厭わぬ恥を知れ
ギヤルだとしていつかは母の心知る
リストラに破れかぶれの男道
七転びだけで済まない下り坂
ギヤル御興神もニタニタ笑い出す
流されて望まぬ役も引き受ける
酒に罪させて逃げる恥を知れ
追い込まれ破れかぶれる捨て身わざ
教授までするかセクハラ恥を知れ
破っても消えない過去にしみがある
ギヤルだって裏と表は知っている
ギヤル心理理解できない歳となる
被災地で偽ボランティア恥を知れ

洋々 金祥 蟹郎 美恵子 節子 裕子 三津子 朋恵 一鼓 昌京 茂登子 富子 善夫 志緒 一粋 益子 一瑤 春名 公子 無限 敬之助 義徳 雅江 はつ江 宗明 由美子

後ろ指さされてないか恥を知れ
コンバクト開いてギヤルが策を練る
六法の裏で暗躍恥を知れ
輪の中でもがき続けている個性
いずも川柳会 佐藤 治代報
一歩引き斜め後ろの母を見る
顔色でこ機嫌斜めとすぐ判る
鉢の水危機一髪にうらたえる
品の良い祖母のマナーは魅力的
私だけ斜めに向いて写ってる
玉手箱まだまだ開ける気になれぬ
置きざりの箱の中身は私です
背信は捨てて下さい紙の箱
いたわって斜めに歩く上り坂
夢ひとつまだ開けられぬ箱がある
戦の無い背広斜めにぶら下がり
ノリノリの手拍子天を突き刺して
手拍子のように鼓動は打っている
一歩前へ出ると無礼と叱られる
硯箱今日はめでたい墨をする
斜めから泣き顔とられ演技責
手拍子で東天紅を迎えます
傾いた家で真つ直ぐ生きている
時々はびっくり箱を開けている
箱の中過去がはざりと顔を出す
ブライトと見栄が斜めに交差する
手拍子についつい乗って来る私
枯れすすきと手拍子がとりづらい

圭一郎 毅 諏訪男 孝男 スズコ 啓三 和歌子 邦子 孝亮 治代 彬 すみこ まこと 玲子 浜丘 芳山 桂子 昭二 房子 左余 久枝 昌枝 歌子 多喜 多輝子 美佐子 茂美

手拍子に誘われ森を出てしまふ
北風の芒手拍子するように
手拍子でせめて妥協の線を引く
酔うたら話斜めになつてくる
わたしだけの愛の小箱に蓋をする
手拍子にボクも松ぼっくりも落ちた
パンドラの箱を開いた悔い一つ
川柳クラブわたの花 井尻
いい調子今日は信号青ばかり
時代越え名画教える主題曲
よい妻にめぐりあえたとおどてられ
盲導犬合図するまで動かない
ウインクもうまく出来ずに黄昏れる
道筋をつけて肩の荷軽くする
バランスのとれた家計は妻の技
不即不離ゆっくり泳ぐ老いの紐
聞き役に回る世間を広くして
喜怒哀楽あつて一生エンドレス
ダラダラと生き青春の名を借りる
心の傷日にち葉がじわり効く
鬼瓦にらみかかない世を嘆く
定年後魅力なくした盗み酒
エリートもマニア流され年の暮れ
コップの水溢れ静寂手に残る
始末書へ二度としましめ印捺す
近すぎてつい長居する縄のれん
りハビリの明日を信じて靴の紐
あわて者うっかり引受け投げ出せず

寿美 文子 多賀子 叮紅 きみえ 章峰 ちかし 八寿子 はじむ 道子 宏至 ミツ子 君枝 宏 一風 きらり 欣子 幸枝 晴美 俊子 浩三 (本)たえ子 (赤)妙子 ますみ 敏男 かつみ たか子

亡き夫が呼んだ気がする虫の声
パソコンで年寄りに恥かかすなよ
避難所で近くの他人支え合い
なにもかも投げやりになるこの猛暑
七十年遠く近くに夢のあと
大国の紐がジユゴンを追いつめる
はっきりと君の虚勢が写メールに

倉吉川柳会

竹信

照彦報

義明 春枝 知佐子 美代子 民 正純 ふりこ

超自然現象でない手品です
父よりも超長生きの八十路踏む
幹事して超過予算は役損か
二次会は赤提灯で超豪華
ヨソ様はおぼはん捕え超人気
さらさらと米研ぐ朝の割烹着
砂時計さらさら落ちて電話切る
信仰にさらさら欲にさらさら
さらさらと冬のソナタに染まります
貯金する気持さらさらあります
さらさらの流れ目高と遊んだ日
点と丸無くてさらさら読めぬ文
さらさらの頭だ風が吹いている
手と足と三位一体の脳である
灰になる身体ホタルになる心
五体満足何が不足か死に急ぐ
ゆず風呂に身体温ため今日終る
身体からガス抜きせよと音たてる
新体操真似てギョクリ腰になる
一二三身体鍛えて百歳目指す

玲坊 ゆり子 重忠 泰輔 和枝 よしえ 京子 螢 康子 やえ 和子 日出子 修 十三男 石花菜 悠子 常代 賀寿恵 睦子 風露

飛行機に搭乗身体検査され
この辺で泣いてくれたら救われる
岩底の命日本中が救う
親だけの愛で救えぬ拉致事件
この乱世居るのいないの救世主
ガン告知医師の笑顔に救われる
被災者を救う募金の列に入る
自負する体赤信号をちらつかす
サマワより新潟救う金を出せ

翠洋会

谷口

手作りのお節で祝う初春の膳
作られた笑顔の裏にある悲哀
可哀そう熊も作物不足なり
恐怖心息せき切つて娘の下校
宴の席チョコ一杯で安来節
籍抜いてやつと一人の旅の空
解けるならクイズでもつと稼ぎます
○×で興味引き込むワイドショー
夫婦してクイズマニアの惚け防止
クイズめくボクの行く末神に問う
ひらめいて画面に答え叫ぶ老母
失敗を笑えばなしにするゆとり
知りません忘れましてすむ政治
ふわふわの仔猫に頭で使われる
六法に縁なき暮し茶粥炊く
家族とは丸くなけりやと妻が言う
メールより電話が早いわたしです
お鏡が横で待つてるクリスマス

小生 萩江 次男 祐子 (前)喜美子 醉芙蓉 かつみ 勝彦 照彦 義報 志華子 昭 観子 春 満作 蛙 照子 良一 恭昌 富子 桃花 さと美 千梢 尚士 絹子 蕉子 日の出 会美

友だちもみんな元気で十二月
善人とおもう大きな笑い声
沙羅の花どうせあの世は一人旅
このままで終りたくない枯葉路む

サークル檸檬

吉田あずき報

近すぎて大地の恩に気づかない
世の中はこういうものやと諭される
スポーツ欄にやりと閉じて出勤す
出逢いと別れ心揺らいでいる師走
愚痴言えは言うほど老いが加速する
終章でまだ迷路から抜け出せぬ
鯨舌が淋しい顔にしてしまふ
なんのかの思い返すにいい月夜
また今日も大事な恩に気付かない
ポケットに父母への恩を詰めている
もろもろの恩清算もせず暮れる
歳重ね生かされる恩しみじみと
落日へ恩人の顔ふとよぎる
本棚に恩積み重なってゆくばかり
六十年まだ生きている生きてやる
都会から寝にだけ帰る市に市長
川柳エスポ 山本 三郎報
人々の暮らし断ち切る震度七
冬ソナタに負けぬ純愛戦中派
自販機は年中無休の頑張り屋
お販舞に諭吉一葉英世添え
定職についたか娘軽い靴
義 理恵 正坊 美籠 ともつ 千代 哲夫 遠野 楓楽 房子 扶美代 美籠 みつ子 光久 義子 あずき いわゑ 希久子 正坊 棲世 三郎 三郎 三郎 一歩 団地 とよ子

残雪の穂高の山に青春語
 いままで無いのが金と力なり
 沖繩の旅で戦争背負わされ
 愛し子の寝息にはと安らぎを
 硝煙の止まぬイラクに胸痛む
 物忘れ脳の余白に見放され
 天狂う地もまた狂う温暖化
 禁煙を成功させたバスツアー
 大原の里錦秋の裾裾様
 人生の最後の最後匂う恋
 被災地を横目に遠い国援助
 幾年の箱に納める夫婦箸
 宿命を軽く捉えて強くなり
 戦争の無き国であれ永遠に
 揺れ止まぬ被災地豪雪も間近
 路地に灯をともしたように柿熟れる

堺川柳会

河内 月子報

星花 文好 鈍甲 ゆき子 高栄 はつよ 任有 さち子 一幸 昭一朗 一炊 とし子 みさと 惠美子 ルイ子 れい子

道連れと道草しつつ半世紀
 福袋まよわず重い方にする
 道連れがふつと消えたらどうしよう
 腹掃除みかん袋のまま食べる
 信号を走って渡る癖がある
 道連れは肩の凝らないおたやんと
 風邪ひけば横で夫もクシヤミする
 取り敢えず香典袋さげてゆく
 親切を愛と間違え失念す
 せつかで誤解の種を蒔いている
 片隅にレモン転がる戦あと
 約束の時間待てず先に回り
 道連れにされたら困るイラク戦
 道連れの八方美人気がもめる
 道連れは詩人道草ばかりする
 一つまみの塩が道連れ隠し味
 かあさんのレールに乗って忙しい
 肝臓に札を言いつつ苛めてる
 道連れが陽気ではと出来ました

川柳塔みぞくち

小西 雄々報

文梓 五月 寂子 さくら りつえ 萌 天笑 舞夢 篤子 小雪 甚一 惠勇 扶美代 潤子 かりん 和夫 月子

台風のオンパレードに泣かされた
 いい返事待ってそわそわ眉を引く
 地図出してそわそわ見てる旅行前
 川柳さんだ 北野 哲男報
 鐘突きは百円也という無心
 百八つ数えた頃が懐しい
 年の暮れハープの香りサウナ風呂
 人生の味見が出来た珊瑚婚
 薄味で腹は八分と嫌な医者
 川柳人味のある人寄ってくる
 譲り合いいつも空席なる上座
 振り向けばあれやこれやと積み残し
 残された父の日記は生きている
 十二月何も変らぬひとりもの
 老いてから無病息災をう勝手
 丸干しを焙り一人の気まま酒
 川柳塔のぞみ 播本 充子報
 降る降らぬわたしの傘の半開き
 クリスマス川の濁りを見えています
 コーヒーが甘くてけじめつけられぬ
 自立する少し淋しい子のけじめ
 人妻と襖を開けて飲んでる
 白黒のけじめへ酒が回らない
 老父よりも前は歩かぬ老母だった
 クリスマス来ると根雪になる津軽
 いざという時に待ったをしたくなる

静江 正光 雄々 正和 歳子 雅司 開子 五月 順子 一之 章子 千代 朋月 忠 哲男 美代子 千里 雅子 桃花 朋月 典子 つよし 順風 篤子 保州

危機一髪スパーマンは来てくれる

折り返し点から風になる男

蝶の羽化命の神秘児と見詰め

演歌では様にならないクリスマス

ノクターン冬のソナタのクリスマス

仏壇に遠慮もせずにクリスマス

若者のためにだけあるクリスマス

イラクにもサンタが渡る橋がある

引き際の美学知る人知らぬ人

花束がこんなに重い定年日

嫁と姑境界線に見るけじめ

味噌汁の冷めない距離にあるけじめ

一日のけじめに三度食事する

気短でつい白黒をつけたがる

殺し横行けじめなんかはない親子

喜びが多かったかも除夜の鐘

子の舟が今視界から消えてゆく

エビローグ僕は懺悔をするばかり

豊中もくせい川柳会

江見

見情報

ケーキカットもう三度自よ馴れたもの

老いの坂一つ越えそな年の暮れ

仏教もケーキ買いますクリスマス

旅先の友はハガキに一句だけ

喜怒哀楽なんでも食べているポスト

郵便にお茶を振る舞う過疎の村

民営化すればポストが遠くなる

やめといえケーキをあてに飲むビール

捏造があばかれてゆく拉致疑惑

良一

権悟

方子

光久

柳弘

(吉)修

千代

詠路

尚士

北洋

和香

慕情

喜男

哲男

妻子

賀世子

充子

恭昌

郁子

都代子

タミ

慶子

幸雀

尚士

正坊

宇乃骨

禄骨

エース級むぎむぎ敵に渡すまい
むぎむぎと背中を見せた訳でない
目の黒いうちに使おうありがとう
変わりゆく町にも世にもはつとかれ
失敗が重なり妥協癖がつき
儀礼的手紙だんだん字がまばら
怖いのは力を抜いている力
天国から来る郵便を待っている

巴子

庸佑

玲子

千津子

求芽

重人

高栄

美しく老いてゆきたい歳となり
スパーの目玉に妻の小半日
最近ば教師に教師要ると聞く
手の内を見せてむぎむぎ墓穴掘る
マナーの悪さ睨みつけてる仁王の目
広告の郵便だけの今日でした
女房が上司にも見え二日酔い
恋文も脅迫状も呑むポスト

和子

啓生

満寿已

隆

萬的

見清

則彦

寿美子

エッセー

にわとり合掌

酒井一壺

残飯などがほとんどでした。裏庭などで放し飼いでいました。伸び伸びと自然に生きていました。当時卵は貴重品で病氣した時などに初めて食べさせられ、親戚や友人の病氣見舞い以外に使っていませんでした。私などは貧乏暮らしだったので、高嶺の花といましようか、あまり食べた記憶はありません。

実は私の家で卵が目的で、ひよこから二三羽飼ひ、狭い裏庭で育てていました。一三年して、そのにわとりを殺して食べようということになり、母から不器用な私が処理するよう言われました。早速裏庭でとりの首をぐるぐると回しひねり足でおさえること三分で、ぐったりしました。これで死んだようです。ところが何となく、すぐ台所から出刃包丁を持って裏へ出ました。まず首をちよん切るためです。ところが何となく、すぐ台所から出刃包丁を持って裏へ出ました。まず首をちよん切るためです。ところが何となく、すぐ台所から出刃包丁を持って裏へ出ました。まず首をちよん切るためです。ところが何となく、すぐ台所から出刃包丁を持って裏へ出ました。

それ以来、今でもにわとりの顔をじつと見られます。手を合わせ謝っています。命の大切さをひしひしと感じたからです。

とは言っても、今でも毎日のようにタマゴ料理は、いろいろ感謝しながら載せております。にわとりとタマゴへいつもありがとう

卵だけ新型生まれそうもない

一壺

柳界展望

土橋はるお

○第23回没句川柳供養大会

「川柳ふうもん吟社主催」は、12月12日全労済ビル大ホールで、180名の参加を得て開催された。当日の本社関係者天位は次のとおり。

風よ吹けひれ伏すことは
何もない 鈴木 公弘
木霊してやがて不明にな
るいのち 鈴木 公弘
赤ちゃんと勝る柔肌見た
いもの 夏目 一粋

○第24回川柳塔みか月川柳大会は、12月5日国民宿舎山紫苑で151名の参加を得て開催された。当日の本社関係受賞者は次のとおり。

「鳥取市長賞」

子をたんと産んで巣立つて
いくいくさ 米田 幸子

「鳥取市議会議長賞」

いつの世も月から降って
くることは 八木 千代

「新日本海新聞社賞」

纏まると大きな岩が動き
出し 河内 月子

「こうぎん鹿野支店長賞」

門守る男は蜂の貌をして
倉益 一瑠

「ジゲ起こし推奨知事訪問
記念賞」―地元会員の入
選句数から決定―

高くする 高瀬 霜石

なおこの句は句碑を獲得。

5月21日笠岡市古城山川柳公園で除幕される。

○平成16年度いずも賞の本
社関係受賞者は次のとおり。
「いずも賞」
庇い合いぶどうの房は熟
れていく 伊藤 玲子

○平成16年度読売新聞とつ
とり文芸川柳年度賞の本社
関係受賞者は次のとおり。

「年度賞」

泣き顔に似合う私の服が
ない 下田茂登子

「佳吟賞」

影という影をなくしてゆ
く日本 夏目 一粋

○西宮北口川柳会では、平
成16年度年間賞を次の通り
決定した。

「カップ永久保持者」

奥田みつ子

「優秀賞」○内は順位

①奥田みつ子 ②西口いわ
ゑ ③田辺鹿太 ④門谷た

ず子 ⑤長浜美龍

▽表 彰△

○石川侃流洞氏（山口県・

同人）は、60年以上にわた

る川柳指導の功績により、

山口県知事から山口県文化

功労賞を受けた。11月2日

に表彰式が行われた。

▽出 版△

○酒井一壺氏（羽曳野市・

同人）は朝日なわ柳壇入

選百句を記念して手作り句

集「百句」を出版。（A5
判20頁）

▽お供拝受△

○亡夫（金村青湖氏）供養

として金村和子さんから金

一封拝受。

○亡夫（堀江正朗氏）供養

として堀江芳子さんから金

一封拝受。

▽訂 正△

○1月号P54上段16行目、

江国→江國 P174段1行

目、同人→理事 P113下段

ワク内9行目、浅井→浅野

常任理事会11月11日（火）出

席者19名 ①代表者会議1

月29日（土）16時 案内状

発送59件、締切20日 司会、

次第、会のもち方を討議

②同人名簿進行状況報告―

4月号に同封予定 ③新人

を対象としたパンフ作成に

ついて ④その他

次回常任理事会11月7日

（月）9・30・12 たかつがー
デン 3F菊

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
西宮北口 川 柳 会	14日(月)午後1時から ほどく・達人・冷え・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南西出口徒歩3分 プレラにのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわえ
高槻川柳 サークル 卯 の 花	17日(木) 正 午 から 灯る・一本気・わて・ピンチ 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1031 高槻市松ヶ丘2-8-9 上砂真笑
岸 和 田 川 柳 会	19日(土)午後1時半から 磨く・昔・目当て・毛布	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-307 長谷川呂万
川 柳 藤 井 寺	20日(日)午後1時から 血圧・落書き	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公団1-105 高田美代子
岬川柳会	20日(日)午後1時半から 温泉・寒い・交番	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川 柳 ねやがわ	20日(日)午後1時半締切り クイズ・寒気・魔法・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	21日(月)午後1時から 中止・ニュース・すっかり 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
南 大 阪 川 柳 会	23日(水)午後6時から あくび・隠す・しっかり・眉間	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブ わたの花	25日(金)午前9時半から 喝采・矛盾・抱く・にこやか	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川 柳 同 好 会	26日(土)午後6時から ロボット・冷たい・地図・肌	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 会 川 柳 会	27日(日)午後1時から 一番・正義・墓・「ライン」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	27日(日)午後1時から ずっと・エース・脱	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京 都 塔 の 会	28日(月)午後1時から 源・モデル・多分	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川 柳 塔 みぞくち	28日(月)午後7時半から 降る・鏡・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6629-6914) へご連絡ください。

2 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	3 日(木)午後 1 時から 振る・絹・景気	奈良市立中央公民館 4 F (近鉄奈良④出口歩 5 分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼 崎 いくしま	4 日(金)午後 1 時から 軽い・風邪・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
城 北 川 柳 会	5 日(土)午後 1 時半締切り 動く・節目・ほやほや・自由吟	老人福祉センター 3 F 千林大宮駅 3 番出口の左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
富 柳 会	5 日(土)午後 1 時から 梅・リズム・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	5 日(土)午後 1 時から 数・トンネル・倒す	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 唐 津	7 日(月)午後 1 時半から 壺・スーツ・軽い	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	8 日(火)午後 1 時から 筆・ジンス・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
ほたる 川 柳 同 好 会	8 日(火)午後 1 時から 王・誘う・白い	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール 蛸池駅駅前ビル 5 F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
堺川柳会	12日(土)午後 1 時から 狭い(共選)・安心 み・ず・な(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町 2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 打 吹	12日(土)午後 1 時から 意地・超・走る	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博丈
川 柳 塔 ま つ え	12日(土)午後 1 時半から 舞う・豆・髪・がたがた	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崧丘
川 柳 塔 みちのく	12日(土)午後 4 時から 親指・腐る・圧力	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ 2 階「川柳道場」 〒036-0161 青森県南津軽郡平賀町杉館字宮元53-1 小寺花峯
八尾市民 川 柳 会	13日(日)午後 1 時から リーダー・猫・叩く・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 わかやま	13日(日)午後 1 時から 列・流氷・ゆとり・(卵料理)	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良

編集後記

☆1月号から連載の木津川計先生の、「川柳塔の川柳讃歌」を読んで下さったと思う。川柳界の外に居られる

故の、一味も二味も違う知的で垢抜けのした鑑賞文から、「川柳塔」に新鮮な風をもたらすように感じる。

☆先日、先生にお目にかかったら「川柳塔欄の句を、全て読ませてもらっていただきます」とおっしゃっていた。熟読玩味の上で選ばれた句の作者を、ひそかにうらやんでいる次第である。

☆昨年11月28日付朝日新聞朝刊の「折々のうた」(大岡信)に、「挨拶もなく脾臓とは別れたり 今川乱魚」が取り上げられた。

☆85年から続いているこの欄には、古川柳は何度か取り上げられたが、現代川柳

では初めてのことである。本音を言わせてもらうなら遅すぎたと思っている。これを機会に、現代作家のいい川柳をどしどし取り上げていただきたい。

☆乱魚氏は日本川柳協会の理事長で、川柳界のために大きな働きをして下さっている。癌摘出手術4度にわたる闘病記を『癌と戦う—ユーモア川柳 乱魚句集』

として出版されているので、機会があれば読んで下さい。☆「災」で表わされた平成16年のしめくくりの日に、珍らしく大阪市内でも1センチの積雪があった。「大晦日裸のように雪が降り 高田美代子」それが昨日のことのように思われるのに、もう一月。年々、月日の経つスピードが早く感じられるのは、歳のせいではなく忙しさのせい、と思うことにしよう。

(ふ)

ひとこと

近頃思うこと

ニートと言われる、働くことに希望を見出せぬ若者が増えているという。15歳から34歳までの若者で家事も通学もせず未婚で、学校卒業後も働いていない若年無業者で、52万人を数えるという。

わが国では、いい大学を出て、有名企業に就職することが成功への道と考えられて来た。

年功序列の時代は終わり、過度の競争社会の現出に適応できない若者が、ニートやフリーターになる遠因かも知れぬ。

たくさん職種が関わりあって、社会生活が成り立つものであるから、小さい時から実際の仕事を学ばせ、働くことの意義と喜びを体得させることが大切である。

人生の先輩として親は子に相応しい人生の相談者役であって欲しい。

(高橋 岳水)

○旧聞というには犠牲の大きさに胸痛む新潟中越地震では、大勢の村民が不自由な避難所生活を強いられた。

○ある日ひとりの音楽家が避難所を慰問した。幼少時に目を思い、十歳でバイオリンを始めた天才バイオリニスト川島成道さんである。

○広い体育館に「ロンドンデリーの歌」が流れる。子供から高齢者まで、男女を問わずみんなシーンと聴いている。涙を流している人

くれた心が透明になっているのが分かる。

○テレビを見ながら私の心も濡れた。バイオリンの音優しく包み、悲しみを癒してくれる。それに引きくらべ、川柳は私たちに癒しを与えてくれるだろうか。

○寂しい人に、悲しい人に、人生に疲れた人に、寄り添わない人の心にそと寄り添い、傷口を癒し勇気を与えてくれる川柳、そういう作品に出会いたい。

(朱)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（4月号）地名

市 県
姓・雅号

きりとらせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

初歩教室	課題吟 (3句)	茴香の花 (3句)	愛染帖 (3句)	水煙抄 (8句)	川柳塔 (8句)
「立派」(3句) 三宅保州担当	「軽い」 「スー」 「ツ」	「壺」	「都倉求芽選	「石森利昭選	「河内天笑選
			「國森武子選	「波多野五楽庵選	「奥田みつ子選
			「政岡日枝子選		

4月号発表(2月15日締切)

5月号

課題吟 「葉」「放す」
「アルファ」
初歩教室 「謝る」

本社2月句会

会費	席題	兼題	おはなし	とき
1000円	1題 当日発表(各題2句以内)	「芽ばえ」 「喋る」 「それから」 「道」 「食べる」	木本朱夏 中井アキ 坊農柳弘 玉置重人 宮口笛生 河内天笑	2月7日(月) 午後1時開場・2時締切り 2月に限り会場が変わるので注意下さい。 ところ たかつガーデン(表紙裏を参照下さい) 天王寺区東高津町7-11 電06・6768・3911
投句料 500円				

本社3月句会 7日(月) 午後1時から

兼題 「何」「仰ぐ」「慕う」
「まさか」「人間」

第23年度 夜市川柳募集

第9回「信号」 天根夢草選
ハガキに3句 2月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用して下さい。
 - (2) 愛染帖・茴香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限り、ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用して下さい。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記して下さい。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料76円)

半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)

「三〇五年(平成十七年)二月一日発行

編集者 河内天笑

発行人 河内天笑

印刷所 美研アート

大阪府阿倍野区明町二丁目一六

ウエムラ第2ビル202号室

〒545-0005

発行所 川柳塔社

電話(06)6768・3911

振替 〇〇九八・一五〇〇〇六八番

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR 桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪(06) 6771-4861(代)

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。

あなたの思いをかたちにします

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178